

松江市文化財調査報告書 第192集

L.C.C. ういんぐ移設事業に伴う発掘調査報告書

堤ノ上遺跡

令和元(2019)年9月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

松江市文化財調査報告書 第192集

L.C.C. ういんぐ移設事業に伴う発掘調査報告書

つつみのうえ
堤ノ上遺跡

令和元(2019)年9月

島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

例 言

- 本書は、平成 30 年度に実施した L. C. C. ういんぐ移設事業に伴う堤ノ上遺跡の発掘調査報告書である。
- 本書で報告する発掘調査は、社会福祉法人千鳥福祉会から松江市教育委員会が依頼を受け、公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団が実施した。
- 本調査地の名称・所在地は以下のとおりである。

(名 称) つつみのうえいせき 堤ノ上遺跡
(調査地) しまねけんまつもしきがしまちだちょう 島根県松江市東持田町 236 番外
- 現地調査の期間
平成 30 年 9 月 25 日～平成 31 年 3 月 20 日
- 開発面積および調査面積
開発面積 5.962m²
調査面積 3,800m² (1 区 : 1,000m²、2 区 : 2800m²)
- 調査組織

依頼者 社会福祉法人千鳥福祉会	理 事 長 山本 昌子
主体者 松江市教育委員会	教 育 長 清水 伸夫

【平成 30 年度】 発掘調査業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	藤原 亮彦
	"	次長	永田 明夫
	まちづくり文化財課	課長	飯塚 康行
	" 埋蔵文化財調査室	室長	宮本 英樹
	" 調査係	係長	川上 昭一
	" "	主幹	川西 学
	" "	学芸員	三宅 和子
	" "	嘱託	門脇 誠也
調査指導	島根県教育庁 文化財課	主任	幹勝部 智明
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理 事 長	清水 伸夫 (5 月 27 日)
		"	星野 芳伸 (5 月 28 日～)
	埋蔵文化財課	課長	赤澤 秀則
	" 調査係	主任	小山 泰生 (担当者)
	" 調査員	廣濱 貴子	
	" 調査補助員	宇津 直樹	
	"	門脇 祐介	

【平成 31(令和元)年度】 報告書作成業務

事務局	松江市歴史まちづくり部	部長	須山 敏之
"		次長	比田 誠
"		"	稻田 信
"	まちづくり文化財課	課長	飯塚 康行
"	" 埋蔵文化財調査室	室長	宮本 英樹
"	" " 調査係	係長	川上 昭一
"	" "	主任	幹 川西 学
"	" "	芸員	三宅 和子
"	" "	嘱託	門脇 誠也
実施者	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団	理事長	星野 芳伸
	埋蔵文化財課	課長	赤澤 秀則
	" 調査係	主任	小山 泰生 (担当者)
	" "	調査補助員	宇津 直樹

7. 調査に携わった発掘作業員

安達明男、井川 智、井川 洋、石倉光子、加藤恵治、金坂 昇、作野富士夫、千原 昌、高橋保夫、宅和正雄、建神結香子、土江 徹、土江伸明、中田風歌、長岡雅治、橋本貴博、深津靖博、福田健一、細木澄子、松原 平、峯谷一雄、山田桃子

8. 本書に記載した遺物の復元・実測・浄書、遺構の浄書は以下の者が行った。

宇津直樹、角 優佳

9. 発掘調査および報告書作成にあたっては、以下の方から多大なご指導・ご教授・ご協力を頂いた。記して謝意を表する。

島根大学 法文学部 教授 大橋泰夫

島根県立古代出雲歴史博物館 学芸員 澤田正明

堺市文化観光局文化部文化財課 鶴谷和彦

10. 本書の執筆は、第 1 章を松江市埋蔵文化財調査室が、第 2 ~ 4 章を小山が執筆した。編集は、松江市埋蔵文化財調査室の協力を得て小山が行った。

11. 本書における土器区分・分類・編年は以下を参照した。

[弥生土器]

松本岩雄・正岡睦夫 1992 『弥生土器の様式と編年 山陰・山陽編』 木耳社

鹿島町教育委員会 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』

[土師器]

島根県教育委員会 2013 『史跡出雲国府跡 - 9 総括編-』

[須恵器]

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第 11 集』 島根考古学会

島根県古代文化センター 2010 「出雲地域における古代須恵器の編年」『出雲国の形成と国府成立の研究』
〔陶磁器〕

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年－九州近世陶磁学会 10 周年記念－』

12. 訳と参考文献は各章末に掲載した。
13. 本書に掲載する土層の色調は『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修：財団法人日本色彩研究所色票監修に従って表記した。
14. 本書で用いた方位は公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。また、レベルは海拔標高を示す。
15. 本書における遺構名の表記は、以下のように略号を冠した。
SA : 標 SB : 掘立柱建物 SD : 溝 SF : 道路 SI : 壁穴建物 SK : 土坑
SP : 柱穴・ピット ST : 墓壙・埋葬施設 SX : 性格不明遺構 NR : 自然流路
16. 本書の遺構番号は調査時に設定したものを報告書作成にあたり、種別の番号に振り直して掲載した。なお、本文の説明上、遺構番号は主要なものについて連番で記載している。
17. 本書に掲載した遺構図は、各図に縮尺とスケールを配した。遺物実測図の縮尺は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器は 1/3、金属製品・銭貨・石製品は 1/2 を原則としているが、これに従えないものはその都度縮尺を明記するようにした。断面の表現は須恵器を黒塗り、弥生土器・土師器・陶磁器を白ヌキ、金属製品・石製品を網フセで示した。
18. 本書に掲載した金属製品の X 線写真撮影は、島根県立古代出雲歴史博物館のご協力を頂いた。
19. 報告書作成は、遺構図・遺物図は IllustratorCC2019 (Adobe 社) を用いて淨書し、図版レイアウトおよび原稿執筆などの編集作業は InDesignCC2019 (Adobe 社) を用いて行った。
20. 測量データ・出土遺物・実測図・写真等の資料は、松江市で保管している。

目 次

例言

第1章 調査に至る経緯 1

第2章 位置と環境 2

 第1節 地理的環境 2

 第2節 歴史的環境 3

第3章 調査の成果 7

 第1節 調査範囲と調査方法 7

 第1項 調査区の設定 7

 第2項 調査の方法 8

 第2節 試掘調査と本調査の概要 10

 第1項 試掘調査の概要 10

 第2項 本調査の概要 11

 第3節 層序の概要 15

 第1項 基本層序 15

 第2項 遺物包含層 17

 第4節 遺構と遺物 19

 第1項 建物跡 19

 第2項 加工段 34

 第3項 自然流路 36

 第4項 溝 36

 第5項 道路 37

 第6項 檻 40

 第7項 土坑 41

 第8項 墓壙群 47

 第9項 その他の遺構と遺物 58

第4章 総括 63

 第1節 堤ノ上遺跡の変遷 63

 第2節 近世墓群について 68

 第3節 結語 71

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第 1 図	鳥根県・松江市位置図	1
第 2 図	調査地位図	2
第 3 図	堤ノ上遺跡周辺の遺跡分布図	4
第 4 図	開発範囲および調査範囲図	7
第 5 図	調査グリッド配置図	9
第 6 図	堤ノ上遺跡試掘トレンチ配置図	11
第 7 図	調査前地形測量図	12
第 8 図	調査後地形測量図	13
第 9 図	堤ノ上遺跡構造配置図	14
第 10 図	基本土層模式図	15
第 11 図	調査区東西横断北壁土層図	16
第 12 図	調査区南壁土層図	17
第 13 図	遺物包含層出土遺物	18
第 14 図	SIO1 平面図・断面図	20
第 15 図	SPO1 平面図・断面図	21
第 16 図	SIO1(壁際土坑 SPO1) 出土遺物	21
第 17 図	SBO1 平面図・断面図	22
第 18 図	SBO1 出土遺物	22
第 19 図	SB02 平面図・断面図	23
第 20 図	SB03 平面図・断面図	24
第 21 図	SB03 出土遺物	24
第 22 図	SB04 平面図・断面図	25
第 23 図	SB05 平面図・断面図	26
第 24 図	SB06 平面図・断面図	27
第 25 図	SB07 平面図・断面図	28
第 26 図	SB08 平面図・断面図	29
第 27 図	SB09 平面図・断面図	30
第 28 図	SB10 平面図・断面図	31
第 29 図	SB10 出土遺物	32
第 30 図	SB11 平面図・断面図	32
第 31 図	SB12 平面図・断面図	34
第 32 図	加工段 3 平面図	35
第 33 図	加工段 3 断面図	35
第 34 図	NRO1 平面図・断面図	36
第 35 図	SD01 平面図・断面図	36
第 36 図	SD02 平面図・断面図	37
第 37 図	SFO1・02 平面図・断面図	38
第 38 図	SFO1・02 出土遺物	38
第 39 図	SFO3・04 平面図・断面図	39
第 40 図	SFO4 出土遺物	40
第 41 図	SAO1 平面図・断面図	40
第 42 図	SAO2 平面図・断面図	41
第 43 図	SK01 平面図・断面図	41
第 44 図	SK01 出土遺物	42
第 45 図	SK02 平面図・断面図	42
第 46 図	SK02 出土遺物	42
第 47 図	SK03 平面図・断面図	43
第 48 図	SK04 平面図・断面図	43
第 49 図	SK05 平面図・断面図	43
第 50 図	SK05 出土遺物	44
第 51 図	SK06 平面図・断面図	44
第 52 図	SK06 出土遺物	44
第 53 図	SK07 平面図・断面図	45
第 54 図	SK07 出土遺物	45
第 55 図	SK08 平面図・断面図	45
第 56 図	SK08 出土遺物	45
第 57 図	SK09 平面図・断面図	46
第 58 図	SK09 出土遺物	46
第 59 図	SK10 平面図・断面図	46
第 60 図	SK10 出土遺物	46
第 61 図	ST01～11 道構配置図	47
第 62 図	ST01 平面図・断面図	47
第 63 図	ST01 出土遺物	48
第 64 図	ST02 平面図・断面図	48
第 65 図	ST02 出土遺物	48
第 66 図	ST03 平面図・断面図	49
第 67 図	ST03 出土遺物	49
第 68 図	ST04 平面図・断面図	50
第 69 図	ST04 出土遺物 (1)	50
第 70 図	ST04 出土遺物 (2)	50
第 71 図	ST05 平面図・断面図	51
第 72 図	ST05 出土遺物	52

第 73 図	ST06 平面図・断面図	53
第 74 図	ST06 出土遺物	53
第 75 図	ST07・08 平面図・断面図	54
第 76 図	ST08 出土遺物	55
第 77 図	ST09 平面図・断面図	55
第 78 図	ST09 出土遺物 (1)	56
第 79 図	ST09 出土遺物 (2)	57
第 80 図	ST10・11 平面図・断面図	57
第 81 図	ST10 出土遺物	58
第 82 図	SX01 平面図・断面図	58
第 83 図	SX01 出土遺物	59
第 84 図	遺構外出土遺物 (1)	60
第 85 図	遺構外出土遺物 (2)	61
第 86 図	堤ノ上遺跡 弥生時代の様相	64
第 87 図	堤ノ上遺跡 古墳時代の様相	65
第 88 図	堤ノ上遺跡 古代(奈良・平安時代)の様相	66
第 89 図	堤ノ上遺跡 近世(江戸時代)の様相	67
第 90 図	鉄釘付着棺材組織	68

挿表目次

表 1	堤ノ上遺跡試掘調査トレンド一覧	7
表 2	堤ノ上遺跡の主な検出遺構・出土遺物一覧	63
表 3	墓壙 ST01 ~ 11 の規模と副葬品	69
表 4	墓壙 ST04 ~ 11 の新旧関係	70
表 5	出雲地域の近世墓検出遺跡一覧	70

図版目次

本文中写真

写真 1	バックホーによる表土除去	8
写真 2	発掘調査風景	8
写真 3	堤ノ上遺跡基本土層(北壁)	15

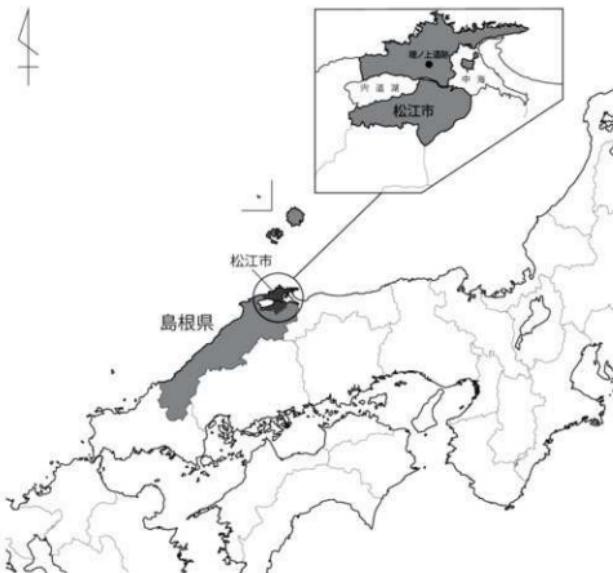
図版 1	調査地遠景・全景	図版 13	堤ノ上遺跡の遺構①
1	調査前遠景(北西から)	1	標 SA01 完掘後(東から)
2	調査後全景(北東から)	2	標 SA02 完掘後(北東から)
図版 2	調査地近景	3	土坑 SK01 完掘後(西から)
1	調査後近景 A3 ~ G3 グリッド付近(北から)	4	SK01 遺物出土状況(第 44 図-1)
2	調査後近景 B6 ~ F8 グリッド付近(北西から)	5	土坑 SK02 完掘後(西から)
図版 3	土層堆積状況	6	土坑 SK03 完掘後(西から)
1	調査区東西横断壁北壁土層断面(西から)	図版 14	堤ノ上遺跡の遺構②
2	調査区南北西角付近南壁土層断面(北西から)	1	土坑 SK04 完掘後(西から)
図版 4	堤ノ上遺跡の遺構③	2	土坑 SK05 完掘後(西から)
1	堅穴建物跡 S01 完掘後(北から)	3	SK05 遺物出土状況(第 50 図-2)
2	堅隣溝・SP01 検出状況(南西から)	4	土坑 SK06 完掘後(西から)
3	SP01 断面(南西から)	5	土坑 SK07 完掘後(北西から)
4	SP01 遺物出土状況(西から)	6	土坑 SK08 完掘後(西から)
5	SP01 完掘後(西から)	7	土坑 SK09 完掘後(西から)
図版 5	堤ノ上遺跡の遺構④	8	土坑 SK10 完掘後(西から)
1	掘立柱建物跡 S01 完掘後(西から)	図版 15	堤ノ上遺跡の遺構⑤
2	掘立柱建物跡 S02 完掘後(西から)	1	近世墓群 ST04 ~ 11 検出状況(南東から)
図版 6	堤ノ上遺跡の遺構⑥	2	近世墓群 ST04 ~ 11 完掘後(南東から)
1	加工段 3 完掘後(南西から)	図版 16	堤ノ上遺跡の遺構⑥
2	掘立柱建物跡 S03 完掘後(北から)	1	墓壙 ST01 完掘後(南から)
図版 7	堤ノ上遺跡の遺構⑦	2	墓壙 ST02・03 完掘後(南から)
1	掘立柱建物跡 S04・05 完掘後(南から)	3	墓壙 ST02 副葬品出土状況(西から)
2	掘立柱建物跡 S04 完掘後(北から)	4	墓壙 ST04 完掘後(西から)
図版 8	堤ノ上遺跡の遺構⑧	5	墓壙 ST04 副葬品出土状況(西から)
1	掘立柱建物跡 S06 完掘後(西から)	6	墓壙 ST05 完掘後(西から)
2	掘立柱建物跡 S07 完掘後(北西から)	7	墓壙 ST05 副葬品出土状況(西から)
図版 9	堤ノ上遺跡の遺構⑨	8	墓壙 ST06 完掘後(西から)
1	掘立柱建物跡 S08 完掘後(西から)	図版 17	堤ノ上遺跡の遺構⑩
2	掘立柱建物跡 S09 完掘後(北西から)	1	墓壙 ST07・08 完掘後(北から)
図版 10	堤ノ上遺跡の遺構⑪	2	墓壙 ST09 完掘後(西から)
1	掘立柱建物跡 S11 完掘後(北西から)	3	墓壙 ST09 瓦質出土状況(北西から)
2	掘立柱建物跡 S12 完掘後(西から)	4	墓壙 ST10・11 完掘後(東から)
図版 11	堤ノ上遺跡の遺構⑫	5	SX01 完掘後(北東から)
1	SB01(柱穴 SP16) 遺物出土状況(第 18 図-1)	図版 18	出土遺物①
2	SB03(柱穴 SP29) 遺物出土状況(第 21 図-1)	図版 19	出土遺物②
3	自然流路 NR01 完掘後(北西から)	図版 20	出土遺物③
4	溝 SD01 完掘後(西から)	図版 21	出土遺物④
5	溝 SD02 完掘後(西から)	図版 22	出土遺物⑤
図版 12	堤ノ上遺跡の遺構⑬		
1	道路 SF01・02 完掘後(北から)		
2	道路 SF03・04 完掘後(西から)		

第1章 調査に至る経緯

堤ノ上遺跡は、福祉施設移設事業のため平成29年11月27日～12月22日の間に試掘調査を実施して発見された遺跡である。試掘調査は、開発予定地内に10箇所のトレンチ（T1～T10）を設定して調査を行った。この結果、T1・T5・T6・T7・T8・T10で遺構を検出し、出土遺物から縄文時代～古墳時代の遺跡が存在することを確認した。

松江市教育委員会は、平成30年1月12日付けで島根県教育委員会宛てに遺跡発見の通知を提出したところ、平成30年1月15日付けで島根県教育委員会から、今後開発予定地内において工事等を実施するに当たっては文化財保護法上の手続きをとる必要がある旨の通知があり、これを土地所有者および事業者に対して伝達した。

この後、事業者は松江市教育委員会と協議を重ね、開発予定地内において福祉施設移設設計画を実施することとされ、平成30年3月22日付けで埋蔵文化財発掘の届出を島根県教育委員会に提出した。これに対し、平成30年3月30日付けで島根県教育委員会から、工事範囲のうち、切土・3m以上の盛土・建物建設予定地部分については発掘調査を実施することとの通知があった。このため、事業者は平成30年8月17日付けで松江市教育委員会に堤ノ上遺跡の発掘調査を依頼し、平成30年9月から現地にて発掘調査を実施するに至ったものである。



第1図 島根県・松江市位置図

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境 (第2図)

堤ノ上遺跡は、松江市街地の北東に位置する松江市東持田町236番外に所在する。この周辺一帯は『出雲国風土記』によれば、出雲国島根郡山口郷に含まれる場所にある。

島根半島(東西約65km・南北約15~20km)には、平均標高350mの山塊が東西に連なる北山山系が走り、松江市域には北山山系から南に向けて派生する多くの支脈丘陵が延びている。この支脈丘陵のうち、朝酌川中流域に広がる川津・持田平野に突出した丘陵上に本遺跡は立地している。

川津・持田平野は、松江市北部の講武平野や松江市南部の意宇平野と並び、まとまった耕地面積をもつ平野である。この平野の南寄りを北東から南西に向かって流れる朝酌川流域周辺の微高地には弥生時代の集落が点在し、朝酌川遺跡群⁽¹⁾に代表される大規模な拠点集落も存在する。また、川津・持田平野の縁辺には八手状に派生したいくつもの細長い低丘陵が広がっており、その丘陵上には古墳や横穴墓が点在するなど、この地域には縄文時代~古代の遺跡が数多く分布している。

堤ノ上遺跡は、北山山系から南に向けて延びる支脈丘陵の西側にあたる緩斜面上に位置し、本遺跡からさらに西側に隣接する低位部には近年まで笠無池が存在していた(現在は埋立地)。この池の北岸には、出雲国風土記の「島根郡」の中に「加佐奈子の社」として記載が見られる「加佐奈子神社」が所在しており、本遺跡からは加佐奈子神社の本殿裏から北へ向かって分布している太田古墳群(1~5号墳)を擁する低丘陵を望むことができる。



第2図 調査地位置図 (S=1:50,000)

第2節 歴史的環境（第3図）

川津・持田平野の縁辺に位置する低丘陵や朝釣川流域は、数多くの遺跡が分布する一帯である。以下では、堤ノ上遺跡周辺の遺跡について川津・持田地区を中心に時代を追って概観する。

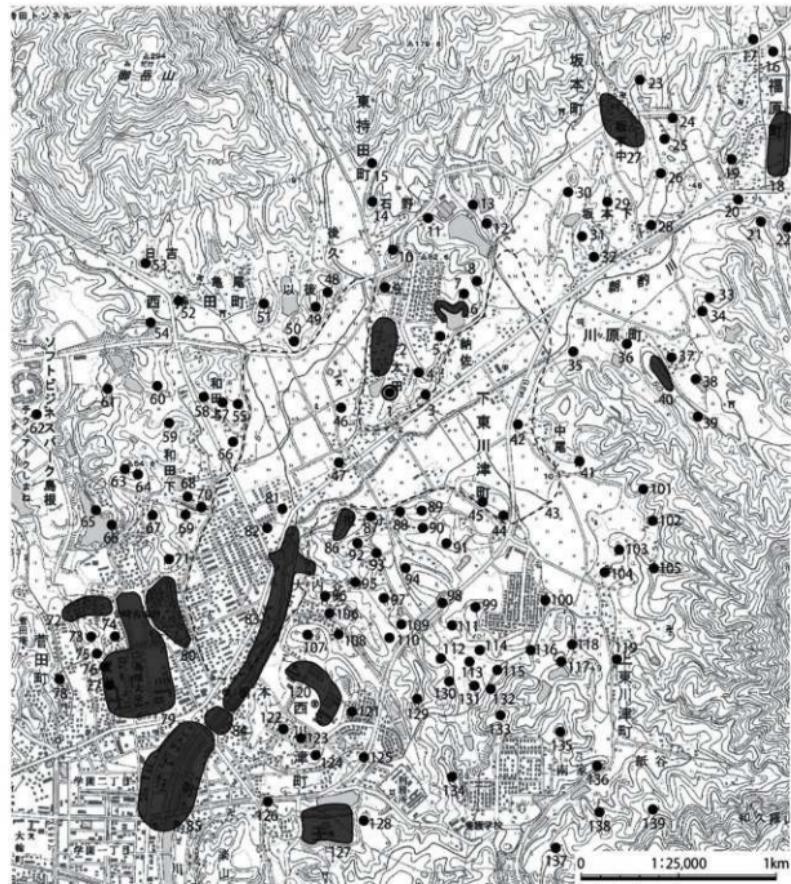
旧石器時代 本遺跡周辺の地形は現在とは大きく異なり、谷合になっていたと考えられ、旧石器時代の遺跡は知られていない。ただし、西川津遺跡（83）やタテチョウ遺跡（85）では尖頭器や細石刃核と考えられる石器が出土していることから、付近に旧石器時代の遺跡が存在する可能性が想定されている。

縄文時代 気候が温暖な時期にあたり、海平面の上昇によって現在の宍道湖が丘陵裾まで広がっていたと推定される。縄文時代の遺構は確認されていないが、縄文土器が出土している遺跡として西川津遺跡、タテチョウ遺跡、城ノ越遺跡（49）、島根大学構内遺跡（79）、金崎古墳群（80）、刎上遺跡（81）、原の前遺跡（84）が挙げられる。島根大学構内遺跡の橋繩手地区では、早期末～前期末の縄文土器・前期の丸木舟・石器などが出土している。西川津遺跡では、早期の纖維土器に加えて前期～晚期の縄文土器・石器などが出土し、また、中期～後期にかけて朝釣川河口推定付近に打ち込まれた杭が多く確認されている。タテチョウ遺跡では、早期末～晚期にかけて多くの遺物が出土している。

西川津遺跡、原の前遺跡、島根大学構内遺跡の調査では、アカホヤ火山灰が宍道湖の湖底堆積層で確認されているほか、縄文海進によって古宍道湖が朝釣川中流域付近まで入り込んでいたことが分かっており、これらの遺跡は川津・持田地区の縄文時代を知る貴重な資料となっている。この他に、金崎古墳群や城ノ越遺跡では後期～晚期の縄文土器が採集され、刎上遺跡からも詳細は不明であるが縄文土器が出土している。

弥生時代 縄文時代の終わり頃には、宍道湖の汀線がタテチョウ遺跡付近まで後退して、周囲が湿地帯となつたことから農耕に適した場所となり、農耕の発達とともに多くの集落が存在するようになったものと考えられている。弥生時代の遺跡には前述した西川津遺跡、タテチョウ遺跡、原の前遺跡をはじめ、坂本中遺跡（27）、貝塚遺跡（86）、橋本遺跡（126）などが知られている。西川津遺跡では、前期の貝塚や前期～中期の掘立柱建物跡などが検出され、遺物は前期～中期の弥生土器・木製農耕具・石器・骨角器などが出土している。西川津遺跡V区の調査では、流水紋銅鐸や人面付土器が発見され、鶴場地区的調査では、前期や後期の大溝（環濠）が見つかり、遺物は弥生土器・漆液容器・木製農耕具・土笛などが出土していることから、弥生時代の拠点集落の様相を備えた遺跡と考えられている。タテチョウ遺跡では前期～後期の弥生土器・木製品・石器などが、坂本中遺跡、貝塚遺跡、橋本遺跡では弥生土器・石器などが採集されている。

墳丘墓は、沢下遺跡（12）で6基検出され、このうち5・6号墓の2基は貼石を施した弥生時代後期の四隅突出型墳丘墓である。この他に、小丸山古墳群（50）では4基の方墳が確認されているが、このうち1基は、出土遺物から方墳以前の弥生時代後期の墳丘墓と考えられ、現状では朝釣川流域における弥生時代の最も古い段階の墳丘墓として位置付けられている。



1 堤ノ上遺跡	21 大谷口遺跡	41 J35遺跡	61 国石古墳	81 前上遺跡	101 仁ヶ谷櫻穴群	121 宮尾古墳群
2 太田古墳群	22 仲尾古墳	42 中尾古墳群	62 藤谷遺跡	82 鶴谷遺跡	102 向原敷横穴群	122 山古墳
3 納佐遺跡群	23 安土山城跡	43 特立川流域条里制遺跡	63 杉谷古墳	83 西ノ津遺跡	103 葦佐古墳	123 梅町塙群
4 空山古墳群	24 稲本遺跡	44 八色谷古墳群	64 杉谷古墳群	84 那の前遺跡	104 西市寺古墳	124 梅町道跡
5 道仙古墳群	25 153古墳	45 伊豆谷古墳群	65 伊豆谷古墳	85 ダラダコツ遺跡	105 山根廻穴	125 開川遺跡群
6 納佐遺跡群	26 235古墳	46 稲田遺跡	66 深町古墳群	86 開川遺跡群	106 大谷奥遺跡	126 開川遺跡群
7 納佐古墳	27 犬走中遺跡	47 上井ノ越遺跡	67 169古墳	87 田代古墳	107 大谷奥遺跡群	127 堀内遺跡
8 原の空道跡	28 清田遺跡	48 楠ノ越構穴群	68 比母塚古墳	88 前田古墳	108 大谷奥遺跡	128 J16遺跡
9 立花廻穴	29 小林古墳群	49 楠ノ越遺跡	69 松浦遺跡	89 後田古墳	109 一の竹古墳	129 川津城跡
10 石野吉墳群	30 中久路古墳	50 小丸山古墳群	70 168古墳	90 家の上古墳	110 劍持古墳	130 後谷1遺跡
11 I49古墳	31 香ヶ畠古墳群	51 稲の前古墳群	71 福山古墳群	91 J59遺跡	111 長池II遺跡	131 家ノ船遺跡
12 沢下遺跡	32 霧原古墳	52 穴道遺跡	72 上井古墳群	92 鶴崎南古墳	112 鶴池御遺跡	132 後田川遺跡
13 開川遺跡群	33 開川遺跡群	53 153古墳の内古墳	73 154古墳群	93 鶴崎北古墳	113 鶴崎御遺跡	133 鶴崎御遺跡
14 野野波遺跡	34 J18遺跡	54 木佐遺跡	74 宮田古墳群	94 井上古墳	114 香川1遺跡	134 J14遺跡
15 嶺谷遺跡	35 小松谷古墳	55 141遺跡	75 雪田小丸山古墳	95 古志敷II遺跡	115 貝先遺跡	135 仲田遺跡
16 夏目遺跡	36 川原谷櫻穴群	56 和田上遺跡	76 豊田丘古墳	96 古志敷古墳	116 雄踏古墳群	136 唐下遺跡
17 上の安備穴群	37 川原古墳	57 大源古墳群	77 藥師山古墳	97 坂口古墳	117 J26古墳群	137 稲葉城跡
18 芝原遺跡	38 霧原前遺跡	58 尾上櫻穴群	78 ドン古遺跡	98 鳥居大字塚内遺跡	118 J31經縦	138 郡句道跡
19 山根古墳	39 元宮遺跡	59 岩坂古墳群	79 9鳥居大字塚内遺跡	99 長治I遺跡	119 嵐山裏遺跡	139 一ノ谷遺跡
20 東前田遺跡	40 伏谷古墳群	60 石岡古墳群	80 金崎古墳群	100 乗鹿古墳群	120 馬込山古墳群	

第3図 堤ノ上遺跡周辺の道路分布図 (S=1 : 25,000)

古墳時代 北山山系から派生する低丘陵には多くの古墳(群)が分布している。前期の古墳は少ないが、朝釣川中流域では道仙古墳群(5)、大佐遺跡(54)、柴尾古墳群(100)、山崎古墳(122)などが知られている。道仙古墳群は4基の方墳からなる古墳群で、道仙3号墳の主体部に隣接する位置では壺棺が2基検出されている。柴尾古墳群は一辺8mの小規模な方墳で、柴尾2号墳の主体部は割竹形木棺と箱形木棺が各1基検出されている。山崎古墳は一辺15mの方墳で、埋葬施設に割竹形木棺が置かれていたと推測され、鉄剣や鐵鎌が出土している。前期の埋葬に関わるものでは、大佐遺跡で墳墓群が確認され、その中の土器棺には搬入土器が使用されていた。

中期以降になると、朝釣川中流域周辺部の丘陵に多くの古墳が築かれしていく。この時期の古墳の中で注目されるのは金崎古墳群である。金崎1号墳は全長32mの前方後方墳で、豊穴系横口式石室の可能性も指摘される小形の豊穴式石室をもち、副葬品には倣製内行花鏡・子持勾玉などの玉類・剣や矛などの武器・初期須恵器などが出土し、朝釣川流域一帯における首長墓と考えられている。この他に、大源古墳群(57)、宮垣古墳群(59)、上浜弓古墳群(72)、薬師山古墳(77)、馬込山古墳群(120)、柴古墳群(123)などがあり、一辺20m以下の方墳が相当数築造されるようになる。

後期に入ると、古墳の築造の中心は朝釣川中流域から持田地区に移動する。2基の片袖式横穴式石室を内部主体とし、島根半島東部では最大級の規模をもつ全長約50mの前方後方墳である薄井原古墳(32)の築造を契機に、太田古墳群(2)に代表されるような各壁を一枚の切石で構成する石棺式石室をもつ古墳が築造される。太田古墳群の石室の規模は小さいものの、律令期に出雲国府が置かれていた意宇川流域の出雲東部の最高首長が採用した石棺式石室を、その傘下の川津・持田地区の両地域に勢力を有していた地域首長も世代墓として用いていることを裏付ける資料として重要である。

この他に、本遺跡の周辺には空山古墳群(4)、納佐池古墳(7)、石野古墳群(10)、I49古墳(11)、常熊古墳(13)、小丸山古墳群(50)、松の前古墳群(51)などが点在している。

横穴墓は、立花横穴(9)、上の堂横穴群(17)、川原後谷横穴群(36)、城ノ越横穴群(48)、尾上横穴群(58)、深町横穴(65)などがある。集落跡は事例が少ないが、柴II遺跡(125)と堤廻遺跡(127)が知られている。柴II遺跡では、前期の豊穴住居跡が2棟検出されている。堤廻遺跡では、前期～中期にかけての豊穴住居跡が21棟と掘立柱建物跡が2棟検出され、遺物は土師器・須恵器・滑石製品や玉の未製品などが出土し、当該期の集落の一端を知る好資料となっている。

古代（奈良・平安時代） 天平5(733)年に編纂された出雲国風土記によれば川津・持田地区は島根郡に属し、郡家は山口郷に比定される。本遺跡の南西から南東にかけての広い範囲には、持田川流域条里制遺跡(43)が存在していたが、現在は消滅している。

芝原遺跡(18)では、規則性をもった掘立柱建物跡が19棟と土坑や溝などが検出され、遺物は墨書き土器を含む須恵器・製塙土器・木製品などが出土している。この遺跡は出雲国風土記の島根郡家推定地にもあたり、遺構や遺物から一般集落とは考えにくい様相を含んでいる。検出した建物配置などから郡家の中心的施設（郡庁や正倉）ではなく、「出雲家」墨書き土器に見られるように郡司の居宅あるいは郡家の周辺施設の一部と考えられている。鏡谷遺跡(15)では、奈良～平安時代の集落跡が

検出され、遺物は須恵器・土師器・土馬などが出土している。古屋敷II遺跡（95）では、平安時代後期の集落跡が確認されている。

この他に、朝駒川遺跡群では、奈良～平安時代の河道と柵状遺構や橋脚が検出され、遺物は須恵器・土師器に加えて灰釉陶器・人形代・銅津などが出土しており、付近に官衙施設の存在が推定されている。

中世 古代の川津・持田地区は島根郡山口郷に属していたが、中世には川津地区が「長田西郷・長田東郷」、持田地区が「持田荘」と呼ばれるようになる。本遺跡が所在する持田荘は、現在の西持田町～東持田町周辺にあった莊園で、北山山系から派生する丘陵の谷筋から朝駒川周辺に広がる平野部にかけての範囲が推定されている。

中世の遺跡は、元宮遺跡（39）で検出された平安時代末～鎌倉時代の絆塚・馬込山古墳群や上弓浜古墳群で検出された中世末～近世にかけての古墓が知られている。集落跡は、西川津遺跡D区で建物群が検出され、周辺に中世の集落が営まれていたことが確認されている。

山城は、藤ヶ谷遺跡（62）で城砦跡に隣接する土塁や堀切などの遺構が検出され、遺物は鉛製の鉄砲玉などが出土している。この他に、安土山城跡（23）、川津城跡（129）、稻葉城跡（137）の小規模な山城があり、土塁や郭などの遺構が検出されている。

註

- (1) 朝駒川中流域に沿った松江市西川津町に所在する、西川津遺跡・原の前遺跡・タテチョウ遺跡を総称して朝駒川遺跡群と呼称している。

参考文献

- 加藤義成 1981 『修訂出雲国風土記参究』
- 出雲考古学研究会 1987 『石棺式石室の研究』
- 島根県教育委員会 1979～1992 『タテチョウ遺跡発掘調査報告書』I～IV
- 島根県教育委員会 1980～2003 『西川津遺跡発掘調査報告書』I～IX
- 島根県教育委員会 2003 『増補改訂島根県遺跡地図I（出雲・隠岐編）』
- 島根県教育委員会 2008 『恵谷古墳群・岩鼻古墳群・上講武殿山城跡・砥石遺跡・沢下遺跡・元宮遺跡』
- 島根県教育委員会 2011 『葫捨古墳・西川津遺跡』
- 島根県教育委員会 2013 『西川津遺跡・古屋敷II遺跡』
- 松江市教育委員会 1978 『史跡金崎古墳群』
- 松江市教育委員会 1984 『松江市北東部遺跡分布調査報告書（I）』
- 松江市教育委員会 1986 『小丸山古墳群』
- 松江市教育委員会・松江市スポーツ・文化振興財团 2017 『柏木遺跡』
- 松江市史編纂委員会 2012 『松江市史 史料編2 考古資料』

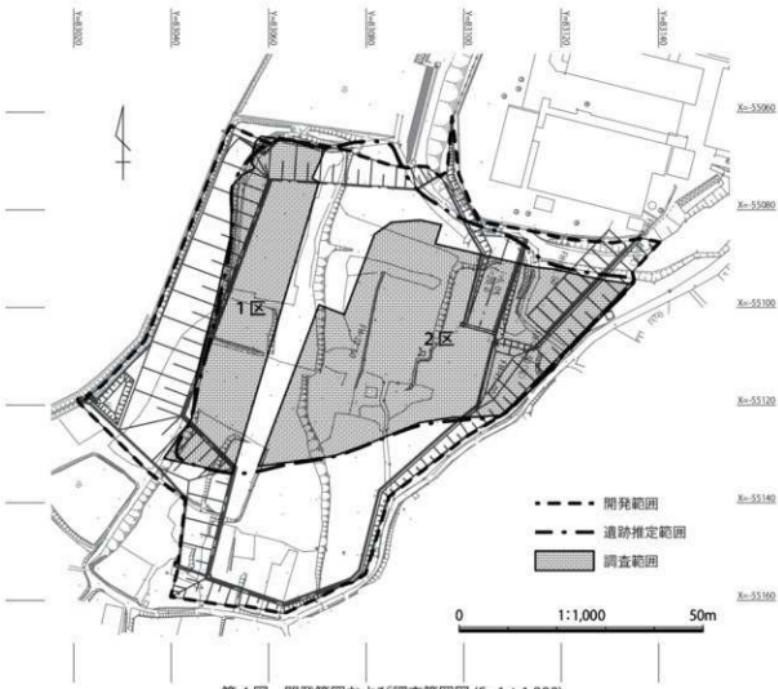
第3章 調査の成果

第1節 調査範囲と調査方法

第1項 調査区の設定（第4図）

堤ノ上遺跡の発掘調査対象範囲は、開発総面積 5,962m²のうち、松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査の結果（本章第2節第1項）から遺跡の範囲とした 3,800m²を調査対象としている。

開発予定地内には、福祉施設移設に伴う工事計画により切土部分・盛土部分・擁壁設置部分があり、調査区の設定は緩斜面下方に位置する盛土・擁壁設置部分を1区（調査面積 1,000m²）、緩斜面上方～中央部に位置する切土部分を2区（調査面積 2,800m²）として調査を進めた。なお、1区と2区の間（南北延長 60m・東西幅 5.0～14.0m）は 3m 未満の盛土部分であり、遺跡に影響がおよばない場所と判断されていることから調査範囲の対象外となっている。調査は発掘作業の工程上、まず緩斜面下方の1区から調査を開始し、1区の調査完了後に続いて緩斜面上方の2区の調査を行った。調査時には1区と2区に分けて調査を進めているが、本報告では2つの調査区を一括りにして取り扱い、各調査区で検出した遺構については、遺構の種別ごとに分けて詳細を報告する（本章第4節）。



第2項 調査の方法

表土掘削と遺構検出

調査地の現況は先述したように山林・竹林および畠地であり、表土の除去はバケットに平爪を装着したバックホーを用いて実施した。表土掘削は調査面積が広範囲なため、事前に重機掘削の深度を把握する目的で、調査範囲のうち試掘トレンチとは重複しない場所に新たに9箇所のトレンチを設定して土層堆積状況を確認した。この成果を基に調査区内の表土（耕作土等を含む）を重機で除去し、以下は手掘りに切り替えて黄褐色～橙褐色粘質土の地山面まで掘り下げた。地山面から遺構を検出したことから、この地山面上面を遺構面としている。

調査区を東西軸で横断した85m間における遺構面の検出標高は、緩斜面上位にあたる2区の東端で標高27.60m、中央部で標高23.30m、下位にあたる1区の西端で標高17.20mを測る。現地表面から遺構面（地山面上面）までの層厚の平均値は、2区の東側でAv.30cm、中央部でAv.50cm、1区の西側でAv.80cmとなっており、一部に削平されている部分も確認されたが、表土掘削の深度は東側が浅く、西側へ向かって深くなっている。

遺構の検出は、鋤簾により精査した後、さらに草削りを用いて検出に努めた。遺構の掘り下げは主に移植ゴテにより実施した。遺構内の調査は、大型土坑や溝などにはベルトを設定して土層観察を行い、柱穴は平面的に全体を検出し終えた後に柱痕跡の有無や切り合うものについては先後関係を確認した。その後の段階で各遺構を半截して断面図を作成し、完掘後に平面図を作成した。



写真1 バックホーによる表土除去



写真2 発掘調査風景

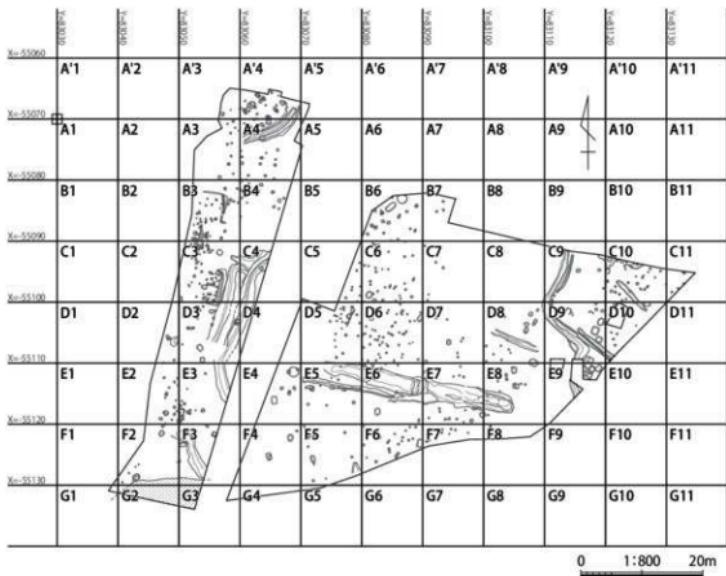
調査の記録

地形測量および遺構の平面測量にはトータルステーションを用い、その測量図と遺構を照合しながら平面図におこしてレベルを記入した。平面図の方位は、世界測地系に準拠した座標北を基準としている。また、遺物の取り上げについてもトータルステーションとレベルを併用している。土層図はレベルを用いて手測りにより縮尺1/20で作成し、土層観察の注記は新版標準土色帖を使用した。

遺構の記録写真は、フルサイズデジタル一眼レフカメラ(Nikon D610)を主に使用し、6×7判フィルムカメラおよび35mmフィルムカメラを授用して撮影を行った。また、遺構完掘後の調査区全体写真については発掘作業の工程上撮影不可であったため、各調査区(1区・2区)における調査が完了した段階に写真撮影用足場を用いて高所からの撮影を実施した。

調査グリッドの設定（第5図）

調査区には、世界測地系平面直角座標系第Ⅲ系に基づいた10m四方のグリッドを設定し、遺構の位置関係の把握に用いた。グリッドは北西角（X = -55070とY = 83030の交点）を基点とし、横軸はX座標軸、縦軸はY座標軸に平行とした。列番号は基点から南に向けてアルファベット順、行番号は東に向けてアラビア数字順に付し、各区画は列・行の順に番号を繋いで呼称した。それぞれの区画は各交点の北西隅をもってグリッドの名称とし、遺構に伴わない遺物はこのグリッド名を用いて取り上げを行った。なお、A3～A5グリッドの北側については、調査時に遺構の広がりを確認したことから、調査区を一部拡張して調査を行った部分にあたる。調査時にはA3～A5グリッド拡張区と呼称していたが、本報告では掲載の都合上この区画をA'3～A'5グリッドと呼称する。



第5図 調査グリッド配置図 (S=1:800)

報告書作成作業

平成31年度に測量図面やデータなどの整理作業を行い、まず遺構の検討と遺物の復元および実測作業を実施した。掲載遺物の選別は、遺構内および遺構外出土遺物の中から実測可能で時期を示すものを抽出し、遺物包含層出土遺物は実測可能で時期を示すものや特殊品を抽出した。遺物が小片で図化できないものは非掲載遺物としたが、その中で器種や形態が判別可能で時期を示すものについては本文中に補うこととした。整理・実測作業の後、遺構・遺物のトレースと遺物の写真撮影を行った。

編集作業にあたってはDTP方式を採用し、遺構・遺物のトレースはAdobe Illustrator CC2019を使用して図版を作成した後、Adobe InDesign CC2019を用いて割付作業と原稿執筆を行った。

第2節 試掘調査と本調査の概要

第1項 試掘調査の概要（表1・第6図）

福祉施設移設事業に先立って、開発予定地内において遺跡の存在を確認するために松江市埋蔵文化財調査室による試掘調査を実施した。試掘調査は2次にわたり、第1次調査は遺跡の有無確認、第2次調査は遺跡の性格と範囲を絞り込むための内容確認を目的とし、開発予定地内に合計10箇所のトレントを設定して重機掘削と手掘りによる調査を行った。試掘トレントの詳細は表1に、試掘トレントの配置は第6図に示し、以下では第1・2次調査の概要と調査の結果について述べる。

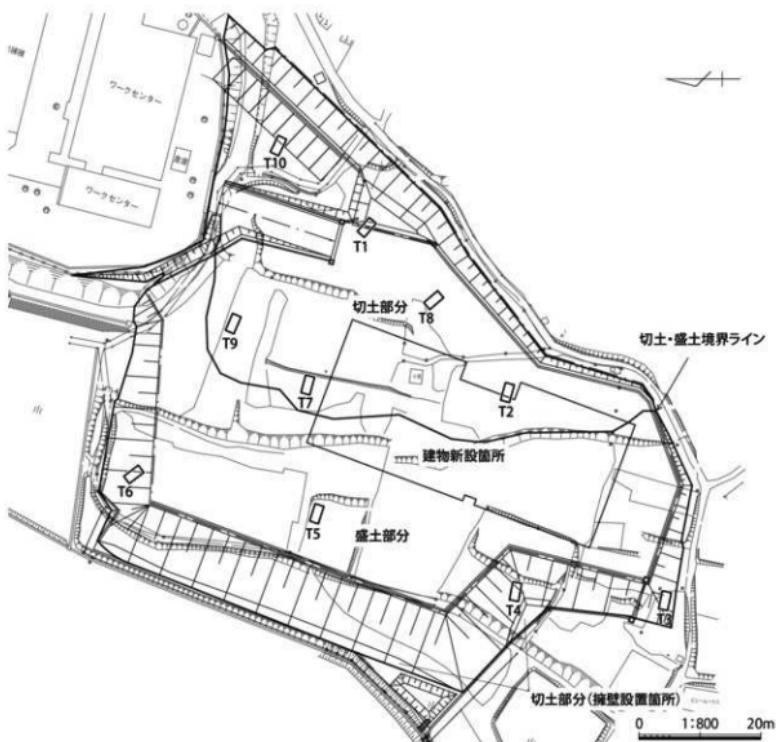
第1次調査は、開発予定地内に7箇所のトレント（T1～T7）を設定し、平成29年11月27日～29日に調査を実施した。トレントは緩斜面部分に散在的に設定しているが、概ね緩斜面の傾斜に沿った東西方向または北西～南東方向を主軸としている。調査面積は合計31.5m²である。調査の結果、開発予定地内の北側～中央部に設定したT1・T5・T6・T7から溝・土坑・柱穴などの遺構を検出し、西側に設定したT4から遺物包含層を検出した。遺物は、T1・T7から土師器片、T4の遺物包含層から黒曜石製の石器や土師器片が出土していることから、時期は縄文時代～古墳時代が想定された。南側に設定したT2・T3から遺構と遺物は検出されなかったため、開発予定地内の北側～中央部にかけて遺跡が存在することを確認した。

遺跡の呼称は当地の小字名をとって「堤ノ上遺跡」とし、文化財保護法上の手続きを行った。その後、今後の遺跡の取り扱いや範囲を考える上で、さらに詳細な調査が必要との結論に達し、追加で遺跡の内容確認調査（第2次調査）を実施することになった。

第2次調査は、開発予定地内に3箇所のトレント（T8～T10）を設定し、平成29年12月21日～22日に調査を実施した。調査面積は合計13.5m²である。調査の結果、T8・T10から溝・柱穴・加工段などの遺構を検出し、T9から遺構は検出されなかったが土師器片が出土した。この調査の目的のひとつは遺跡の範囲の絞り込みであったが、結果的に範囲を絞り込むことはできなかった。よって、第1次調査で確認した遺跡の範囲から変更はないものと判断された。

表1 堤ノ上遺跡試掘調査トレント一覧

調査次数	トレント	現況 (調査前)	設定箇所 (グリッド)	トレント 設定方向	設定範囲 (長軸×短軸)	調査面積	掘削深度	検出遺構	出土遺物
第1次	T1	山林	D8	南東～北西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	15～25cm	柱穴1	土師器片
	T2	畑地	調査区外	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	15～20cm	—	—
	T3	畑地	調査区外	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	15～20cm	—	—
	T4	畑地	調査区外	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	185cm	遺物包含層	土師器片・黒曜石
	T5	畑地	D3	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	110cm	南北溝2	—
	T6	畑地	A4	南東～北西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	70cm	南北溝1、土坑1、柱穴1	—
	T7	畑地	C5～D6	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	20cm	柱穴3	土師器片
第2次	T8	畑地	E7～F7	南東～北西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	40cm	東西溝1、柱穴2	—
	T9	竹林	B6～B7	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	35cm	—	土師器片
	T10	竹林	C9	東～西	3.0m × 1.5m	4.50m ²	50cm	加工段1	土師器片



第6図 堤ノ上遺跡試掘トレンチ配置図(S=1:800)

第2項 本調査の概要（第7～9図）

試掘調査を行った結果、開発予定地内に遺跡が存在することを確認した。このため、開発予定地内のうち遺跡に影響がおよぶ範囲について、遺跡の詳細を記録するために本発掘調査を実施した。

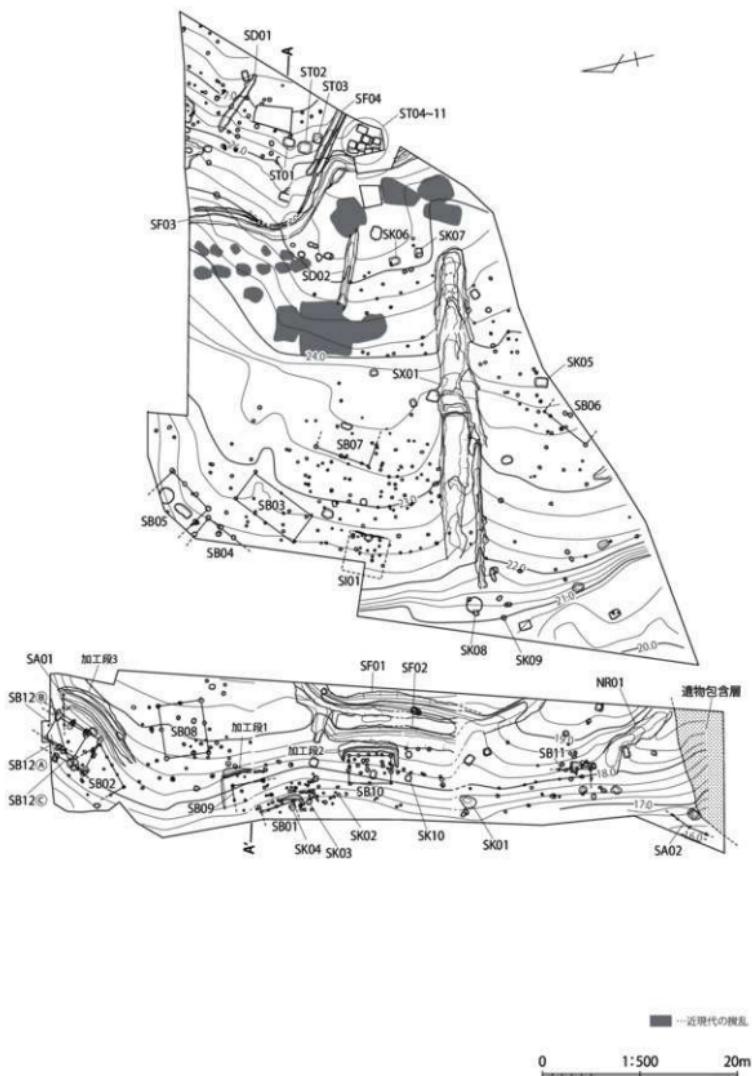
検出した遺構は、弥生時代から近世までの各時期にわたるが、主たる遺構は古墳時代・古代・近世の3時期のものである（第9図）。弥生時代の遺構は希薄で、明確な居住関連施設は確認できなかつたが、土坑SK01を検出した。当該期に属する遺物は、調査区西側の低位部で弥生時代中期～後期の土器が密に出土している。古墳時代の遺構は、建物跡SI01・SB01～07や土坑SK02～04を検出した。当該期の遺物の大半は土師器で占められており、建物跡を構成する柱穴から古墳時代中期の単純口縁の甕や小形丸底壺などが出土している。古代の遺構は、建物跡SB08～11を検出した。当該期に属する遺物は希薄で、調査区西側の建物跡付近や調査区南西角付近の遺物包含層から数点の須恵器が出土するに留まる。近世の遺構は、調査区東端で墓塚ST01～11を検出したほか、建物跡SB12・道路SF01～04・土坑SK05～10を検出している。当該期に属する遺物は、陶磁器・土師器皿（カワラケ）・金属製品・錢貨などが出土している。



第7図 調査前地形測量図 ($S=1:500$)



第8図 調査後地形測量図 (S=1:500)



第9図 堤ノ上遺跡遺構配置図 (S=1:500)

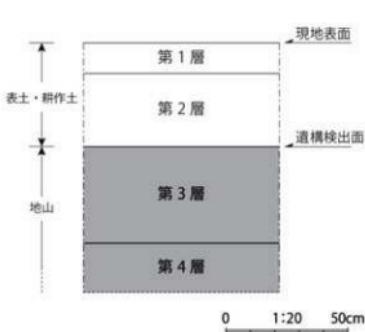
第3節 層序の概要

第1項 基本層序 (第10・11図)

発掘調査開始以前には、遺跡が立地する緩斜面上に段状の畑地となっていた部分や土地利用の変更による削平部分などが存在していた。現地表面は東から西に向かって傾斜をもち、その標高は緩斜面上位で標高 28.00m、中央部で標高 23.50m、下位で標高 18.00m を測る。調査区東端から西端までの 85m 間で、現地表面の比高差は 10m である。以下では、堤ノ上遺跡の基本土層を第10図、調査区東西横断北壁土層（東西 75m）を第11図に示し、土層の詳細について述べる。

土層観察は、1区と2区の土層の連続性を把握するため、調査区の長軸を横断するように緩斜面の傾斜に沿った東西方向の畦（第9図 A-A'間）を設定してこれを記録した。この東西横断土層を標準とした基本的な層序は、上層から茶褐色土（第1層）、淡茶褐色土（第2層）、黄褐色～橙褐色粘質土（第3層）、黄褐色軟岩（第4層）からなる土層堆積を確認した。

第1層は表土で、層厚 10～20cm を測る茶褐色土が堆積する。擾乱はこの表土面から掘り込まれている。表土掘削中に近代以降の陶磁器類とともに須恵器片が出土したことから、近現代の削平などにより土壤が攪拌されているものと考えられた。第2層は畑地部分で確認した耕作土で、層厚 20～30cm を測る淡茶褐色土が堆積する。この土層の下面には凹凸面が見られ、耕作による影響を受けている。第3層は地山で、層厚 30～40cm を測る黄褐色～橙褐色粘質土が堆積する。今回の調査で見つかった遺構の大半は地山面から検出したものであり、第3層上面を遺構面としている。なお、近世に属する遺構は、第3層上面の精査中に遺構平面プランを検出したが、調査区内には削平部分が点在している状況であり、本来の遺構の掘り込み面は第3層よりも上層に存在していた可能性がある。また、第3層上面で検出した遺構ではあるが、畑地の耕作土直下や丘陵の削平部分で検出した浅い遺構は、耕作や削平の影響を受けた遺構の底部を図示している可能性も考えられる。第4層はマンガンバンドで、固く締まった土質の黄褐色軟岩が堆積する。遺構の掘り込みの浅い深い一部に削平部分もあるが、遺跡全体を通して基本的にマンガンバンド（第4層）を大きく改変した状況は見られないことから、旧地形は地山面（第3層）を基盤とし、この上で生活が営まれていたものと判断している。



第10図 基本土層模式図

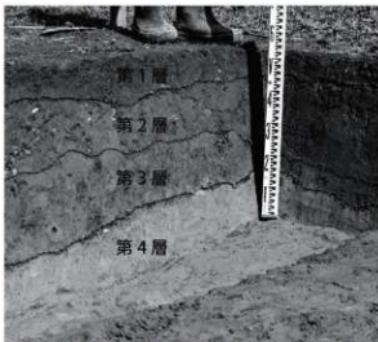
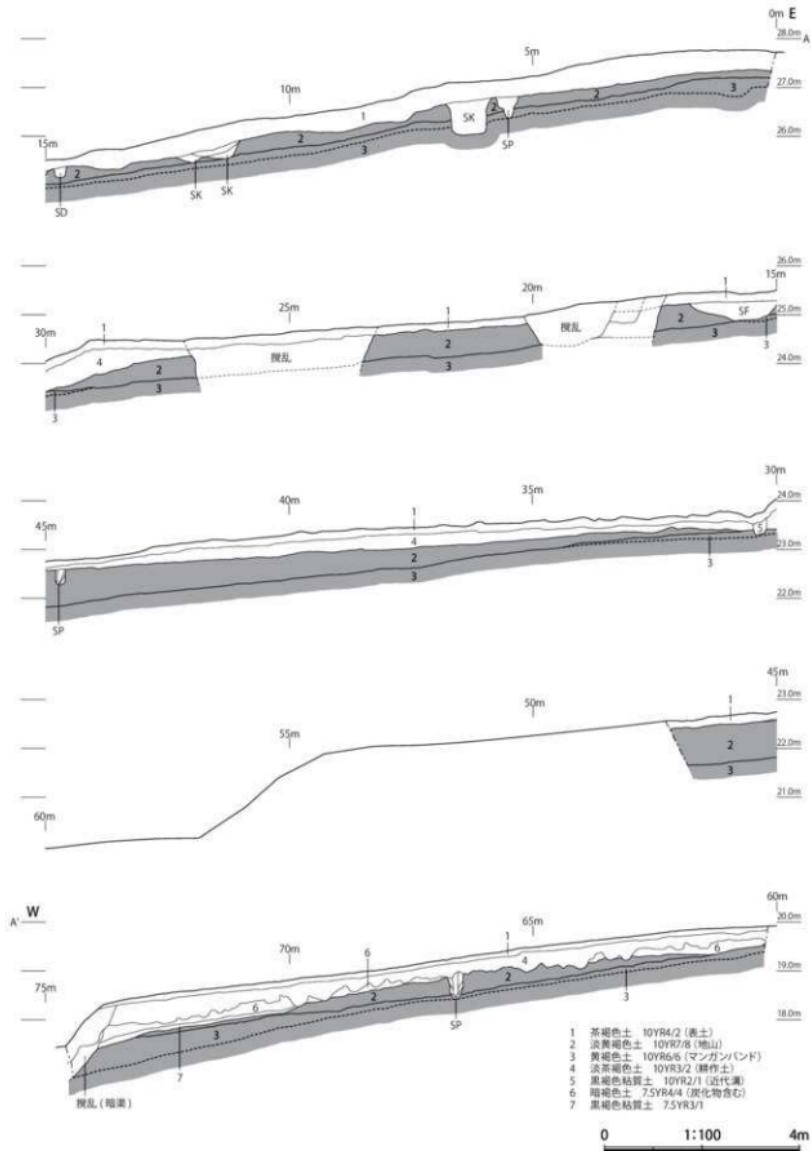


写真3 堤ノ上遺跡基本土層 (B4 グリッド北壁)



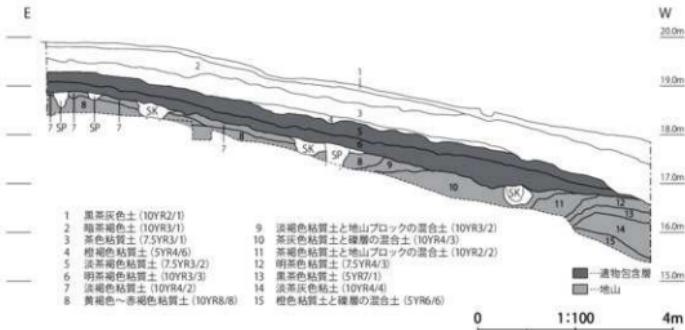
第11図 調査区東西横断北壁土層図 (S=1:100)

第2項 遺物包含層（第12図）

調査区南西角付近には埋没谷があり、ここに堆積した土壌から遺物が出土する遺物包含層を確認した。遺物包含層は調査区全域に広がるものではなく、調査区南西角付近（F2・F3・G2・G3 グリッド）の限的な範囲でしか確認し得ていないため、ここで取り扱う。調査区南西角付近以外の部分では遺構の疊密があるものの、本節第1項に示した基本層序の堆積が見られ、現地表面から40～50cm下まで掘削すると地山面（遺構面）に達する。調査区南西角付近は埋没谷のため現地表面から130cm下まで掘削すると地山面に達し、他に比べて深い位置に地山面が存在する。遺物包含層から出土した遺物はいずれも破片であり、調査区東側の斜面上方からの流れ込みによるものと想定している。

遺物包含層は第12図に示した調査区南壁の標高16.70～19.30mに堆積する第5・6層が該当し、出土遺物から上層の第5層は弥生時代中・後期～古墳時代、下層の第6層は弥生時代中期に分離可能な状況であった。調査時に第5層上面を平面的に捉えた遺物包含層の検出範囲は、東西12.3m×南北5.0mを測る（第9図）。平面プランでは遺物包含層の北側端部を検出するに留まり、調査区外の東側および南側へ向かって遺物包含層の範囲が広がっているものと考えられた。以下では、調査区南壁の土層堆積状況について、上層から下層の順で土層の詳細について述べる。

調査区南西角付近は、調査区内の中で最も低位部に位置する。現地表面は標高17.80～19.90m、地山面は標高16.60～18.90mを測り、いずれも東から西に向かって傾斜している。第1層は層厚10～30cmを測る黒茶灰色土の表土である。第2層は層厚30cmを測る暗茶褐色土で、小片で固化していないが、近世陶磁器を含むことから近世以降の堆積層と考えられる。第3層は層厚40～60cmを測る茶色粘質土で、奈良時代の須恵器を含むことから古代以降の堆積層と考えられる。第4層は層厚10cmを測る橙褐色粘質土で、遺物を含まない無遺物層である。第5層は層厚20～30cmを測る淡茶褐色粘質土で、弥生時代中・後期の土器や古墳時代の土器を含む遺物包含層である。第6層は層厚20～30cmを測る明茶褐色粘質土で、弥生時代中期の土器を含む遺物包含層である。第7～15層は黄褐色～赤褐色粘質土の地山である。その中の第9～13層は粘質土に地山ブロックや拳大の礫を含み、土層堆積に大きな乱れが生じていることから地滑りの痕跡を検出したものと考えられる。



第12図 調査区南壁土層図 (S=1:100)

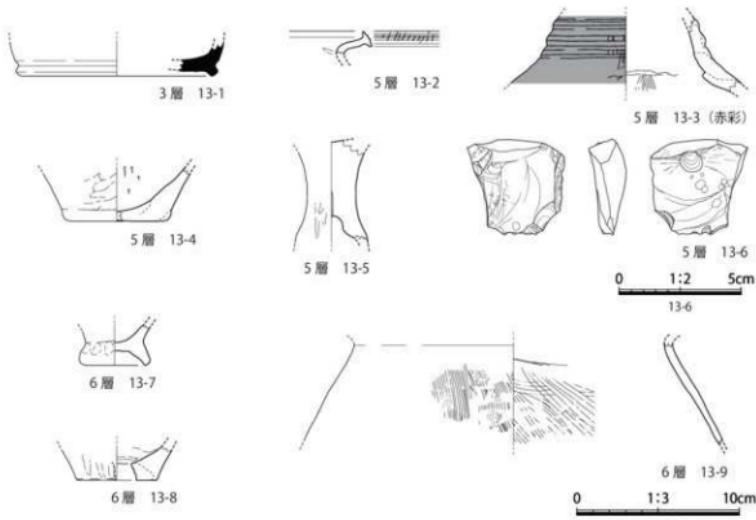
遺物包含層出土遺物（第13図）

ここでは調査区南壁第5・6層の遺物包含層から出土した遺物について述べるが、上層の第3層から出土した遺物も併せて掲載する。以下、遺物が出土した上層から下層の順で詳述する。

13-1は第3層から出土した古代に属する須恵器である。13-1は高台付坏で、高台部分のみ残存する。高台は3mmの低い高台が取り付く。出雲国府第3～4形式、8世紀代2～4四半期に属する。なお、遺物が小片で図化していないが、第3層からはこれ以外にも当該期の須恵器片が2点出土している。

13-2～6は第5層から出土した弥生時代中・後期に属する土器および黒曜石である。13-2は甕の口縁部である。口縁端部に3条の凹線文と刻目を施す。弥生時代中期後葉、出雲IV-2様式に属する。13-3は吉備系の撇入品と考えられる特殊壺の頸部～胴部である。⁽²⁾頸部は内傾しながら立ち上がり、外面に平行沈線が巡る。内外面にナデとタテハケメが施され、外面のみに赤色顔料が塗布されている。弥生時代後期後葉、草田3期（備中V-5様式）に属する。13-4は甕の底部である。外面にミガキ、内面にケズリが施される。13-5は高坏の脚部である。心棒痕跡をもつ中実高坏で、外面にミガキが施される。13-6は黒曜石の剥片である。両側縁部と下端部に剥離痕が見られる。なお、遺物が小片で図化していないが、第5層からはこれら以外にも古墳時代の土師器片が出土している。

13-7～9は第6層から出土した弥生時代中期に属する土器である。13-7は製塙土器で、底部のみ残存する。直径3.7cm、高さ1.5cmのハの字状に開く脚台をもつもので、外面に指頭圧痕が見られる。13-8は甕の底部である。外面にミガキ、内面にケズリが施され、底部には焼成後の穿孔が認められる。13-9は甕の胴部である。口縁部は欠損しているが、なだらかに張り出す胴部で、内外面にハケメが施される。弥生時代中期中葉、出雲III様式に属する。



第4節 遺構と遺物

堤ノ上遺跡の調査では、弥生時代から近世に至る遺構と遺物を確認したが、主たる遺構は古墳時代・古代・近世の3時期のものである。遺構は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡12棟、加工段3箇所、柱穴およびビット541穴(建物跡を構成する柱穴を含む)、自然流路1条、溝2条、道路4本、柵2条、土坑52基、墓壙11基、性格不明遺構1基を検出した。

遺構内や遺構外から出土した遺物には弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器などがあるが、その大半は破片で時期が分かるものおよび図化できたものは少ない。柱穴は遺跡内で密集する部分や散在する部分があるが、ここでは主に建物跡や柵に伴うものを取り扱う。土坑は遺物が出土して時期が分かるものを抽出して掲載し、加工段・自然流路・溝・道路・墓壙はすべて掲載した。

本節ではこれらの遺構について種別ごとに概要を述べ、各遺構から出土した遺物と併せて遺構・遺物の順で報告する。なお、遺構図の掲載は遺構の種別の中で古い時期から新しい時期の遺構の順に掲載している。当遺跡における遺構の変遷については、第4章第1節を参照されたい。

第1項 建物跡

SI01(第14・15図)

規模と形態 SI01は、調査区中央部のD5グリッドに位置する標高22.45～22.70mの緩斜面で検出した竪穴建物跡である。後世の削平により壁が残っておらず、東側にわずかに残った壁際溝と床面に柱穴およびビットが残っているにすぎない。平面形は不明だが、東側の壁際溝の形状から復元される規模は、一辶4.00m前後を測る方形の住居跡を想定している。

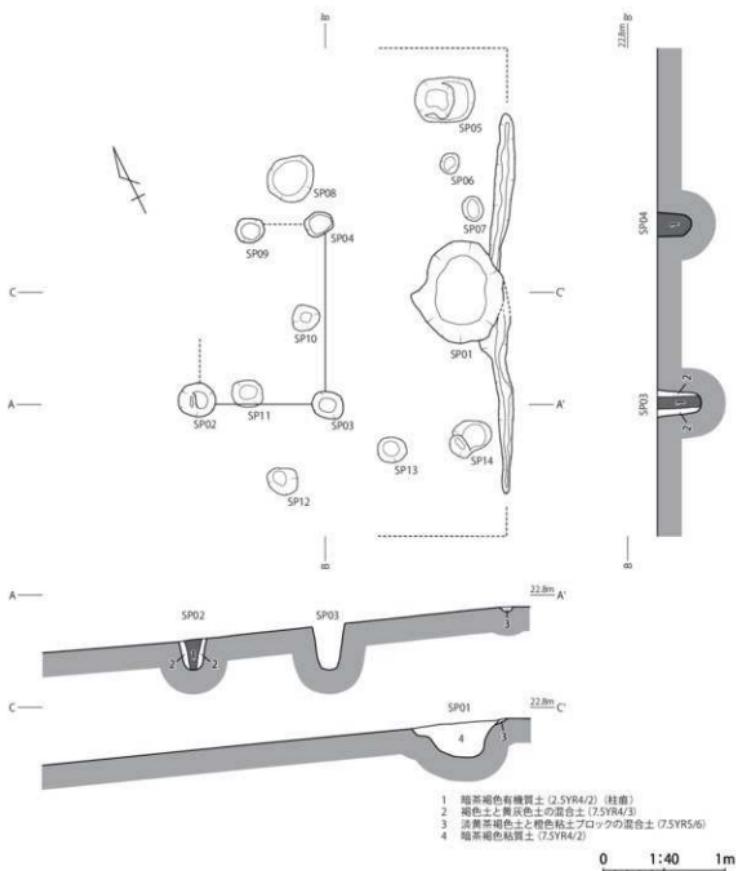
床面は東から西に向かって傾斜しており、後世の削平によってSI01内の西側で検出したビットの上端は消失している状況であった。床面からは多数のビットを検出したが、SP05・08・12は深さ10cm以下の浅いビットであることから、これらは後世の掘り込みによる遺構の底部を検出した可能性がある。SI01の主柱穴と考えられる柱穴はSP02・03・04の3穴しか確認できなかったが、柱穴の配置から四本柱構造の竪穴建物を想定している。SP02・04は、上端径20～30cm、深さ25～35cmを測り、いずれも柱穴の断面観察時に暗茶褐色有機質土の柱痕跡を確認した。なお、床面では中央ビット・間仕切溝・焼土などの痕跡は検出していない。

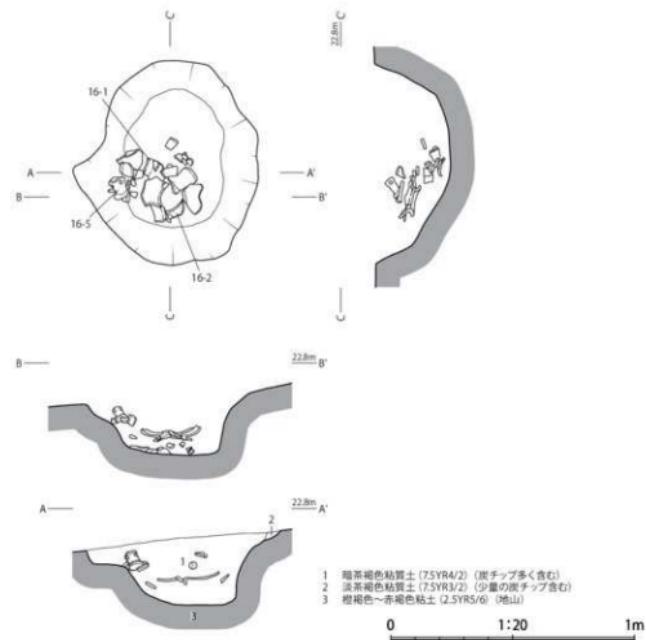
SP01は壁際土坑と考えられる遺構で、緩斜面上方に位置する東側の壁際溝のほぼ中央部に壁際溝と土坑が一部切り合形で設置されている。SP01は標高22.62～22.70mで検出した土坑で、平面形は不整橢円形を呈する。規模は長径83cm、短径63cm、深さ30cmを測る。埋土は炭を多く含む暗茶褐色粘質土が堆積し、土坑内から遺物がまとめて出土した(第15図)。

SI01出土遺物(第16図) SI01を構成する主柱穴や床面から遺物は出土せず、壁際土坑SP01内から一括して遺物が出土した。16-1～5は古墳時代中期の土師器である。16-1はやや小形の単純口縁の甕で、口径11.1cmを測る。口縁部は直線的に延び、端部は薄くおさめる。胴部内面にケズリが施され器壁は薄い。16-2は単純口縁の甕で、口径13.9cmを測る。SP01の床面からやや浮いた位置で、甕の上半のみが上下反転して割れた状態で出土した。口縁部はほぼ直線的に延びる。外面にハケメ、

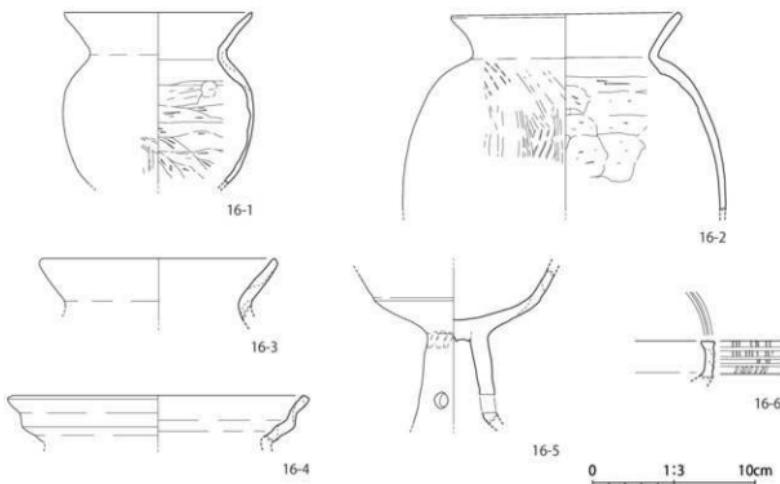
内面にケズリが施される。16-3は単純口縁の甕で、口径14.3cmを測る。口縁部はほぼ直線的に延び、端部は丸くおさめる。内外面にヨコナデが施される。16-4は複合口縁が退化した甕で、器壁は厚い。16-5は高環で、脚部屈曲部付近に3方向の円形スカシが認められる。16-6は弥生土器の高環の口縁部である。口縁端部に2条の凹線文、外面に4条の凹線文と刻目を施す。弥生時代中期後葉、出雲IV-2様式に属し、混入品と考えている。

遺構の性格と時期 SP01内から出土した16-6の弥生土器は混入品と考えられることから、遺構の時期は16-1～5の土師器の甕や高環が主体となる古墳時代中期に位置付けられ、検出したSI01は当該期に属する住居跡と考えられる。





第15図 SP01 平面図・断面図

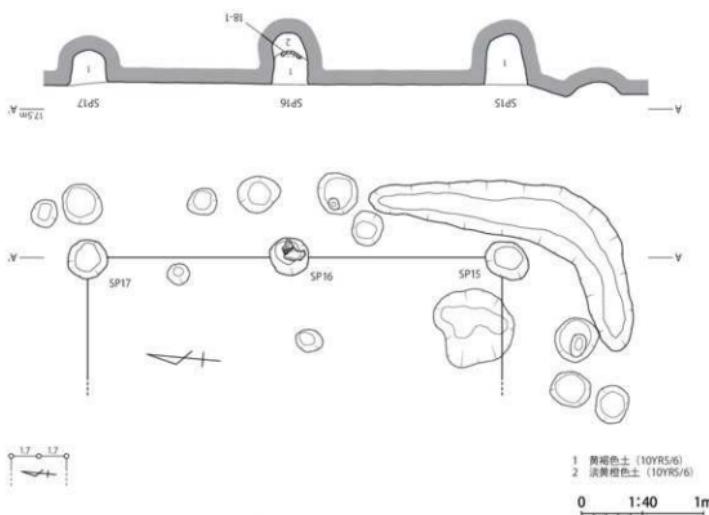


第16図 SI01 (壁際土坑 SP01) 出土遺物

SB01 (第17図)

規模と形態 SB01は、調査区西側のB3グリッドに位置する標高17.30mの斜面で検出した掘立柱建物跡である。西側は調査区外となるため梁行は不明だが、桁行は確定している。検出した範囲での規模は、桁行2間、梁行未検出の構造で、桁行3.40mを測る。柱間の心々距離は桁行1.70mの等距離を測る。建物の主軸方位は南北で、N-6°-Wである。

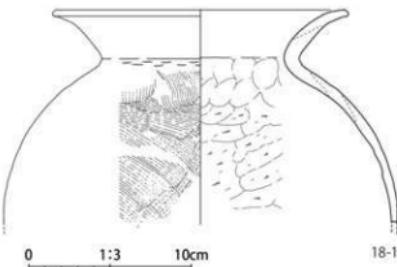
柱穴は円形を呈し、径32~35cmを測る。柱穴の深さは30~40cmを測り、埋土は黄褐色土が堆積するが、柱痕跡は確認できなかった。また、SB01の南東角付近では長さ2.80m、幅30~50cm、深度10cmを測るL字状の溝を検出している。この溝はSB01に付随する雨落溝の可能性がある。



第17図 SB01 平面図・断面図

SB01出土遺物(第18図) 遺物はSB01を構成する柱穴SP16内から出土した。18-1は古墳時代中期の単純口縁の甕で、口径17.8cmを測る。器壁が厚く口縁部は外反気味に立ち上がる。外面にハケメ、内面にケズリが施される。頸部内面にはシボリメの跡を指押さえで消している状況が観察される。

遺構の性格と時期 遺構の時期は、出土した土師器から古墳時代中期が想定される。SB01は



第18図 SB01出土遺物

後述するSB03~06の古墳時代に属する掘立柱建物とは主軸が異なっており、斜面に対して平行となるように地形に沿った配置を有する掘立柱建物と考えられる。

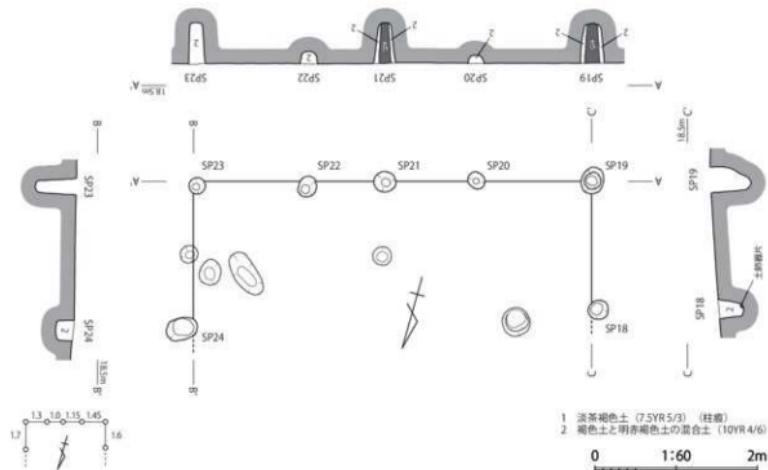
SB02 (第19図)

規模と形態 SB02は、調査区北西角のA3～A4グリッドに位置する標高18.10～18.20mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。遺構検出面は南から北に向かって傾斜し、後世の削平によってSB02を構成する北側の柱穴は消失している状況であった。このため、南側の桁行は確定しているが、北側の桁行は未検出となっており、梁行は1間以上の規模をもつものと想定している。検出した範囲での規模は、桁行2間、梁行1間以上の構造で、桁行4.90m、梁行1.70m以上を測る。柱間の心々距離は桁行2.30～2.60m、梁行1.60～1.70mを測る。建物の主軸方位は東西で、E-17°-Nである。

柱穴は円形を呈し、径25～35cmを測る。柱穴の深さは30～50cmを測り、埋土は褐色土と明赤褐色土の混合土が堆積する。SP19・21では淡茶褐色土の柱痕跡を確認した。また、SP19・21の間に位置するSP20とP21・23の間に位置するSP22は、径20cm、深さ10～15cmを測る小規模で浅い柱穴であることから東柱と考えられ、SB02の桁行は東柱を設けた構造であることが想定される。

SB02出土遺物 遺物はSB02を構成する柱穴SP18内から土師器片が1点出土した。小片のため図化していないが、古墳時代に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 遺構の時期比定の手がかりに乏しい状況にあるが、SB02は南から北へ向かって開けた緩斜面上に位置し、南側へ20m離れた位置には桁行2間のSB01が存在する。SB02はSB01と同様に、斜面に対して平行となるよう地形に沿った配置を有する掘立柱建物と考えられる。このような位置関係から見て、当遺構が古墳時代中期に属する建物である可能性は高いものと考え、SP18から出土した土師器も小片ではあるがこれを傍証する資料と捉えている。

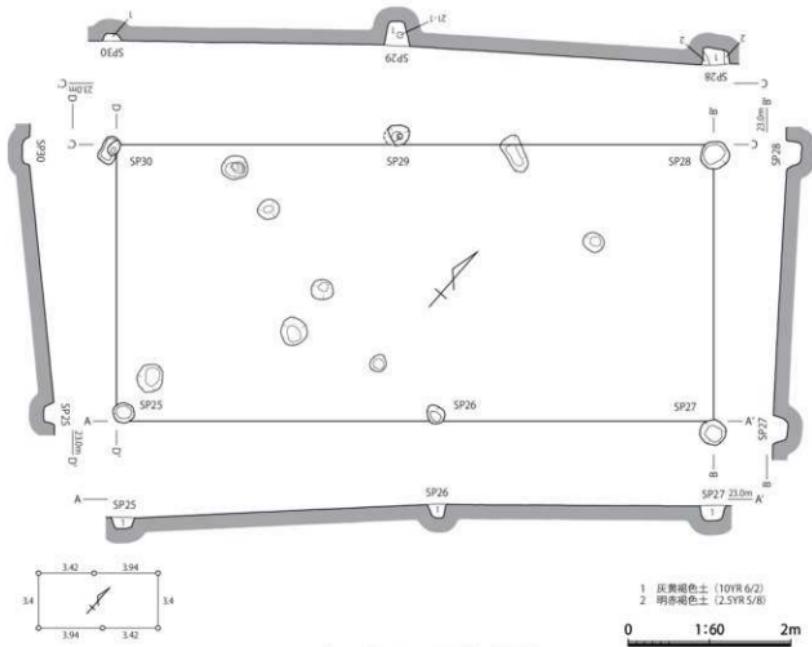


第19図 SB02 平面図・断面図

SB03（第20図）

規模と形態 SB03は、調査区西側のC5～C6グリッドに位置する標高22.48～22.92mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。規模は、桁行2間、梁行1間の構造で、桁行7.36m、梁行3.40mを測る。柱間の心々距離は桁行3.42～3.94m、梁行3.40mの等距離を測る。建物の主軸方位は北東～南西で、N-50°-Eである。柱穴は円形や梢円形を呈し、径23～35cmを測る。柱穴の深さは15～30cmを測り、埋土は灰黄褐色土と明赤褐色土が堆積する。SP28では柱痕跡を確認した。

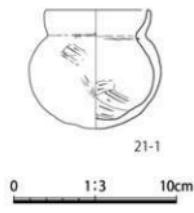
SB03では、SB02で確認した東柱柱穴が削平された状態を検出している可能性がある。また、先述したSB03の南側に隣接する堅穴建物SI01が堅穴掘方をほぼ失っていることと符合する。



第20図 SB03平面図・断面図

SB03出土遺物（第21図） 遺物はSB03を構成する柱穴SP29内から出土した。21-1は古墳時代中期の小形丸底壺で、口径6.4cmを測る。口縁部は単純口縁で、内湾気味にハの字状に開く。頸部は縮まる形状で、胴部中央付近に最大径がある。外面にハケメ、内面にケズリが施される。

遺構の性格と時期 遺構の時期は、出土した土器から古墳時代中期が想定される。SB03は、SB01・02とは建物の主軸が異なり、北東～南西方向を主軸とするが、出土遺物の年代から同時期の建物と考えている。

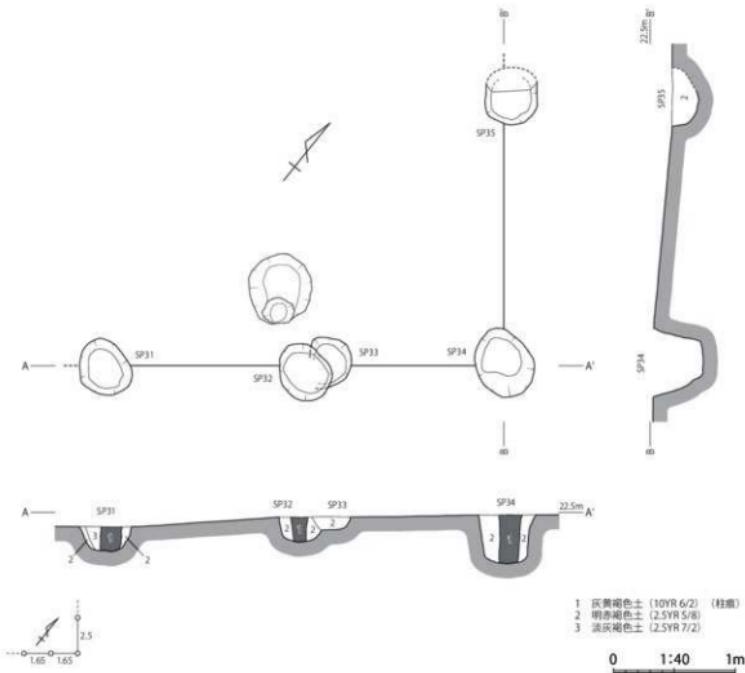


第21図 SB03出土遺物

SB04（第22図）

規模と形態 SB04は、調査区北側のB6グリッドに位置する標高22.32～22.48mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。調査区内では南西側と北西側の桁行および梁行の全体構造は不明である。検出した範囲での規模は、桁行2間以上、梁行1間以上の構造で、桁行3.30m以上、梁行2.20m以上を測る。柱間の心々距離は桁行1.65mの等距離、梁行2.20mを測る。建物の主軸方位は北東一南西で、N-50°-Eである。柱穴はほぼ円形を呈し、径45～50cmを測る。柱穴の深さは20～40cmを測り、埋土は灰黄褐色土と明赤褐色土が堆積する。SP31・32・34では柱痕跡を確認した。SB04を構成する柱穴から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SB04の建築年代を明確に示す出土遺物はないが、SB03と軸を揃え、後述するSB05の柱穴と規模が類似する点から、これらは古墳時代中期に属する建物であった可能性が高いものと考えられる。また、SB04・05は幅1.00m前後で東西に隣接する位置関係にあり、いずれが先行するのかは確認できなかったが、主軸が揃うSB03・04に対してSB05は若干異なる主軸をとり、廟の張り出しを考えると同時併存はできないことから建て替えの可能性がある。



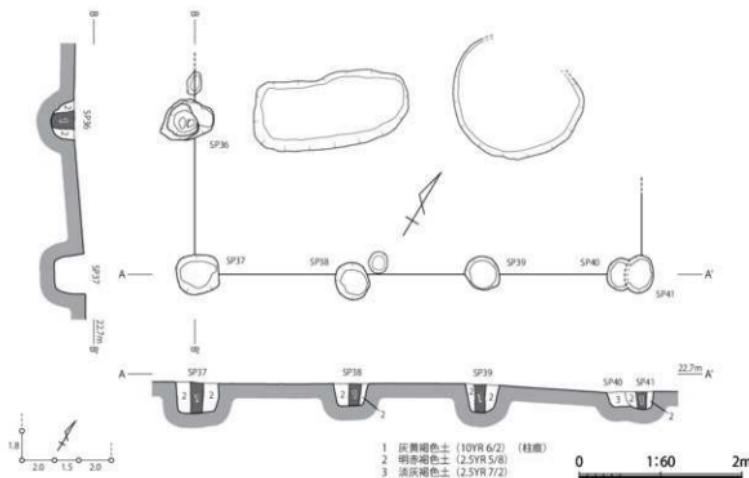
第22図 SB04 平面図・断面図

SB05 (第23図)

規模と形態 SB05は、B6グリッドに位置するSB04の北東側に隣接し、標高22.46～22.60mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。調査区内では桁行は確定しているが、梁行は1間以上の規模をもつ。検出した範囲での規模は、桁行3間、梁行1間以上の構造で、桁行5.50m、梁行1.80m以上を測る。柱間の心々距離は桁行1.50～2.00m、梁行1.80mを測る。建物の主軸方位は北東一南西で、N-60°Eである。柱穴はほぼ円形を呈し、径45～50cmを測る。柱穴の深さは20～40cmを測り、埋土は灰黄褐色土と明赤褐色土が堆積し、全ての柱穴で柱痕跡を確認した。

SB05出土遺物 遺物はSB05を構成する柱穴SP36・37・38・39内から土師器片が出土した。いずれも小片のため図化していないが、古墳時代に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 遺構の時期は、出土した土師器から古墳時代が想定されるが、明確に断言はできない。しかし、先述したようにSB05は建て替えの可能性があり、周辺で検出したSB03・04の主軸と比べて東へ10°ほど傾くが、これらはほぼ同一な主軸を指向している点から見て、SB05はSB03・04とほぼ同様な年代、すなわち古墳時代中期に比定して大きな問題はないものと考えている。



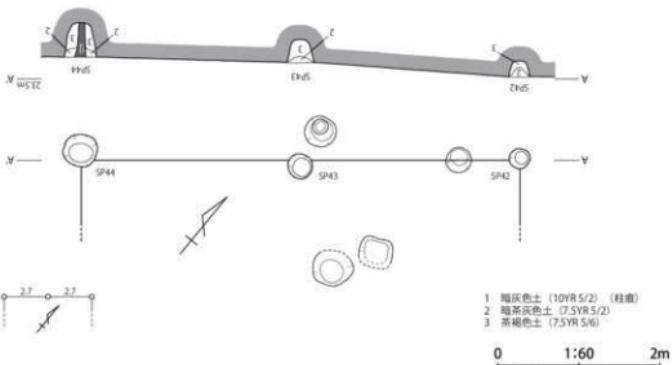
第23図 SB05平面図・断面図

SB06 (第24図)

規模と形態 SB06は、調査区南側のF6グリッドに位置する標高23.23～23.48mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。南側は調査区外となるため梁行は不明だが、桁行は確定している。検出した範囲での規模は、桁行2間、梁行未検出の構造で、桁行5.40mを測る。柱間の心々距離は桁行2.70

mの等距離を測る。建物の主軸方位は北東一南西で、N - 50° - Eである。柱穴は円形を呈し、径 27 ~ 42cmを測る。柱穴の深さは 20 ~ 40cmを測り、埋土は暗茶灰色土と茶褐色土が堆積する。SP44 では暗灰色土の柱痕跡を確認した。SB06 を構成する柱穴から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SB06 の建築年代を明確に示す出土遺物はないが、SB03・04 の主軸と一致する点から見て、古墳時代中期に属する建物であった可能性が高いものと考えられる。



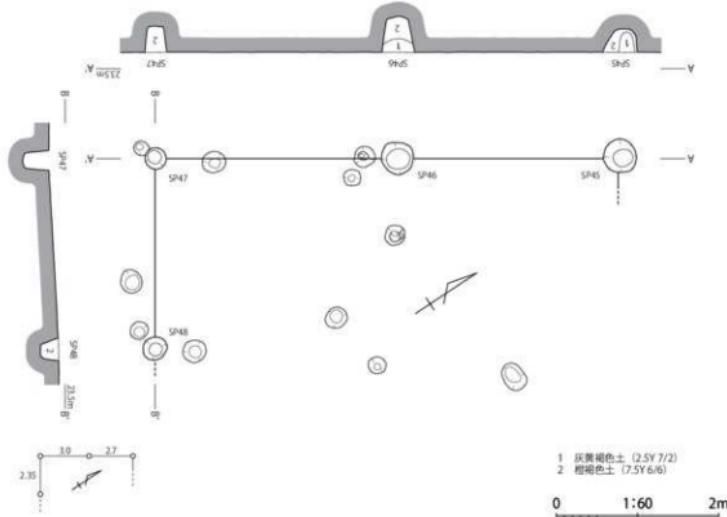
第24図 SB06 平面図・断面図

SB07 (第25図)

規模と形態 SB07 は、調査区中央部の C6 ~ D6 グリッドに位置する標高 23.30 ~ 23.42mの平坦面で検出した掘立柱建物跡である。後世の削平によって SB07 を構成する東側の柱穴は消失している状況であった。このため、西側の桁行は確定しているが、東側の梁行は未検出となっており、梁行は 1 間以上の規模をもつものと想定している。検出した範囲での規模は、桁行 2 間、梁行 1 間以上の構造で、桁行 5.70m、梁行 2.35m 以上を測る。柱間の心々距離は桁行 2.70 ~ 3.00m、梁行 2.35mを測る。建物の主軸方位は北東一南西で、N - 34° - Eである。

柱穴は円形を呈し、径 25 ~ 38cmを測る。柱穴の深さは 20 ~ 40cmを測り、埋土は灰黄褐色土と橙褐色土が堆積する。SP45 では柱痕跡を確認した。SB07 を構成する柱穴から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SB07 の建築年代を明確に示す出土遺物はないため、時期比定の手がかりに乏しい状況にあるが、SB07 の北側および南側には古墳時代中期に属する建物群が存在する点から見て、SB07 は当該期に属する建物であった可能性は高いものと考えておきたい。また、SB07 周辺の平坦面にはこれ以外にも多数の柱穴が密に存在する点から、SB07 が機能していた前後にも継続して建物が営まれていた可能性が考えられる。



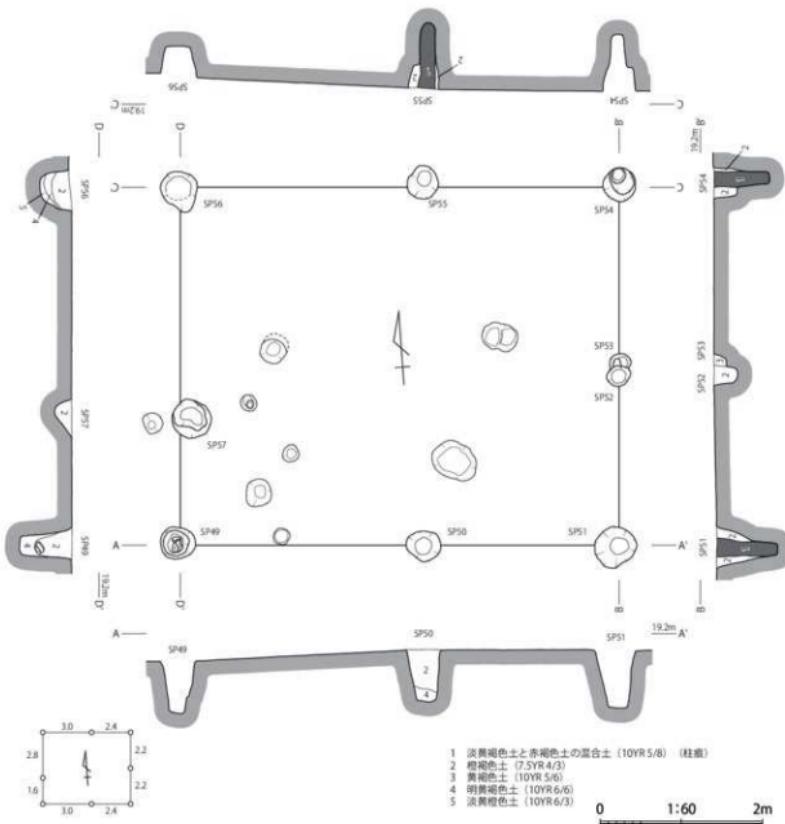
第25図 SB07 平面図・断面図

SB08（第26図）

規模と形態 SB08は、調査区北西側のA4～B4グリッドに位置する標高18.86～19.04mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。規模は、桁行2間、梁行2間の構造で、桁行5.40m、梁行4.40mを測る。柱間の心々距離は桁行2.40～3.00m、梁行1.60～2.80mを測る。建物の主軸方位は東西で、E-3°-Sである。

柱穴は円形を呈し、径30～50cmを測る。柱穴の深さは20～80cmを測り、埋土は橙褐色土と黄褐色土が堆積する。東西両妻側中央のSP52・57のみが、径20～35cm、深さ20～25cmと小規模で浅くなっている。いわば通常の2間×1間の建物の幅を広げ、梁行に東柱を設けたような構造をとる。SP51・54・55は径40～50cm、深さ70～80cmを測り、2段掘りの掘方をもち、淡黄褐色土と赤褐色土の混合土の柱痕跡を確認した。SP49の柱穴内には直径10cm前後の扁平な石が3個据えてあり、柱を設置する際の根石と考えられる。SB08を構成する柱穴から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 遺構の時期比定の手がかりに乏しい状況にあるが、SB08周辺のB4グリッドで検出した遺構内や遺構面からは、古代に属する須恵器片や土師器片が出土している。SB08は東から西へ向かって開けた緩斜面上に位置し、南側には後述するSB09～11が存在している。これらは斜面に対して平行となるように地形に沿った配置を有する掘立柱建物と想定している。このような位置関係から見て、当遺構が古代に属する建物である可能性は高いものと考えられる。



第26図 SB08平面図・断面図

SB09（第27図）

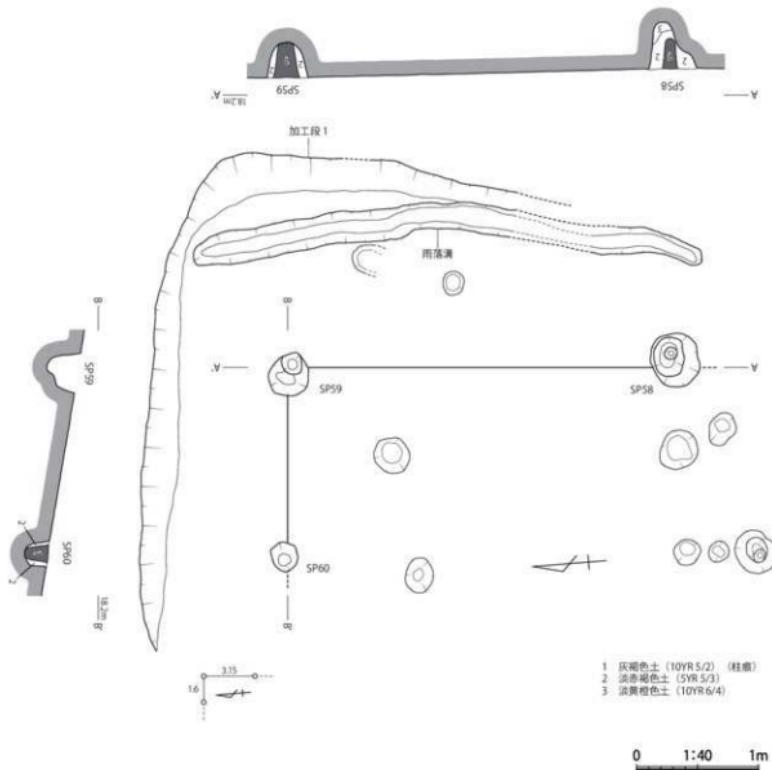
規模と形態 SB09は、調査区西側のB3グリッドに位置する標高17.78～18.06mの緩斜面で検出した加工段を伴う掘立柱建物跡である。遺構検出面は東から西に向かって傾斜しており、後世の削平によってSB09を構成する西側および南側の柱穴は消失している状況であった。このため、桁行と梁行はいずれも1間以上の規模をもつものと想定している。検出した範囲での規模は、桁行1間以上、梁行1間以上の構造で、桁行3.15m、梁行1.60mを測る。柱間の心々距離は桁行3.15m、梁行1.60mを測る。建物の主軸方位は南北で、N-4°-Eである。

柱穴は円形を呈し、径22～38cmを測る。柱穴の深さは20～38cmを測り、埋土は淡赤褐色土と淡黄褐色土が堆積する。全ての柱穴で灰褐色土の柱痕跡を確認した。

加工段1は、SB09の北東側に隣接する位置でL字状に検出した。現状での規模は、南北長さ2.50m、東西幅4.00m、深さ15～20cmを測る。テラス面はほぼ平坦であるが、西側に向かって傾斜している。覆土は黒褐色粘質土が堆積していた。加工段の下端には、長さ4.20m、幅25cm、深さ10cm前後を測る雨落溝が南北方向に延びている。

SB09出土遺物 遺物はSB09を構成する柱穴SP58内から土師器片が1点出土した。小片のため図化していないが、古代に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 遺構の時期は、出土した土師器から古代が想定される。SB09は、SB08と同様に斜面に対して平行となるように地形に沿った配置を有する掘立柱建物と想定している。また、後述するSB10・11は加工段を伴う掘立柱建物であり、出土遺物の年代から同時期の建物と考えている。



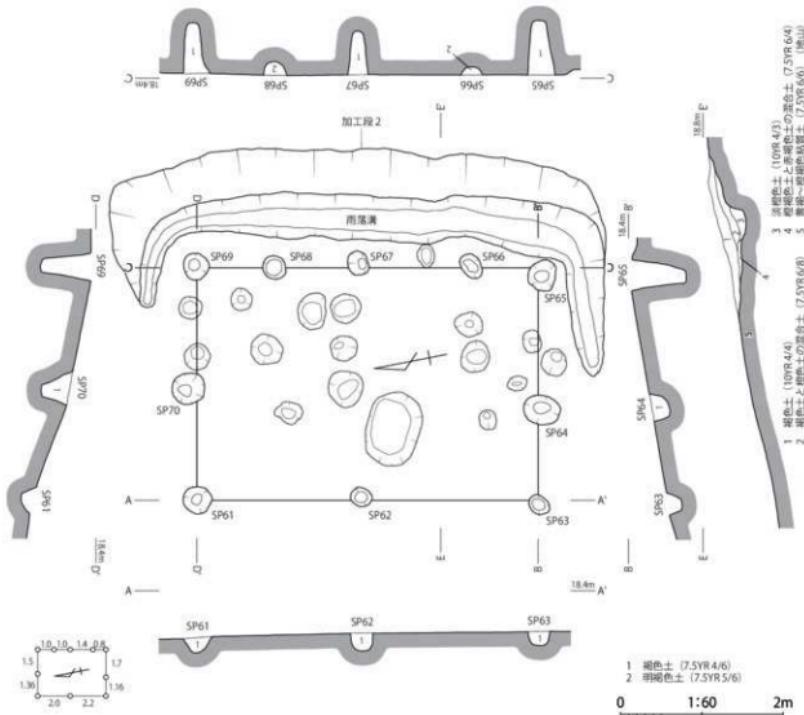
第27図 SB09平面図・断面図

SB10（第28図）

規模と形態 SB10は、調査区西側のC3グリッドに位置する標高17.82～18.34mの緩斜面で検出した加工段を伴う掘立柱建物跡である。遺構検出面は東から西に向かって傾斜しており、後世の削平によってSB10を構成する中央～西側の柱穴の上端は消失している状況であった。規模は、桁行2間、梁行2間の構造で、桁行4.20m、梁行2.86mを測る。柱間の心々距離は桁行2.00～2.20m、梁行1.16～1.70mを測る。建物の主軸方位は南北で、N-11°-Eである。

柱穴は円形を呈し、径25～40cmを測る。柱穴の深さは16～65cmを測り、埋土は褐色土と明褐色土が堆積するが、柱痕跡は確認できなかった。また、SP65・67の間に位置するSP66とP67・69の間に位置するSP68は、径20cm、深さ10～15cmを測る小規模で浅い柱穴であることから東柱と考えられ、SB10の桁行は東柱を設けた構造であることが想定される。

加工段2は、SB10の東側に隣接する位置でコの字状に検出した。現状での規模は、南北長さ6.00m、東西幅1.60～2.40m、深さ20cm前後を測る。テラス面はほぼ平坦であるが、西側に向かって



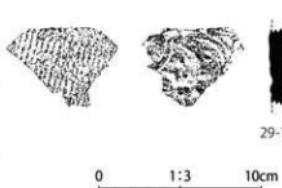
第28図 SB10平面図・断面図

傾斜している。覆土は褐色土が堆積していた。加工段の下端には、長さ 7.60 m、幅 25 ~ 50cm、深さ 25cm 前後を測る雨落溝がコの字状に延びている。

SB10 出土遺物（第 29 図） 遺物は SB09 を構成する柱穴 SP64

付近の遺構検出面から古代の須恵器片が 1 点出土した。29-1 は甌の胸部片である。外面には格子状の、内面には同心円状のタタキ目が見られる。

遺構の性格と時期 遺構の時期は、出土した須恵器から古代が想定される。SB10 は、SB09 と同様に斜面に対して平行となるよう地形に沿った配置を有する掘立柱建物と想定している。

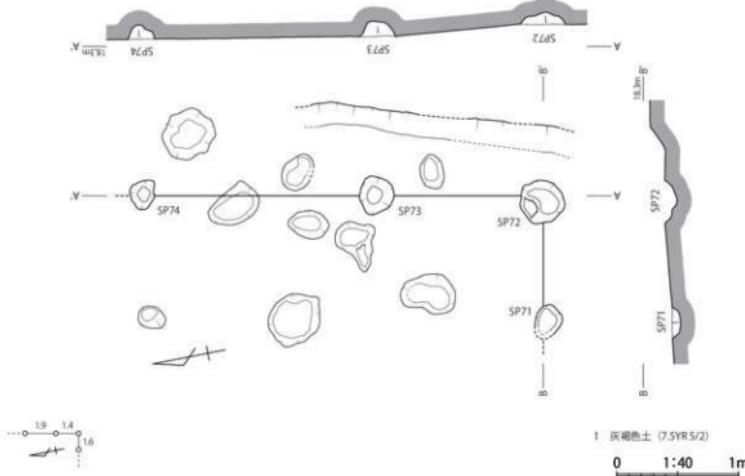


第 29 図 SB10 出土遺物

SB11（第 30 図）

規模と形態 SB11 は、調査区南西側の E2 ~ E3 グリッドに位置する標高 18.05 ~ 18.25m の緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。検出した範囲での規模は、桁行 2 間以上、梁行 1 間以上の構造で、桁行 3.30m 以上、梁行 1.00m 以上を測る。柱間の心々距離は桁行 1.40 ~ 1.90m、梁行 1.00m を測る。建物の主軸方位は南北で、N - 11° - E である。柱穴は円形を呈し、径 20 ~ 34cm を測る。柱穴の深さは 10cm を測り、埋土は灰褐色土が堆積する。SB11 を構成する柱穴から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SB11 の建築年代を明確に示す出土遺物はないが、SB10 の主軸と一致する点から見て、古代に属する建物であった可能性が高いものと考えられる。また、SB11 周辺の E2 グリッドで検出した遺構内や遺構面からは、古代に属する須恵器片や土師器片が出土している。



第 30 図 SB11 平面図・断面図

SB12（第31図）

規模と形態 SB12は、調査区北西角のA'4～A4グリッドに位置する標高17.57～18.30mの緩斜面で検出した掘立柱建物跡である。SB12を構成する柱穴には一部重複するものが含まれるが、柱穴の配置から3棟の建物が復元でき、ここではこれらをSB12Ⓐ・SB12Ⓑ・SB12Ⓒと呼称して扱う。建物の新旧関係は、柱穴の配置と切り合い関係からSB12Ⓐ（旧）～SB12ⒷおよびⒸ（新）を想定している。以下では各建物について詳細を述べる。

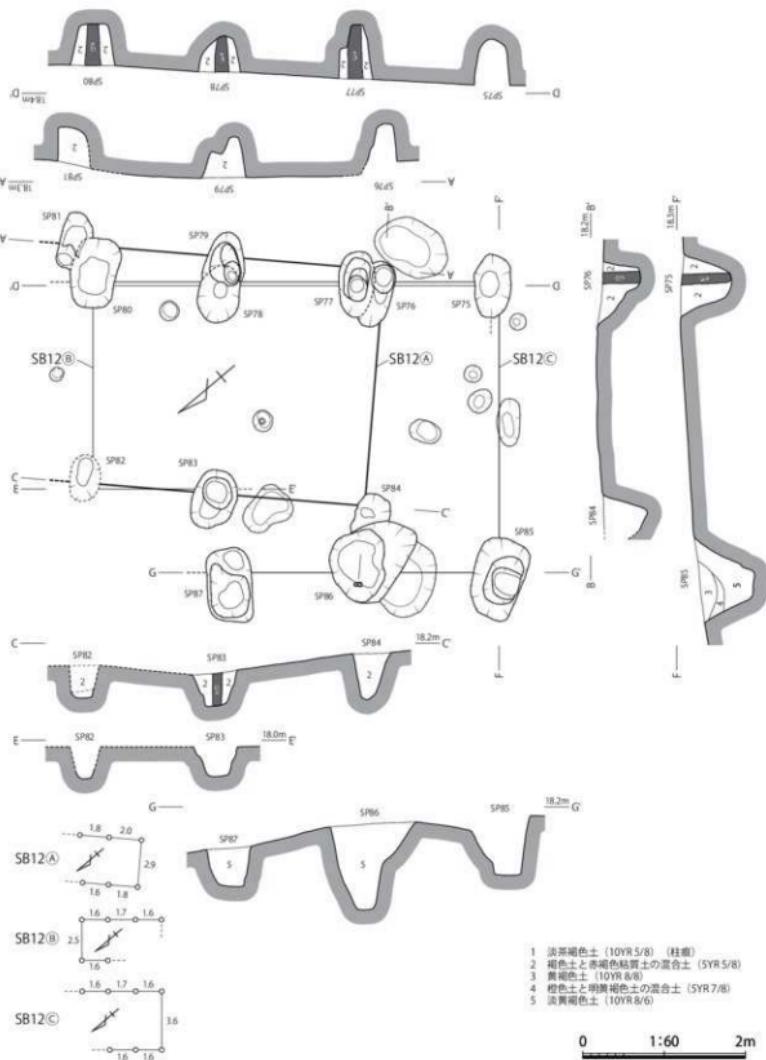
SB12Ⓐ SB12Ⓐは、南東側桁行の柱穴の切り合い関係からSB12ⒷおよびⒸよりも先行する建物と考えられる。検出した範囲での規模は、桁行2間以上、梁行1間の構造で、桁行3.40～3.80m以上、梁行2.90mを測る。柱間の心々距離は桁行1.60～2.00m、梁行2.90mを測る。SB12Ⓐを構成する北東側の柱穴は調査区外となるため検出していない。建物の主軸方位は北東～南西で、N-45°-Eである。柱穴は楕円形を呈し、長径80cm、短径40～50cmを測る。柱穴の深さは60cmを測り、埋土は褐色土と赤褐色粘質土の混合土が堆積する。SP76・83では淡茶褐色土の柱痕跡を確認した。

SB12Ⓑ SB12Ⓑは、南東側桁行の柱穴の切り合い関係からSB12Ⓐよりも後で建てられたものと考えられる。遺構検出面は南から北に向かって傾斜しており、後世の削平によってSB12Ⓑを構成する北西側の柱穴は消失していた。検出した範囲での規模は、桁行3間、梁行1間の構造で、桁行4.90m、梁行2.50mを測る。柱間の心々距離は桁行1.60～1.70m、梁行2.50mを測る。建物の主軸方位は北東～南西で、N-40°-Eであり、SB12Ⓐと比べて若干反時計回りに振れている。柱穴は楕円形を呈し、長径70～80cm、短径45～50cmを測る。柱穴の深さは45～65cmを測り、埋土は褐色土と赤褐色粘質土の混合土が堆積する。SP75・77・78・80・83では淡茶褐色土の柱痕跡を確認した。

SB12Ⓒ SB12Ⓒの南東側桁行の柱穴は、SB12Ⓑの柱穴と重複している。SB12ⒷとⒸの新旧関係は明確ではないが、SB12Ⓒを構築する段階にSB12Ⓑの北西側桁行が拡張されたものとすれば、SB12Ⓑ（旧）～SB12Ⓒ（新）と考えられる。検出した範囲での規模は、桁行3間以上、梁行1間の構造で、桁行4.90m以上、梁行3.60mを測る。柱間の心々距離は桁行1.60～1.70m、梁行3.60mを測る。SB12Ⓒを構成する北東側の柱穴は調査区外となるため検出していない。建物の主軸方位は北東～南西で、N-40°-Eであり、SB12Ⓑと同じ主軸を置く。柱穴は楕円形～隅丸方形を呈し、長径70～95cm、短径45～60cmを測る。柱穴の深さは45～100cmを測り、埋土は南東側桁行の柱穴に褐色土と赤褐色粘質土の混合土、北西側桁行の柱穴に淡黄褐色土が堆積する。SP75・77・78・80では淡茶褐色土の柱痕跡を確認した。

SB12出土遺物 遺物はSB12ⒷおよびⒸを構成する柱穴SP75内から磁器片が3点、SP80内から陶器片が4点出土した。いずれも小片のため図化していないが、出土した陶磁器は肥前系磁器の陶胎染付と外青磁の碗、京信系陶器の碗である。肥前系磁器は九陶編年IV期（1690～1780年代）、京信系陶器は18世紀後半に属する近世陶磁器である。

遺構の性格と時期 遺構の時期は、出土した陶磁器から18世紀後半が想定される。建物の性格は一般的な居住用建物を想定している。柱穴の切り合い関係から、SB12Ⓐが構築された後の段階にSB12ⒷおよびⒸの2回にわたる建て替えが行われていた可能性が考えられる。



第31図 SB12 平面図・断面図

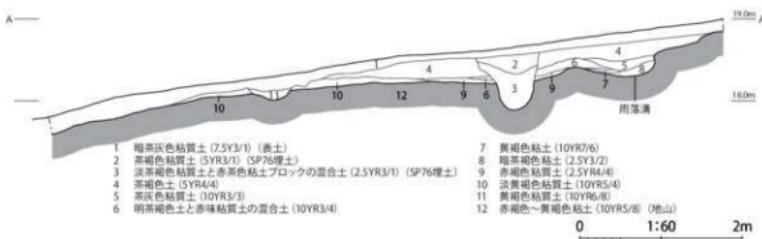
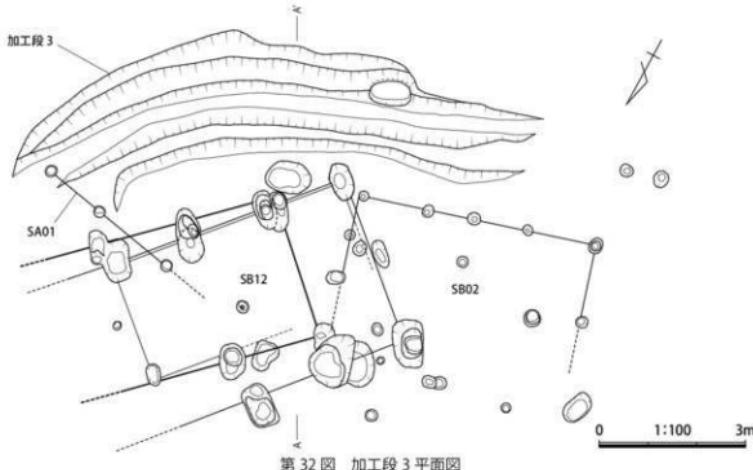
第2項 加工段

今回の調査では3箇所の加工段を検出している。加工段1はSB09に、加工段2はSB10にそれれ伴う遺構と考えられるため、本章第1項の中で扱った。ここでは加工段3について詳細を述べる。

加工段3（第32・33図）

規模と形態 加工段3は、調査区北西角のA'4～A4グリッドに位置する標高18.30～18.95mの緩斜面で検出し、SB02・12の南側に隣接する位置関係にあたる。加工段の南西側は後世の削平により消失している。現状での規模は、東西長さ11.00m、南北幅1.45～2.55m、深さ60cm前後を測る。テラス面はほぼ平坦であるが、北西側に向かって傾斜している。覆土は茶褐色～赤褐色粘質土が堆積していた。加工段の下端には、長さ11.10m、幅60～85cm、深さ10cm前後を測る雨落溝が北東～南西方向に延びている。加工段と雨落溝および覆土から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SB12を構成する柱穴は加工段3の覆土上面から掘り込まれているため、加工段3とSB12が併存していたとは考え難い。一方で、加工段3とSB02はほぼ同一な主軸を指向している点から、加工段3はSB02と同様に古墳時代中期に属する遺構である可能性は高いものと想定する。

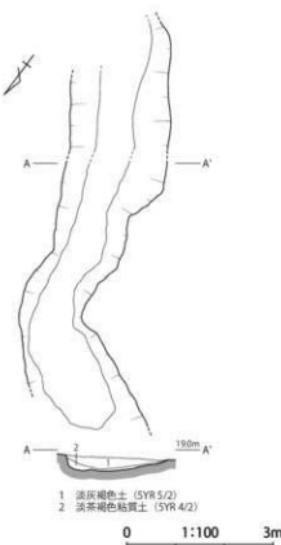


第3項 自然流路

NR01 (第34図)

規模と形態 NR01は、調査区南西側のF3 グリッドに位置する標高 17.95 ~ 18.80m の斜面で検出した南東側から北西側へ向かってやや蛇行する溝状の落ち込みである。検出した範囲での規模は、長さ 7.40m、幅 1.30 ~ 2.00m、深さ 25 ~ 35cm を測り、主軸方位は N - 27° - W である。断面形は浅い皿状を呈し、埋土の下層には地山ブロックが斑状に含まれていることから、水流作用による粒度淘汰法を受けた堆積の可能性がある。NR01 から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 NR01 を検出した調査区南西側は谷状地形となっており、NR01 の形態や埋土の状況から、人為的に埋め戻された痕跡は確認していないため自然流路としたが、詳細な時期については不明である。



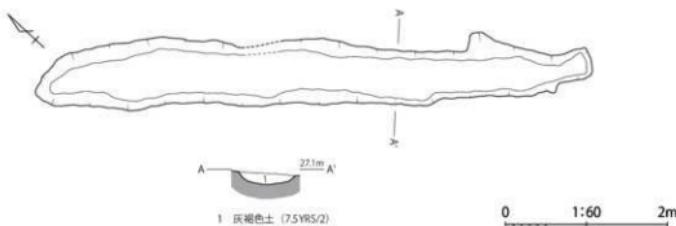
第34図 NR01 平面図・断面図

第4項 溝

SD01 (第35図)

規模と形態 SD01は、調査区東端のC10 ~ D10 グリッドに位置する標高 26.28 ~ 27.27m の緩斜面で検出した溝である。規模は、長さ 6.80m、幅 80cm、深さ 15 ~ 20cm を測る。主軸方位は南東 - 北西で、N - 44° - W である。素掘の溝で、断面形は浅い U 字状を呈する。溝底部は標高 26.17 ~ 27.17m で、排水方向は南東側から北西側へ向かって下る。埋土は灰褐色土の単層が堆積する。

SD01 出土遺物 遺物は SD01 の埋土中から陶器片が 1 点出土した。小片のため図化していないが、内外面に線釉を施す在地系陶器（布志名焼）の碗で、19世紀前半に属する近世陶磁器である。



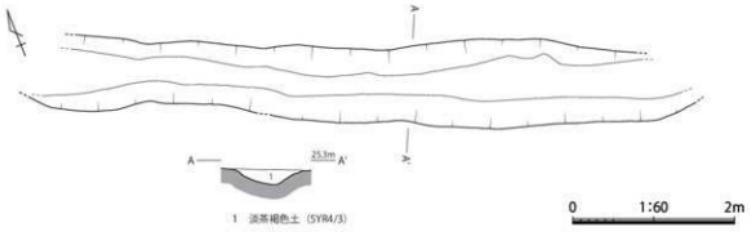
第35図 SD01 平面図・断面図

遺構の性格と時期 SD01の南側には、後述する近世墓群ST01～11を検出した墓域や近世の里道と考えられるSFO3・04が存在している。遺構の位置関係から、SD01は墓域に関連する遺構である可能性を考えておきたい。SD01の時期は、出土した陶器から19世紀前半を想定している。

SD02（第36図）

規模と形態 SD02は、調査区東側のD8グリッドに位置する標高24.75～25.45mの緩斜面で検出した溝である。溝の両端は近現代の擾乱によって消失している。検出した範囲での規模は、長さ8.20m、幅80～110cm、深さ10～20cmを測る。主軸方位は南東～北西で、N-67°～Wである。素掘の溝で、断面形は浅いU字状を呈する。溝底部は標高24.63～25.32mで、排水方向は南東側から北西側へ向かって下る。埋土は淡茶褐色土の単層が堆積する。SD02から遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SD02を境に南側では柱穴や土坑が散見されることから、これらの遺構に関連する溝の可能性を考えられるが、遺物が出土していないため詳細な時期については不明である。

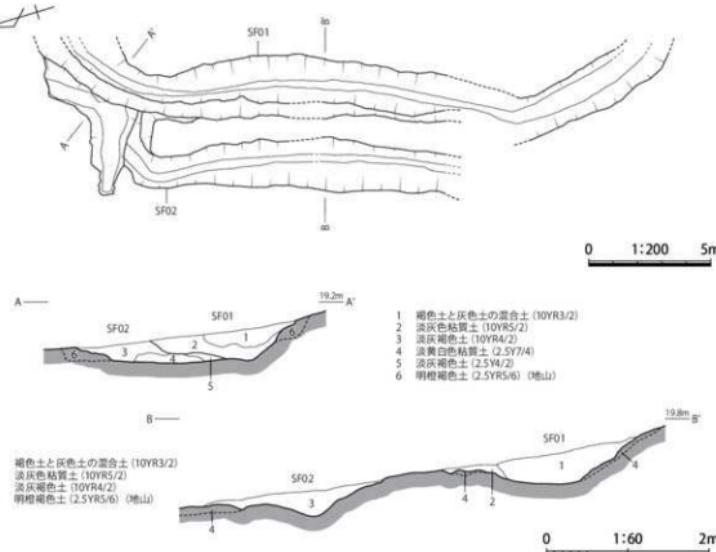


第36図 SD02 平面図・断面図

第5項 道路

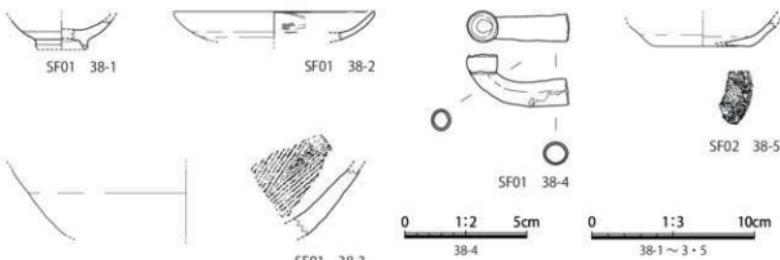
SF01・02（第37図）

規模と形態 SF01・02の検出位置は、調査前の段階で段状の畠地となっていた場所にあたる。この畠地の平坦面で検出したSF01・02は、排水を目的としていない遺構と考えられるため、道路（里道）の一部とした。SF01・02は、調査区西側のC3・C4・D3・D4・E3グリッドに位置する標高18.65～19.60mの緩斜面で検出した里道跡である。SF01は南北方向に緩い円弧状に延び、SF02はその西側に隣接する位置で南北方向に直線的に延びる。SF01の両端は東側の調査区外へ続き、SF02の南側は削平により消失していた。SF02の北側はSF01に向かって鉤型状に曲がり、C4グリッド内ではこの2つの道の分岐点を確認している。SF01の検出した範囲での規模は、長さ26.00m、幅1.60～2.50m、深さ50～70cmを測る。SF02は長さ17.30m、幅1.20～2.20m、深さ40cm前後を測る。主軸方位はいずれも南北で、N-17°～Eである。断面形は浅い窪み状を呈し、埋土はSF01に褐色土と灰色土の混合土、SF02に淡灰褐色土が堆積する。SF01・02の分岐点では遺構の切り合い関係を確認するために、SF01・02の主軸と直交する位置にトレンチを設定した（第37図A-A'間）。この結果、土層断面からSF02が先行し、その後の段階でSF01が掘り込まれている状況を確認した。



第37図 SF01・02 平面図・断面図

SF01・02 出土遺物 (第38図) 遺物は SF01・02 の埋土中から陶磁器・土師器・金属製品が出土した。いずれも小片や細片のものが多く、その中から実測可能な遺物を抽出して掲載した。38-1～4は SF01 から出土した陶磁器と金属製品である。38-1は肥前系磁器の丸形碗で、胴部下方へ高台のみ残存する。胴部下方と高台脇の外縁に圓線を施す。九陶編年V期 (1780～1810年代)。38-2は肥前系磁器の皿で、口縁部のみ残存する。内面に流水文を施す。九陶編年IV期 (1730～1780年代)。38-3は在地系陶器の鉢鉢で、胴部のみ残存する。内面のスリミ単位は 10 本。19世紀前半。38-4は煙管の雁首である。真鍮製で、火皿下の脂返しから首部にかけて僅かに肥大させる。38-5は SF02 から出土した在地系土師器皿で、底部外縁に糸切り痕をもつ。底部の器壁が薄く、堅緻な焼成である。

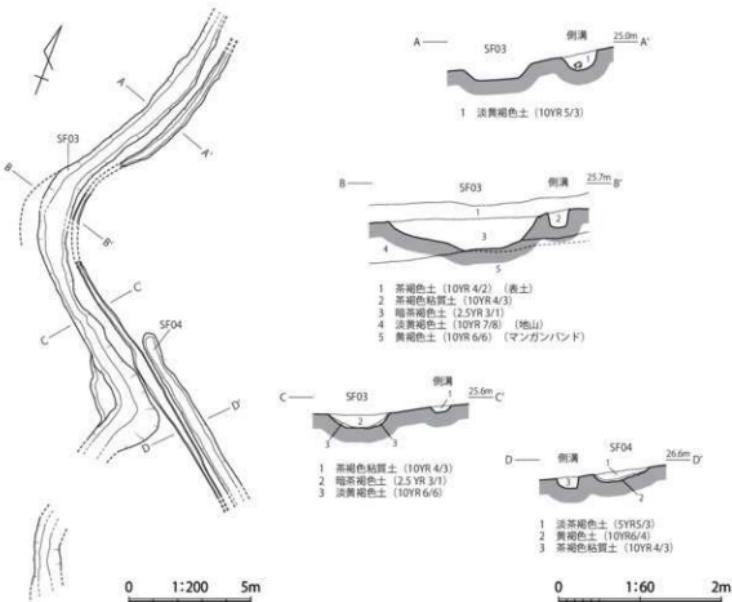


第38図 SF01・02 出土遺物

遺構の性格と時期 SF02は、切り合い関係からSF01よりもやや先行する時期の里道と捉えられ、あまり時期を隔てない時間幅での造り替えであったものと推察される。SF01・02の時期は、出土した陶磁器から18世紀後半～19世紀前半を想定している。

SF03・04(第39図)

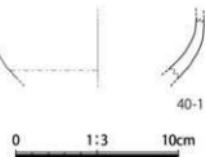
規模と形態 SF03・04の検出位置は、調査前の段階で丘陵上部へと向かう赤道となっていた場所とほぼ重複する位置関係にあたるため、この遺構を道路(里道)の一部とした。SF03・04は、調査区東側のC9・D9・E9・D10グリッドに位置する標高24.23～26.70mの斜面で検出した里道跡である。SF03は南北方向に鉤型状に延び、南端から北端までの比高差は2.50mを測る。SF04はその東側に隣接する位置で南東～北西方向に直線的に延びる。SF03の北側と南側およびSF04の南東側は調査区外へ続く。SF03の検出した範囲での規模は、長さ25.80m、幅80～150cm、深さ30～85cmを測る。主軸方位は南北である。断面形は浅い窪み状を呈し、埋土は暗茶褐色土と淡黄褐色土が堆積する。また、SF03の東側では、幅20～25cm、深さ10～15cmを測る素掘の溝を検出しており、この溝はSF03に伴う片側側溝の可能性が考えられる。SF04は長さ7.30m、幅60cm、深さ10～15cmを測る。主軸方位は南東～北西で、N-48°-Wである。断面形は浅い窪み状を呈し、埋土は淡茶褐色土と黄褐色土が堆積する。



第39図 SF03・04 平面図・断面図

SF03・04 出土遺物（第40図） 遺物はSF03からは出土せず、SF04の埋土中から陶磁器と土師器が出土した。いずれも小片のため、その中から実測可能な遺物を抽出して掲載した。40-1は在地系陶器（布志名焼）の碗で、胴部下方のみ残存する。内外面に緑釉を施す。19世紀前半に属する近世陶磁器である。

遺構の性格と時期 SF03の東側の斜面上方に位置する平坦面には、後述する近世墓群ST01～11を検出した墓域が存在し、SF03は北側の斜面下方に位置する平坦面に向かってL字形に降っていく。特にSF03の南側はこの墓域を避けるような形状で鉤型に曲がっており、明らかに墓域の存在を認識した位置関係にあたるものと考えられる。また、SF04は墓域の中央付近を横断する位置にある。このような遺構の位置関係から、SF03・04は墓域に近接した近世の里道の一部である可能性が考えられる。SF03・04の時期は、出土した陶磁器から18世紀後半～19世紀前半を想定している。



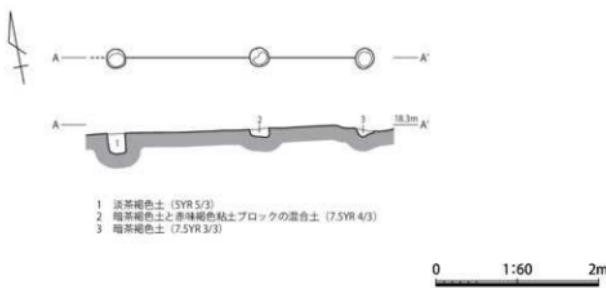
第40図 SF04出土遺物

第6項 櫛

SA01（第41図）

規模と形態 SA01は、調査区北西角のA'4グリッドに位置し、標高18.20～18.25mのほぼ平坦面で東西方向に一直線に配置された柱穴列を検出したことから柵とした。検出した範囲での規模は、長さ3.00mを測り、主軸方位は東西で、E-11°-Sである。柵を構成する柱穴は3穴あり、いずれも平面形は円形を呈し、規模は径20～25cm、深さ10～23cmを測る。柱間距離は1.25～1.75mを測る。埋土は淡茶褐色～暗茶褐色土が堆積する柱痕跡は確認できず、遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SA01はSB12と重複する位置関係にあり、SB12よりも先行する時期の遺構と考えられる。SA01は加工段3の北端に位置し、検出位置からSA01と加工段3は密接な関係をもちつつ機能していたものと想定され、同時期に併存していた可能性は高いものと考えている。SA01の性格は加工段3内で検出したSB02を含む居住施設の範囲を区画する遮蔽施設と考えられ、時期は加工段3と同様に古墳時代中期に属する遺構と想定しておきたい。

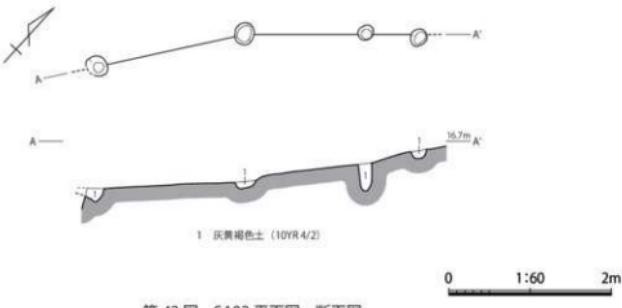


第41図 SA01平面図・断面図

SA02 (第42図)

規模と形態 SA02は、調査区南西角のF2グリッドに位置し、標高16.08～16.62mの斜面で北東～南西方向に単独で配置された柱穴列を検出したことから柵とした。検出した範囲での規模は、長さ4.00mでやや北東寄りに延びる。主軸方位は北東～南西で、N-41°Eである。柵を構成する柱穴は4穴あり、いずれも平面形は円形を呈し、規模は径20～30cm、深さ15～40cmを測る。柱間距離は0.65～1.80mを測る。埋土は灰黄褐色土の単層が堆積するが柱痕跡は確認できず、遺物は出土していない。

遺構の性格と時期 SA02の検出位置は谷状地形部分であり、周辺の遺構は土坑を1基確認したのみである。遺物が出土していないため詳細な時期については不明である。

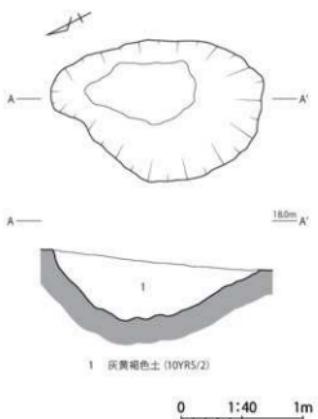


第42図 SA02 平面図・断面図

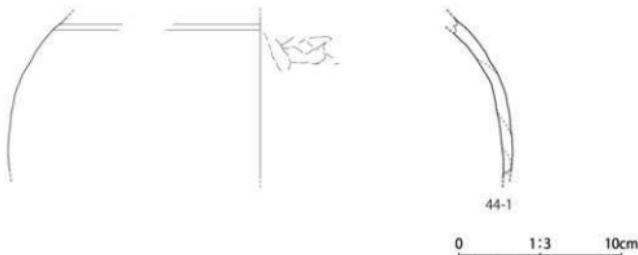
第7項 土坑**SK01 (第43図)**

規模と形態 SK01は、調査区西侧のD2グリッドに位置し、標高17.70mの緩斜面で検出した土坑である。平面形は歪んだ楕円形を呈し、規模は長径174cm、短径116cmを測る。断面形は皿状を呈し、深さ50cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層が堆積する。

SK01出土遺物(第44図) 遺物はSK01内の土坑上位から弥生土器が1点出土した。44-1は壺で、口縁部と胴部下方～底部を欠き、胴部上方のみ残存する。調整は、外面は風化のため定かではないが、内面の頸部下方付近にミガキが認められる。器壁は1cm前後と厚く、胎土は5mm程度の石英・長石等の粗い砂粒を多く含む。文様等を欠くため明確な位置付けは難しいが、弥生時代前期後葉、出雲I-3～4様式に属するものか。



第43図 SK01 平面図・断面図



第44図 SK01出土遺物

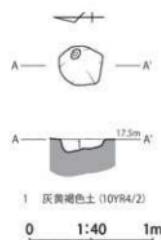
遺構の性格と時期 埋土中から弥生土器片が出土したが、遺構の性格は不明である。SK01の時期は、出土した弥生土器から弥生時代前期を想定している。

SK02（第45図）

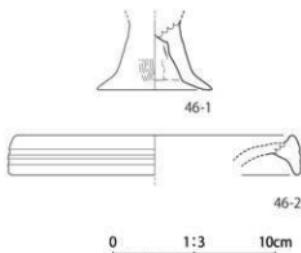
規模と形態 SK02は、調査区西側のC3グリッドに位置し、標高17.50mの緩斜面で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、規模は径36cmを測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ10cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層が堆積する。

SK02出土遺物（第46図） 遺物はSK02内から土師器片が1点と弥生土器片が1点出土した。46-1は高杯の脚部である。短脚タイプの高杯で、脚部下半が屈曲し、脚部端に向かって器壁を薄くする。赤彩は確認できない。古墳時代中期に属する。46-2は壺の口縁部である。口縁端部に2条の四線文を施す。弥生時代中期中葉、出雲III-2様式に属する。

遺構の性格と時期 SK02は土坑としたが規模が小さく、柱穴の可能性も考えられるため、遺構の性格は不明である。SK02の時期は、出土した土師器（46-1）から古墳時代中期を想定している。弥生土器（46-2）は弥生時代中期の土器で、混入品と考えられる。また、SK02の周辺には古墳時代中期の掘立柱建物SB01が存在していることから、古墳時代中期に属する遺構である可能性は高いものと想定される。



第45図 SK02平面図・断面図



第46図 SK02出土遺物

SK03（第47図）

規模と形態 SK03は、調査区西側のC3グリッドに位置し、標高17.36mの緩斜面で検出した土坑である。平面形は歪んだ楕円形を呈し、規模は長径72cm、短径50cmを測る。断面形はU字状を呈し、深さ34cmを測る。埋土は灰黄褐色土の単層が堆積する。

SK03 出土遺物 遺物は SK03 内から土師器片が 6 点出土した。小片のため図化していないが、いずれも壺瓶類で外面に煤が付着するものも含まれる。明確な位置付けは難しいが、古墳時代中期に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 SK03 の北側には古墳時代中期の掘立柱建物 SBO1 が存在し、これらは近接する位置関係にあるため、SK03 は SBO1 と比較的近い時期に營まれた遺構である可能性が考えられる。SK03 の時期は、出土した土師器から古墳時代中期を想定している。

SK04 (第 48 図)

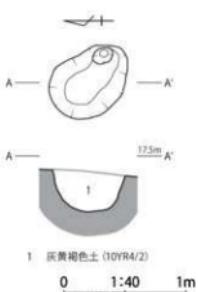
規模と形態 SK04 は、調査区西側の B3 グリッドに位置し、標高 17.20m の緩斜面で検出した土坑である。平面形は歪んだ円形を呈し、規模は長径 65cm、短径 58cm を測る。断面形は浅い皿状を呈し、深さ 16cm を測る。埋土は淡黄褐色土の単層が堆積する。

SK04 出土遺物 遺物は SK04 内から土師器片が 5 点出土した。小片のため図化していないが、いずれも壺瓶類で古墳時代中期に属する遺物と考えられる。

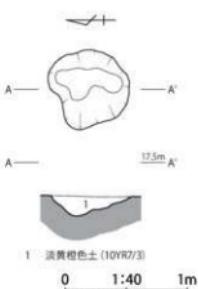
遺構の性格と時期 SK04 は SK03 の北側に近接した位置で検出した土坑で、これらが同時併存していた可能性は高い。また、SK04 は古墳時代中期の掘立柱建物 SBO1 内にあたる位置関係があり、SBO1 に関連した遺構と考えられる。SK04 の時期は、出土した土師器から古墳時代中期を想定している。

SK05 (第 49 図)

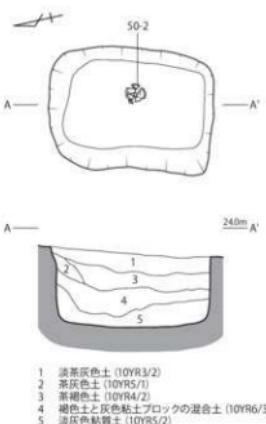
規模と形態 SK05 は、調査区南側の F6 グリッドに位置し、標高 23.80m の平坦面で検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸 130cm、短軸 100cm を測る。断面形は方形を呈し、深さ 60cm を測る。埋土は上層から淡茶灰色土、茶灰色土、茶褐色土、褐色土と灰色粘土ブロックの混合土、淡灰色粘土の 5 層が堆積する。最下層の淡灰色粘土土は炭化物を含む有機質土である。水平に近い堆積状況や粘土ブロックを多く含む土層が堆積している点から見て、墓壙の可能性も考えられるが詳細は不明である。



第 47 図 SK03 平面図・断面図



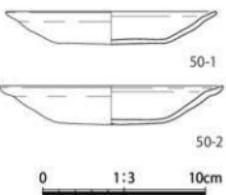
第 48 図 SK04 平面図・断面図



第 49 図 SK05 平面図・断面図

SK05 出土遺物（第50図） 遺物はSK05内の土坑底面から土師器皿が2点出土した。50-1・2は手づくね成形の京都系土師器皿である。全体的に器壁が薄く、非常に堅緻な焼成である。これらは近世に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 SK05は埋土の状況から見て、墓壙の可能性も考えられるが詳細は不明である。SK05の時期は、出土した土師器皿から近世を想定している。



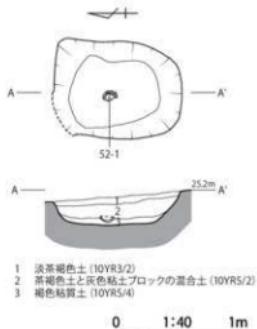
第50図 SK05 出土遺物

SK06（第51図）

規模と形態 SK06は、調査区南東側のE8グリッドに位置し、標高25.20mの平坦面で検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸106cm、短軸80cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ24cmを測る。埋土は上層から淡茶褐色土、茶褐色土と灰色粘土ブロックの混合土、褐色粘質土の3層が堆積する。最下層の褐色粘質土は炭化物を含む有機質土である。深さは浅いが、水平に近い堆積状況や粘土ブロックを多く含む土層が堆積している点から見て、墓壙の可能性が考えられる遺構である。

SK06 出土遺物（第52図） 遺物はSK06内の土坑底面からやや上方で土師器皿が1点出土した。52-1は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部はほぼ平坦で、体部との境でくの字状に曲がり、体部は口縁部に向かってやや外傾する。近世に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 SK06は埋土の状況から見て、廃棄土坑あるいは墓壙の可能性もあるが、土師器皿のほかに遺物は無く、定かではない。SK06の時期は、出土した土師器皿から近世を想定している。



第51図 SK06 平面図・断面図



第52図 SK06 出土遺物

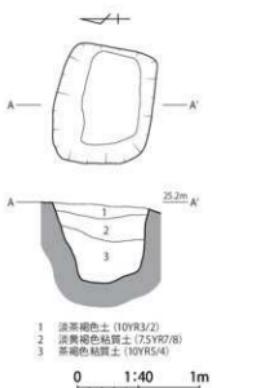
SK07（第53図）

規模と形態 SK07は、調査区南東側のE8グリッドに位置し、標高25.20mの平坦面で検出した土坑である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸96cm、短軸80cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ64cmを測る。埋土は上層から淡茶褐色土、淡黄褐色粘質土、茶褐色粘質土の3層が堆積する。中間層の淡黄褐色粘質土は炭化物を含む有機質土である。ほぼ水平に近い堆積状況や粘土ブロックを多く含む土層が堆積している点から見て、人為的に埋め戻された土坑である可能性が高い。

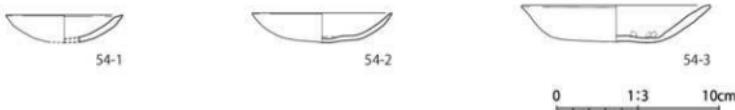
SK07 出土遺物（第54図） 遺物はSK07の検出面から土師器皿が3点出土した。検出した段階では、土

師器皿が縦方向に直立した状態での出土を確認した。54-1～3は手づくね成形の京都系土師器皿である。54-1は口径7.2cmのやや小ぶりな土師器皿で、底部に向かって丸みを帯びている。54-2は口径8.6cmの土師器皿で、内面に指頭圧痕をもつ。54-3は口径11.6cmの土師器皿で、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施す。いずれも近世に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 SK07はSK06と近接する位置関係があり、これらはほぼ同時期に營まれた遺構と考えられる。埋土の状況から見て、廃棄土坑あるいは墓壙の可能性もあるが、土師器皿のほかに遺物は無く、定かではない。SK07の時期は、出土した土師器皿から近世を想定している。



第53図 SK07 平面図・断面図



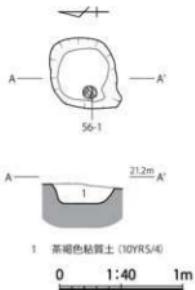
第54図 SK07 出土遺物

SK08（第55図）

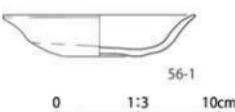
規模と形態 SK08は、調査区西側のE4グリッドに位置し、標高21.14mの緩斜面で検出した土坑である。平面形は歪んだ方形を呈し、規模は長軸55cm、短軸50cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ24cmを測る。埋土は茶褐色粘質土の単層が堆積する。

SK08出土遺物（第56図） 遺物はSK08内の土坑底面から土師器皿が1点出土した。56-1は手づくね成形の京都系土師器皿である。口径11.7cmの土師器皿で、内面に「の」字状のナデ上げ調整を施す。近世に属する遺物と考えられる。

遺構の性格と時期 SK08は後述するSK09と平面形は異なるものの、土坑底面からほぼ完形の土師器皿が単独で出土しているという点が共通する。このような状況から見て、SK08とSK09は密接した関係をもつ遺構の可能性が考えられるが、詳細は不明である。SK08の時期は、出土した土師器皿から近世を想定している。



第55図 SK08 平面図・断面図



第56図 SK08 出土遺物

SK09 (第57図)

規模と形態 SK09は、調査区西側のE4グリッドに位置し、標高21.00mの緩斜面で検出した土坑である。平面形は円形を呈し、規模は長径50cm、短径46cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ14cmを測る。埋土は茶褐色粘質土の単層が堆積する。

SK09出土遺物(第58図) 遺物はSK09内の土坑底面から土師器皿が1点出土した。58-1は手づくね成形の京都系土師器皿である。口径11.6cmの土師器皿で、内面に「ノ」字状のナデ上げ調整を施す。近世に属する遺物と考えられる。

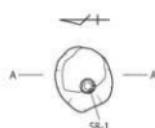
遺構の性格と時期 SK09はSK08から南西側へ3m離れた位置で検出した。いずれも土坑底面にはほぼ完形の土師器皿を伴うこと以外に遺構の性格を示す手掛かりはないが、SK08と密接した関係をもつ遺構の可能性が考えられる。SK09の時期は、出土した土師器皿から近世を想定している。

SK10 (第59図)

規模と形態 SK10は、調査区西側のD3グリッドに位置し、標高18.14mの緩斜面で検出した土坑である。平面形は歪んだ円形を呈し、規模は長径74cm、短径62cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ20cmを測る。埋土は淡黄橙色土の単層が堆積する。

SK10出土遺物(第60図) 遺物はSK10内から鉄製品が1点出土した。X線写真撮影を実施した結果、表面に付着する酸化土砂には鋳造品に典型的な放射割れが生じていることや遺物の形状から鉄鍋の破片と推定された。60-1は有段の口縁部～体部にかけての鉄鍋の破片である。口縁部の立ち上がりは短く、蓋受けの屈曲は明瞭である。

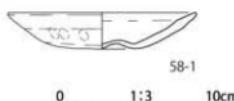
遺構の性格と時期 SK10の時期は、近世を想定しているが、鉄鍋以外に遺物が出土していないため遺構の性格や詳細な時期は不明である。島根県飯石郡飯原町に所在する森V遺跡の事例では、土坑に鉄鍋を埋納するという習俗例がある。⁽³⁾



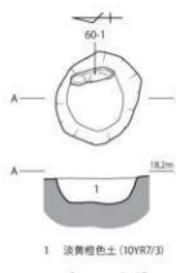
1 茶褐色粘質土 (10YR5/4)

0 1:40 1m

第57図 SK09 平面図・断面図



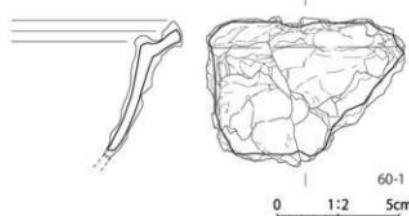
第58図 SK09 出土遺物



1 淡黄橙色土 (10YR7/3)

0 1:40 1m

第59図 SK10 平面図・断面図



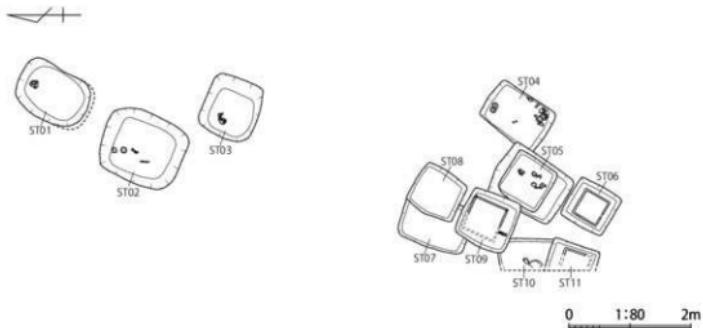
第60図 SK10 出土遺物

第8項 墓壙群

調査区東側のD9・E9 グリッドでは墓壙を 11 基(ST01 ~ 11)を検出した。墓壙内の出土遺物から、いずれも近世に属する墓壙群であることが判明した(第 61 図)。

遺物は、墓壙検出面および墓壙内から人骨・陶磁器・土師器皿・錢貨・金属製品・漆器椀が出土した。土師器皿は、完形品以外に割れた状態で出土したものがあり、出土点数の提示については整理作業の段階で完形の状態に復元した土師器皿や残存率 50%以上の土師器皿を 1 枚とカウントしている。

錢貨(縦錢を含む)は、鋸によって複数枚が固着しているものや鋸彫れが生じているものがあり、分離することが困難な錢貨については錢種の判定と計測データの詳細が不明となっている。分離することが可能な錢貨については、出土時の状態で上から 1 枚ずつ番号を付して錢貨の重なり(表裏・裏表)を確認した後に、錢種の判定と計測データの作成を行った。⁽⁴⁾以下では、今回の調査で確認した 11 基の墓壙について詳細を述べる。



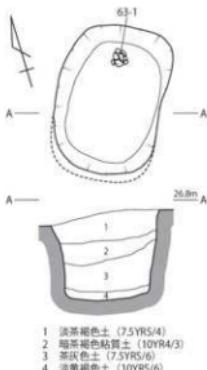
第 61 図 ST01 ~ 11 遺構配置図

ST01 (第 62 図)

規模と形態 ST01 は、調査区東側の D9 グリッドに位置し、標高 26.58 ~ 26.72 m の緩斜面で検出した墓壙である。主軸方位は北東 - 南西で、N = 31° - E である。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸 120cm、短軸 80cm を測る。断面形は方形を呈し、深さ 72cm を測る。墓壙底面は平坦である。

埋土は上層から淡茶褐色土、暗茶褐色粘質土、茶灰色土、淡黄褐色土の 4 層が堆積する。最下層の淡黄褐色土は炭化物を含み、水平に近い堆積状況を示す。墓壙内から土師器皿が出土したが、それ以外に遺物は出土していない。ST01 で棺痕跡は確認していない。

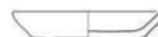
ST01 出土遺物 (第 63 図) 遺物は ST01 内の墓壙底面から



第 62 図 ST01 平面図・断面図

土師器皿が1点出土した。土師器皿は墓壙内の北側に寄った位置で出土している。

63-1は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部は体部との境でくの字状に曲がり、体部は口縁部に向かってやや内傾する。胎土の色調は黒褐色である。近世に属する遺物と考えられる。



63-1



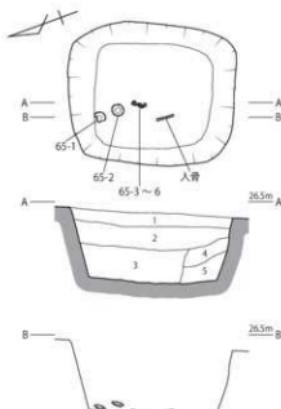
第63図 ST01出土遺物

ST02（第64図）

規模と形態 ST02は、調査区東側のD9グリッドに位置し、標高26.24～26.40mの緩斜面で検出した墓壙である。ST01の南西側に隣接する位置関係にあり、主軸方位は北東～南西で、N=23°～Eである。平面形は隅丸方形を呈し、規模は長軸136cm、短軸112cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ56cmを測る。墓壙底面は平坦である。

埋土は上層から淡茶褐色土、茶褐色土と橙褐色土の混合土、褐色土と地山粘土ブロックの混合土、茶褐色土、淡黄褐色土の5層が堆積する。土層断面図の第3層と第4・5層の境目は、棺痕跡の可能性がある。墓壙内から人骨、土師器皿、銭貨、漆器椀が出土した。

ST02出土遺物（第65図） 遺物はST02内の墓壙底面から人骨が1点、土師器皿が2点、銭貨が4点、漆器椀が1点出土した。人骨・銭貨・漆器椀は墓壙内の中央付近、土師器皿は墓壙内の北側に寄った位置で出土し、これらの遺物は出土状況から埋葬時に副葬されたものと捉えている。漆器椀は小片のため図化し



- 1 淡茶褐色土 (7SYR 5/4)
- 2 茶褐色土と橙褐色土の混合土 (7SYR 5/6)
- 3 褐色土と地山粘土ブロックの混合土 (5SYR 6/6)
- 4 黄褐色土 (10YR 6/6)
- 5 淡黄褐色土 (10YR 5/6)



第64図 ST02平面図・断面図



65-1



65-2



65-3



65-5



65-4



65-6



第65図 ST02出土遺物

ていないが、内側に銭貨が付着した状態で出土していることから、漆器碗の中に銭貨が納められていたものと考えられる。人骨は破片で遺存状態が不良なため、部位の特定はできなかった。

65-1・2は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部は体部との境でくの字状に曲がり、体部は口縁部に向かってやや内傾する。胎土の色調は褐色～橙褐色である。65-3～6は銭貨である。このうち65-3・4は銭貨が固着した状態で出土した。いずれも寛永通寶で、65-3～5は古寛永、65-6は新寛永である。⁽⁵⁾これらは近世に属する遺物と考えられる。

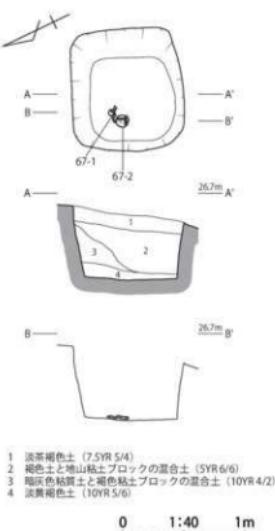
ST03 (第66図)

規模と形態 ST03は、調査区東側のD9 グリッドに位置し、標高 26.42～26.70 m の緩斜面で検出した墓壙である。ST02 の南東側に隣接する位置関係にある。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は長軸 100cm、短軸 90cm を測る。断面形は方形を呈し、深さ 53cm を測る。墓壙底面は平坦である。

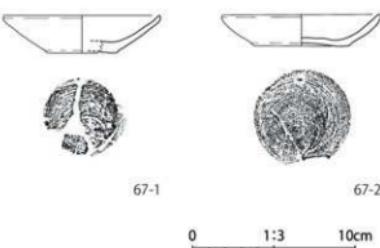
埋土は上層から淡茶褐色土、褐色土と地山粘土ブロックの混合土、暗灰色粘質土と褐色粘土ブロックの混合土、淡黄褐色土の4層が堆積する。ST03で棺痕跡は確認していないが、土層断面図の第3層は棺材の腐朽により、土砂が流入して堆積した痕跡を示している可能性が考えられる。墓壙内から人骨（歯）と土師器皿が出土した。

ST03 出土遺物 (第67図) 遺物はST03内の埋土掘り下げ時に最下層の淡黄褐色土の中から人骨（歯）が1点、墓壙底面から土師器皿が2点出土した。人骨（歯）は墓壙内の中央付近、土師器皿は墓壙内の中央からやや北側に寄った位置で2点とも割れた状態で出土している。

67-1・2は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部は体部との境でくの字状に曲がり、体部は口縁部に向かってやや内傾する。67-1は体部との境に明瞭な段をもつ。胎土の色調は67-1が橙褐色、67-2が淡褐色である。これらは近世に属する遺物と考えられる。



第66図 ST03 平面図・断面図



第67図 ST03 出土遺物

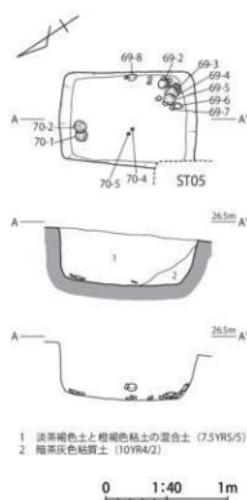
ST04（第68図）

規模と形態 ST04は、墓壙が密集する調査区東側のE9グリッドに位置し、標高26.40mの平坦面で検出した墓壙である。墓壙南西角の一部はST05と切り合い、新旧関係はST04（旧）-ST05（新）である。主軸方位は北東-南西で、N-35°-Eである。平面形は長方形を呈し、規模は長軸114cm、短軸75cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ42cmを測る。墓壙底面は平坦である。

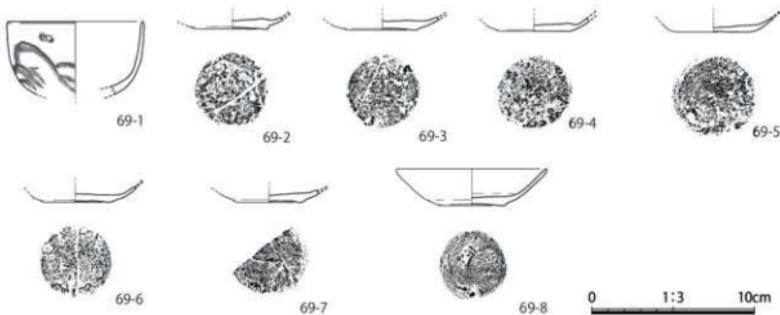
埋土は上層から淡茶褐色土と橙褐色粘土の混合土、暗茶灰色粘質土の2層が堆積する。墓壙内から陶磁器、土師器皿、金属製品、錢貨が出土した。ST04で棺痕跡は確認していない。

ST04出土遺物（第69・70図） 遺物はST04の検出面から陶磁器が1点、墓壙底面から土師器皿が9点、金属製品が1点、錢貨が2点出土した。錢貨は墓壙内の中央付近、土師器皿は墓壙内の北側寄りおよび南側の壁際に寄った位置で出土した。墓壙検出面から出土した遺物は供献品の可能性があり、墓壙内の遺物は出土状況から埋葬時に副葬されたものと捉えている。

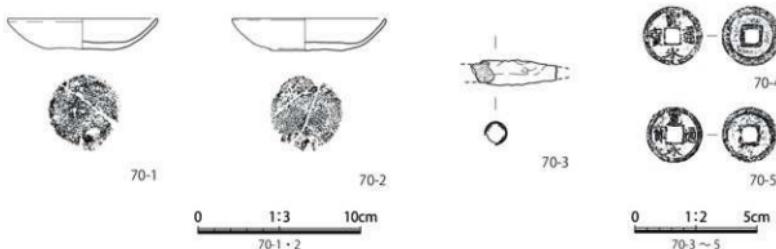
69-1は肥前系磁器の丸形碗で、口縁部～胴部のみ残存する。胴部外面に山水文の染付を施す。九陶編年V期（1780～1810年代）。69-2～70-2は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部は体部との境で緩やかに曲がり、体部は口縁部に向かって直線的に延びる。体部の器壁は薄く、胎土の色調は橙褐色である。70-3は煙管の吸口である。真鍮製で、肩に傾きをもたせるが、小口と口付部分は欠損する。70-4・5は錢貨である。いずれも寛永通寶で、70-4は古寛永、70-5は新寛永である。出土した陶磁器の年代から、これらは近世後半（18世紀後半）に属する遺物と考えられる。



第68図 ST04 平面図・断面図



第69図 ST04出土遺物 (1)



第70図 ST04出土遺物(2)

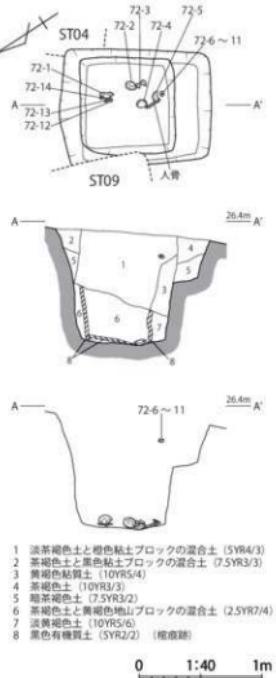
ST05 (第71図)

規模と形態 ST05は、墓壙が密集する調査区東側のE9グリッドに位置し、標高 26.35 m の平坦面で検出した墓壙である。墓壙北東角の一部はST04と切り合い、西側はST09と切り合う。新旧関係は墓壙の切り合いから、ST04より新しく、ST09より古い墓壙と考えられる。主軸方位は北東—南西で、N—34°—Eである。構造はST05以外の墓壙はいずれも段のない単純な形態であるのに対し、ST05は片側にステップ状の平坦面をもつ2段掘りを呈する。平面形は長方形を呈し、規模は長軸 124cm、短軸 90cmを測る。断面形は逆凸形を呈し、深さ 92cmを測る。墓壙底面は平坦である。

土層断面では棺材の腐朽により陥没した状況を確認した。埋土は上層から淡茶褐色土と橙色粘土ブロックの混合土、茶褐色土と黒色粘土ブロックの混合土、黄褐色粘質土、茶褐色土、暗茶褐色土、茶褐色土と黄褐色地山ブロックの混合土、淡黄褐色土の7層が堆積する。墓壙内から人骨、土師器皿、銭貨が出土した。

墓壙下方～底面では棺痕跡を確認した。棺痕跡は断面でのみ確認したもので、黒色有機質土が堆積する。棺の天板の痕跡は未検出だが、側板と底板の痕跡から一辺 55cmを測る方形木棺が墓壙底面に置かれていたものと推定される。埋葬形態は、木棺を用いた土葬と考えられる。埋葬体位は、人骨が出土しているが小部位なため詳細は不明だが、木棺の規模から座葬で埋葬されたものと想定される。

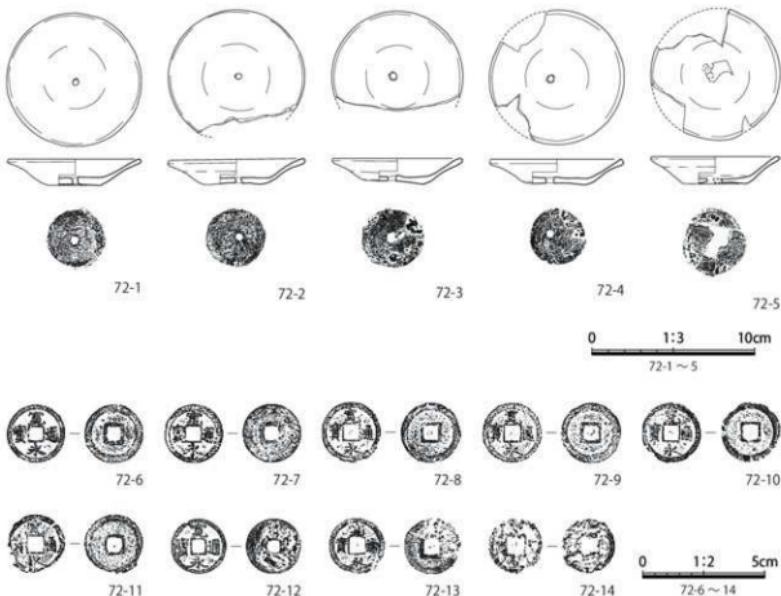
ST05出土遺物 (第72図) 遺物はST05内の上層から銭貨が6点、墓壙底面から人骨が1点、土師



第71図 ST05平面図・断面図

器皿が5点、銭貨が3点出土した。銭貨は墓壙内の中央からやや北側寄りおよび南側、土師器皿は墓壙内の西側に寄った位置で出土した。墓壙内の上層から出土した銭貨(72-6~11)は墓壙内の高い位置から出土していることから、木棺を設置した後に納められた可能性が考えられる。人骨は破片で遺存状態が不良であったため、部位の特定はできなかった。墓壙内の遺物は出土状況から埋葬時に副葬されたものと捉えている。

72-1~5は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部は体部との境で緩やかに曲がり、体部は口縁部に向かって外傾しながら延びる。体部の器壁は薄く、口縁部で肥厚させている。胎土の色調は褐色である。土師器皿は口径7.7~8.2cm、底径3.4~3.9cm、器高1.6~1.7cmを測り、いずれも底部のほぼ中央に穿孔が施されている。穿孔の大きさは径4mmを測り、穿孔の端部に剥離痕跡をもつことから、錐などによる焼成後の穿孔と考えられる。今回検出した墓壙群の中で、底部穿孔の土師器皿が出土したのはST05のみである。このような土師器皿が出土している遺跡の類例については第4章に譲る。賽の神と墓壙では、その存在意義が異なるものではあるが、賽の神における底部穿孔の土師器皿の奉納は「耳の治癒」を祈願した祭祀習俗と考えられている⁽⁹⁾。72-6~14は銭貨である。このうち72-6~11は、墓壙内の上層から6枚の銭貨が重なって出土した。いずれも寛永通寶で、72-6・7・12は古寛永、72-8・9・10・11・13は新寛永である。72-14は鋳により文字が消失しているため、判読不明である。これらは近世に属する遺物と考えられる。



第72図 ST05 出土遺物

ST06 (第73図)

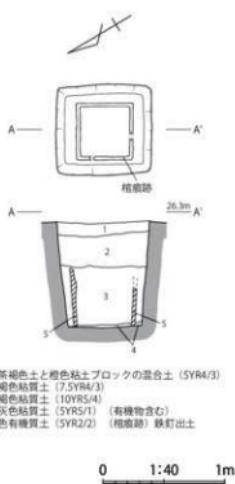
規模と形態 ST06は、墓壙が密集する調査区東側のE9グリッドに位置し、標高26.22mの平坦面で検出した墓壙である。平面形はほぼ正方形を呈し、規模は長軸78cm、短軸74cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ85cmを測る。墓壙底面は平坦である。

埋土は上層から淡茶褐色土と橙色粘土ブロックの混合土、茶褐色粘質土、黄褐色粘質土、暗灰色粘質土の4層が堆積する。最下層の暗灰色粘質土は炭化物を含む有機質土である。水平に近い堆積状況から見て、自然に埋没した痕跡は確認できない。墓壙内から漆器、錢貨、金属製品が出土した。

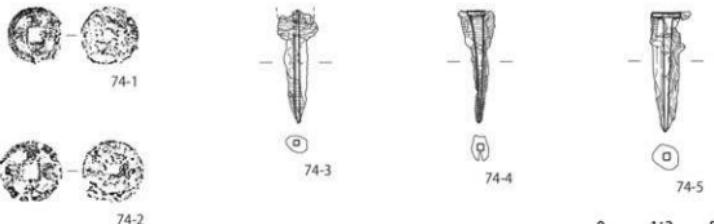
墓壙下方では棺痕跡を確認した。棺痕跡は断面と第3層まで掘り下げた段階の平面で確認したもので、黒色有機質土が堆積する。鉄釘は棺痕跡の黒色有機質土中から出土した。棺の天板と底板の痕跡は未検出だが、側板の痕跡から一辺50cmを測る方形木棺が墓壙底面に置かれていたものと推定される。

ST06出土遺物 (第74図) 遺物はST06内の埋土中から漆器碗が1点、錢貨が3点、鉄釘が3点出土した。遺物はいずれも墓壙埋土の掘り下げ時に取り上げたもので、第3層で検出した棺痕跡の内側から出土している。漆器碗は小片のため図化していないが、内側に錢貨が付着した状態で出土していることから、漆器碗の中に錢貨が納められていたものと考えられ、出土した錢貨と漆器碗は埋葬時に副葬されたものと捉えている。

74-1～2は錢貨である。いずれも寛永通寶の新寛永である。74-1は2枚の錢貨が付着している。74-3～5は鉄釘である。鉄釘は残存長4.6～4.9cm、厚さ3mmを測る頭巻の角釘である。鉄釘の外面には木質が付着しており、木質の繊維方向は頭部側に横方向の木質、先端側に縦方向の木質が観察できる。これらは近世に属する遺物と考えられる。



第73図 ST06 平面図・断面図



第74図 ST06 出土遺物

ST07・08（第75図）

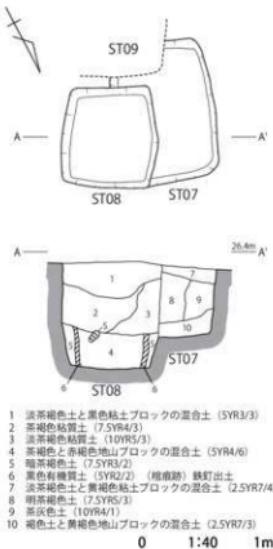
規模と形態 ST07・08は、墓壙が密集する調査区東側のD9グリッドに位置し、標高 26.32 m の平坦面で検出した墓壙である。ST07はST08と切り合い、新旧関係はST07（旧）-ST08（新）である。

ST07の平面形は長方形を呈し、規模は長軸 115cm、短軸 80cmを測る。断面形は方形を呈し、深さ 56cmを測る。墓壙底面は平坦である。主軸方位は北東-南西で、N-22°-Eである。埋土は上層から淡茶褐色土と黄褐色粘土ブロックの混合土、明茶褐色土、茶灰色土、褐色土と黄褐色地山ブロックの混合土の4層が堆積する。墓壙内から遺物は出土せず、棺痕跡も確認していない。

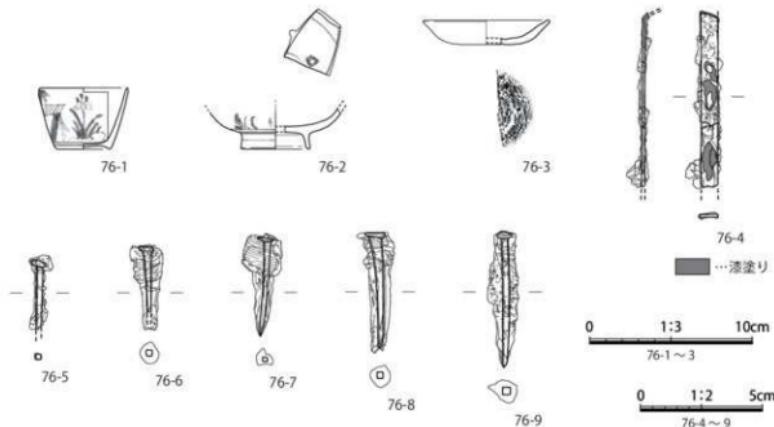
ST08の平面形はほぼ正方形を呈し、規模は長軸 82cm、短軸 80cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ 88cmを測る。墓壙底面は平坦である。埋土は上層から淡茶褐色土と黒色粘土ブロックの混合土、茶褐色粘土、淡茶褐色粘土質土、茶褐色土と赤褐色地山ブロックの混合土、暗茶褐色土の5層が堆積する。墓壙内から陶磁器、土師器皿、金属製品が出土した。墓壙下方では棺痕跡を確認した。棺痕跡は断面でのみ確認したもので、黒色有機質土が堆積する。鉄釘は棺痕跡の黒色有機質土中から出土した。棺の天板と底板の痕跡は未検出だが、側板の痕跡から一辺 60cmを測る方形木棺が墓壙底面に置かれていたものと推定される。

ST08出土遺物（第76図） 遺物はST07内からは出土せず、ST08内の検出面から陶磁器が2点、埋土中から土師器皿が1点、毛抜が1点、鉄釘が5点出土した。遺物は墓壙埋土の掘り下げ時に取り上げたもので、土師器皿と毛抜は第4層で検出した棺痕跡の内側から出土した。墓壙検出面から出土した遺物は墓壙外に供えられていた可能性があり、墓壙内の遺物は埋葬時に副葬されたものと捉えられ、赤色塗りの毛抜が出土していることからST08には女性が埋葬された可能性が考えられる。

76-1～2は陶磁器である。76-1は肥前系磁器の小环である。猪口形の小环で、胴部外面に菖蒲・八ツ橋文の染付を施す。九陶編年V期（1780～1820年代）。76-2は肥前系磁器の丸形碗で、胴部下方へ高台のみ残存する。外面に圓線と草花文の染付を施す。九陶編年V期（1780～1810年代）。76-3は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。口縁部～底部の器壁はやや厚く、胎土の色調は褐色である。76-4は毛抜である。片側は欠損するが、長さ 7.3cm、幅 0.8cm、厚さ 1.5mmの毛抜で、外面に赤色の漆が塗布されている。76-5～9は鉄釘である。鉄釘は残存長 3.0～5.6cm、厚さ 2.5～3mmを測る頭巻の角釘である。鉄釘の外面には木質が付着しており、木質の纖維方向は頭部側に横方向の木質、先端側に縦方向の木質が観察できる。出土した陶磁器の年代から、これらは近世後半（18世紀後半）に属する遺物と考えられる。



第75図 ST07・08 平面図・断面図



第76図 ST08出土遺物

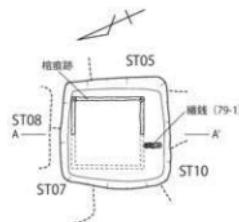
ST09（第77図）

規模と形態 ST09は、墓壙が密集する調査区東側のE9グリッドに位置し、標高26.30mの平坦面で検出した墓壙である。墓壙東側はST05、北西側はST07、南西側はST10とそれぞれ切り合う。新旧関係は墓壙の切り合いから、ST09はST05・07・10よりも新しい墓壙と考えられる。平面形は正方形を呈し、規模は一辺90cmを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ82cmを測る。墓壙底面は平坦である。

埋土は上層から黄褐色土と橙褐色粘土ブロックの混合土、茶褐色粘質土、黄褐色粘質土、淡茶褐色土と黄褐色地山ブロックの混合土、暗灰色粘質土の5層が堆積する。最下層の暗灰色粘質土は炭化物を含む有機質土である。墓壙内から土師器皿、銭貨、金属製品が出土した。

墓壙下方では棺痕跡を確認した。棺痕跡は断面と第3層まで掘り下げた段階の平面で確認したもので、灰色有機質土が堆積する。鉄釘は棺痕跡の灰色有機質土中から出土した。棺の天板の痕跡は未検出だが、底板と側板の痕跡から一辺60cmを測る方形木棺が墓壙底面に置かれていたものと推定される。

ST09出土遺物（第78・79図） 遺物はST09内の埋土中から土師器皿が1点、繩銭が1枚、鉄釘が3点出土した。遺



- 1 黄褐色土と橙褐色粘土ブロックの混合土 (SYR4/3)
- 2 茶褐色粘質土 (7SYR4/3)
- 3 黄褐色粘質土 (10YR5/4)
- 4 黄褐色粘質土と黄褐色地山ブロックの混合土 (25YR7/4)
- 5 暗灰色粘質土 (SYR5/1) (有機物含む)
- 6 暗灰色粘質土 (SYR2/2) (棺痕跡) 鉄釘出土

0 1:40 1m

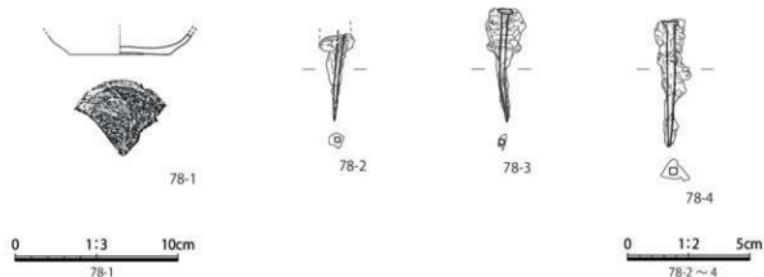
第77図 ST09平面図・断面図

物は墓壙埋土の掘り下げ時に取り上げたもので、土師器は第3層で検出した棺痕跡の内側から出土している。墓壙内の第4層から出土した銭貨は「縉銭」で、一縷が湾曲した状態で出土した。縉銭の出土位置は墓壙内の高い位置にあたる木棺の外側で出土していることから、木棺を設置した後に納めた縉銭が墓壙の埋没時に移動した可能性が考えられる。銭貨を束ねるための差紐は、銭貨の中央に植物繊維が一部残っていることから苧麻あるいは稻藁を使用したものと想定される。銭貨の外面には布（麻布か）の小片が付着した状態で残っている部分があり、布製の巾着袋の中に縉銭を納めて埋納したものと考えられる。出土した土師器皿と縉銭は埋葬時に副葬されたものと捉えている。

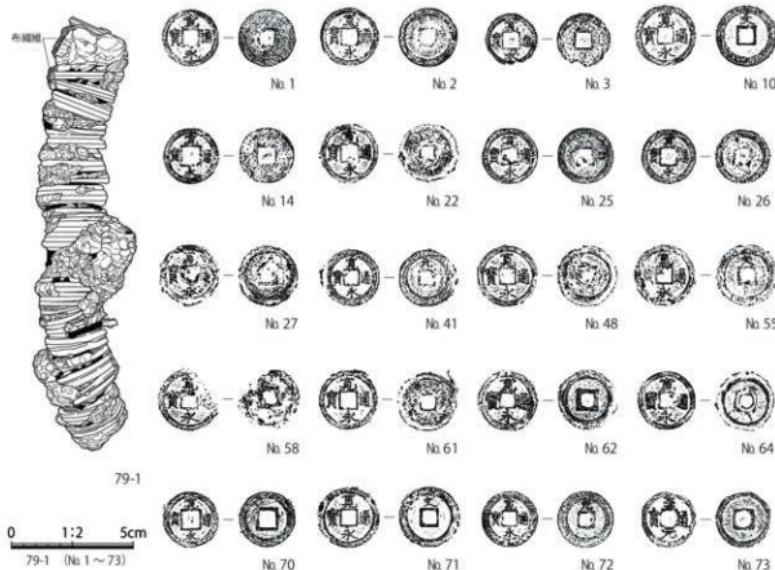
78-1は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部の器壁はやや厚く、内外面に煤が付着する。胎土の色調は褐色である。78-2～4は鉄釘である。鉄釘は残存長3.5～5.1cm、厚さ2～3mmを測る頭巻の角釘である。鉄釘の外面には木質が付着しており、木質の纖維方向は頭部側に横方向の木質、先端側に縦方向の木質が観察できる。79-1は縉銭である。縉銭は73枚からなり、長さ17.8cmを測る。銭貨は相互に固着していたり錯彫れのものも含まれるが、縉銭出土時の形状で上から一枚ずつ番号（No.1～73）を付し、銭貨の重なりを確認して銭種の判定を行った。この結果、縉銭73枚うち確認できた銭種は、寛永通寶27枚、至道元寶1枚、判読不明45枚であった。寛永通寶27枚の内訳は、古寛永5枚、新寛永22枚（背文「文」3枚、背文「元」2枚を含む）である。また、鉄銭と銅銭の内訳は、寛永通寶鉄製6枚、寛永通寶銅製21枚、至道元寶銅製1枚、鉄製不明17枚、銅製不明28枚である。縉銭の大半は寛永通寶で構成されているものと推定されるが、縉銭の下端のみに至道元寶が入っている点が特徴的である。

縉銭73枚のうち採拓が可能であった銭貨は、第79図に掲載した20枚である。内訳は、古寛永5枚（No.2・26・27・62・64）、新寛永9枚（No.1・3・14・22・25・48・58・61・70）、新寛永背文「文」3枚（No.10・55・71）、新寛永背文「元」2枚（No.41・72）、至道元寶1枚（No.73）である。

出土した縉銭には、模鋳銭と考えられる至道元寶や1636～1656年に鋳造された古寛永のように古い時期を示す銭貨がある。縉銭の中で新しい時期を示す銭貨は、1738年以降に鋳造された新寛永の鉄銭や1741年以降に鋳造された背文「元」の寛永通寶であり、ST09はこれらの銭貨が流通していた近世後半（18世紀中頃～後半）に造墓されたものと考えられる。



第78図 ST09 出土遺物（1）



第79図 ST09出土遺物(2)

ST10・11(第80図)

規模と形態 ST10・11は、墓壙が密集する調査区東側のE9グリッドに位置し、標高26.38mの平坦面で検出した墓壙である。いずれも墓壙の西側は調査区外となり未検出のため、検出規模は1/2程度である。ST10はST09・11と切り合い、新旧関係はST10(旧)－ST09・11(新)である。

ST10の平面形は長方形を呈し、規模は長軸100cm前後、短軸80cm前後を測るものと想定される。断面形は方形を呈し、深さ78cmを測る。墓壙底面は平坦である。主軸方位は南北で、N-1°-Wである。

埋土は上層から暗灰色粘質土、灰褐色粘土、褐色土と灰色粘質土の混合土、淡茶褐色土、黄褐色粘質土の5層が堆積する。墓壙内から土器皿が出土した。

ST10で棺痕跡は確認していない。

ST11の平面形は正方形を呈し、規模は一辺80cm

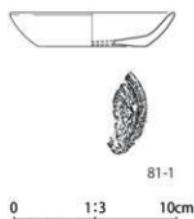


第80図 ST10・11平面図・断面図

前後を測るものと想定される。断面形は逆台形を呈し、深さ 105cm を測る。墓壙底面は平坦である。

埋土は上層から淡茶褐色土と橙色粘土ブロックの混合土、淡黄褐色粘質土の 2 層が堆積する。墓壙内から遺物は出土していない。墓壙下方では棺痕跡を確認した。棺痕跡は断面と第 2 層まで掘り下げた段階の平面で確認したもので、黒色有機質土が堆積する。棺痕跡から鉄釘は出土していない。棺の天板と底板の痕跡は未検出だが、側板の痕跡から一辺 50cm を測る方形木棺が墓壙底面に置かれていたものと推定される。

ST10 出土遺物（第 81 図） 遺物は ST11 内からは出土せず、ST10 内の上層から土師器皿が 1 点出土した。81-1 は在地系土師器皿で、底部外面に糸切り痕をもつ。底部の器壁はやや薄く、体部に向かって厚くなる。胎土の色調は橙色である。近世に属する遺物と考えられる。

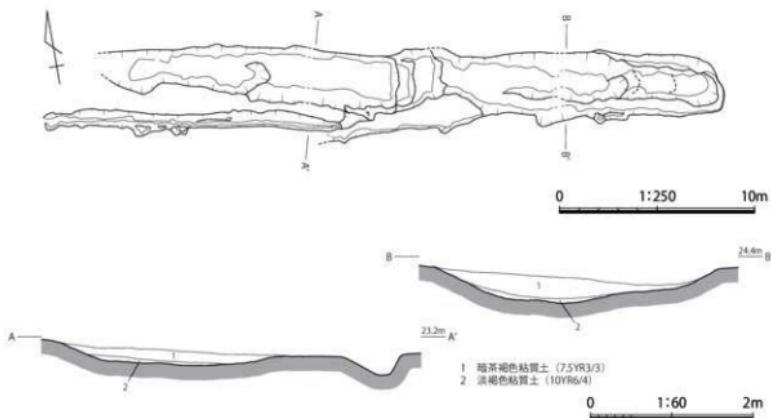


第 81 図 ST10 出土遺物

第 9 項 その他の遺構と遺物

SX01（第 82 図）

規模と形態 SX01 は、調査区中央部からやや南寄りの E5 ~ E8 グリッドに位置する標高 22.22 ~ 24.82m の緩斜面で検出した遺構である。平面形は東西方向に直線的に延び、遺構の掘方は壠塇状を呈する。SX01 の東端は E8 グリッド内で終息しているが、西端は E5 グリッド内で後世の削平により消失している。SX01 の規模は、長さ 34.80m、幅 3.20 ~ 4.00m、深さ 20 ~ 40cm を測る。主軸方位は東西で、E - 10° - S である。SX01 は東から西へ向かって傾斜をもち、SX01 の東端底面から西端底面までの比高差は 2.33m を測る。断面形は浅い窪み状を呈し、埋土は上層から暗茶褐色粘質土、淡褐色粘質土の 2 層が堆積する。



第 82 図 SX01 平面図・断面図

SX01 出土遺物（第 83 図） 遺物は SX01 の埋土中から陶磁器が出土した。いずれも小片や細片のものが多く、その中から実測可能な遺物を抽出して掲載した。83-1 は肥前系陶器の皿である。口縁部～体部のみ残存する。内外面に灰釉を施し、体部下方は露胎。九陶編年Ⅲ期（1650～1690 年代）。83-2 は肥前系陶器の平鉢である。内面に白化粧を施した後に櫛描で波状文を描く。見込みに砂目痕が残り、高台周辺は無釉である。九陶編年Ⅲ期（1650～1690 年代）。

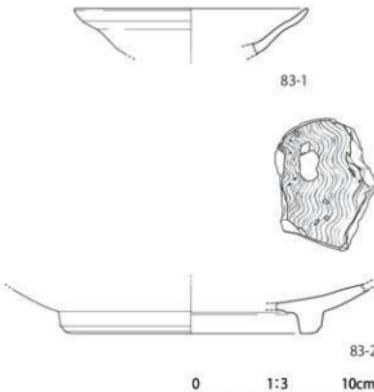
遺構の性格と時期 SX01 の検出時には規模の大きな溝状の遺構と考えていたが、遺構底面が壠塹状を呈することから道路の可能性も考えられた。ただし、SX01 の西側に位置する道路 SF01・02 との位置関係からその関連性は見出せていないため、明確な遺構の性格は不明である。SX01 の時期は、出土した陶磁器から 17 世紀後半を想定しており、SF01・02 よりも先行する時期の遺構と考えられる。

遺構外出土遺物（第 84・85 図）

ここでは遺構面から出土した遺物を遺構外出土遺物として取り扱う。第 84・85 図に掲載した遺物は、B3・C3・E7・F6 グリッドで取り上げた遺物である。遺物の時期は、弥生時代中期～後期・古墳時代前期～後期に属する。遺物の出土量は、調査区西端の C3 グリッドから出土した遺物が大半を占めている。この場所に遺物が集中している理由のひとつに、C3 グリッドは調査区西端の低位部にあることから、東側の斜面上方からの流れ込みによる可能性が考えられる。以下では、遺構外出土遺物の中で古い時期を示す遺物から新しい時期を示す遺物の順に詳述する。

84-1～6 は弥生時代中期に属する甕・壺である。84-1 は甕の口縁部である。口縁部をやや厚くおさめ、口縁端部に 2 条の凹線文を施す。弥生時代中期中葉、出雲 III-2 様式に属する。84-2 は甕の口縁部である。口縁部は短くやや内傾し、口縁端部に 2 条の凹線文を施す。弥生時代中期中葉、出雲 III-2 様式に属する。84-3 は甕の口縁部である。口縁部は短く直立し、口縁端部に 3 条の凹線文を施す。弥生時代中期中葉、出雲 III-2 様式に属する。84-4 は壺の口縁部である。口縁部は繰り上げ状に短く立ち上がり、口縁端部に 3 条の凹線文を施す。弥生時代中期中葉、出雲 III-2 様式に属する。84-5 は甕の口縁部である。口縁部は直立し、口縁端部に 5 条の凹線文を施す。弥生時代中期後葉、出雲 IV-2 様式に属する。84-6 は甕の口縁部である。口縁部は内傾し、口縁端部に 4 条の凹線文を施す。弥生時代中期後葉、出雲 IV-2 様式に属する。

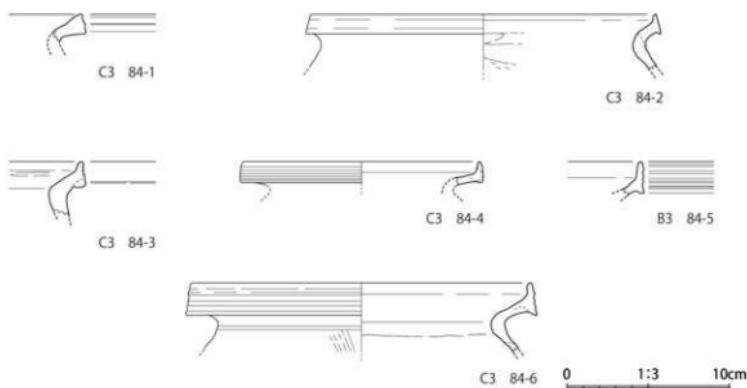
85-1～85-7 は弥生時代後期に属する甕・高杯である。85-1 は甕の口縁部である。口縁部は外傾し、口縁端部に 5 条の擬凹線文、頸部内面にミガキを施す。弥生時代後期中葉、出雲 V-2 様式に属する。



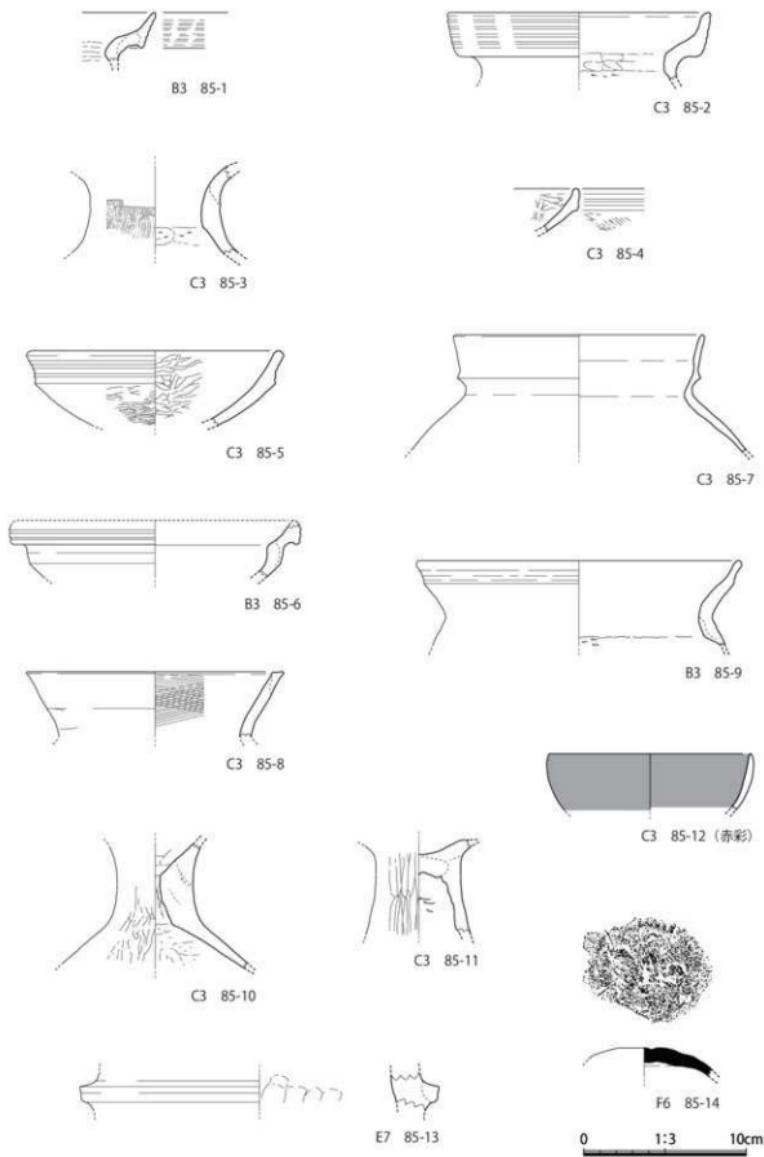
第 83 図 SX01 出土遺物

85-2は甕の口縁部である。口縁部はやや外傾し、口縁端部に6条の擬凹線文、頸部内面にミガキを施す。弥生時代後期中葉、出雲V-2様式に属する。85-3は広口甕の頸部である。外面にタテハケメ、内面下方にケズリが施される。弥生時代後期前葉、出雲V-1様式に属する。85-4は高环の口縁部である。口縁端部に4条の凹線文、内外面にミガキが施される。弥生時代後期前葉、出雲V-1様式に属する。85-5は高环の口縁部～环部である。环部が単純に内湾する高环で、口縁端部に6条の凹線文、外面に横方向のミガキ、内面に斜め方向のミガキが施される。弥生時代後期前葉、出雲V-1様式に属する。85-6は高环の口縁部である。口縁部は複合口縁状を呈し、口縁端部に2条の凹線文を施す。弥生時代後期前葉、出雲V-1様式に属する。85-7は甕の口縁部である。複合口縁の甕で器壁が薄く、口縁部にヨコナデが施される。弥生時代後期後葉、出雲V-4様式に属する。

85-8～14は古墳時代前期～後期に属する上師器の甕・高环・环・円筒埴輪・須恵器の环蓋である。85-8は甕の口縁部である。布留系甕の系譜を引く甕で、口縁部は外傾しながら直線的に立ち上がり、端部に面を形成している。外面にヨコナデ、内面にハケメが施され、色調は灰黄褐色を呈する。古墳時代前期に属する。85-9は甕の口縁部である。口縁部は退化した複合口縁状を呈し、端部は丸くおさめてやや外傾する。古墳時代中期に属する。85-10・11は高环の脚部で、いずれも古墳時代中期に属するものか。85-10は厚手で脚が裾に向けて直線状に大きく開く形状をなす。外面に縱方向のミガキ、内面上方に横方向のミガキと下方にケズリが施され、色調は黄橙色を呈する。85-11は外面に縱方向のミガキ、内面にケズリが施され、色調は淡黄橙色を呈する。85-12は土師器の环である。口径12.4cmの环で、体部は口縁部に向かってやや肥厚させつつ、口縁端部を丸くおさめる。外面を軽いヘラケズリで仕上げた後、内外面に赤彩が施される。古墳時代後期に属するものか。85-13は円筒埴輪で、突带のみ残存する。突带はやや下向きに貼り付けられ、内面に縱方向のナデが施される。古墳時代中期～後期に属するものか。85-14は須恵器の环蓋で、天井部のみ残存する。天井部はヘラ切りの未調整である。古墳時代後期、大谷編年出雲4期に属するものか。



第84図 遺構外出土遺物(1)



第85図 遺構外出土遺物（2）

註

- (2) 出雲地域における古墳系特殊壙の主な出土事例として、出雲市大津町に所在する弥生時代後期後葉の墳丘墓である西谷3号墓第4主体から出土している特殊壙が挙げられる。この特殊壙は、タマネギ形の胴部に長い頭部、直立する口縁部がつき、底部は平底。頭部には沈線文、胴部には2~3条の突帯が巡り、鋸歯文・綾杉文・斜線文・列点文などで飾られ、胴部下にミガキを施すという特徴をもつ。
- (3) 出雲地方における鉄鍋を埋納した可能性のある土坑の検出事例は、森V遺跡（飯石郡頃原町）・板屋Ⅲ遺跡（飯石郡頃原町）・清水荒神遺跡（雲南市三刀屋町）・大歳遺跡（雲南市木次町）・古志本郷遺跡（出雲市古志町）・福富I遺跡（松江市乃木福富町）の6遺跡が挙げられる。これらの遺跡から出土した鉄鍋は埋納坑に上向きまたは伏せられた状態で納められ。鉄製品（短刀・刀・鎌・五徳）や土器飾皿を作成するという共通した特徴が見られる。鉄鍋埋納土坑の性格については、地鎮や鎮魂あるいは神事に使用された物の埋納といった祭祀的な意味合いをもった遺構と考えられており、時期は中世～近世が想定されている。
- (4) 出土した錢貨（銭銭）の取り扱いについては、大阪府堺市文化観光局文化部文化財課の鶴谷和彦氏にご教示を頂いた。
- (5) 寛永通寶は、1636~56年に鑄造された「ス貝寶」と呼称される古寛永と、1668~1747年・1767~81年に鑄造された「ハ貝寶」と呼称される新寛永の2種類に区分している。
- (6) 島根県教育委員会 1997『布志名大谷I遺跡・布志名大谷II遺跡・布志名才の神遺跡』のうち、布志名才の神遺跡の報告では、石積基壇から出土した底部穿孔のカワラケについての考察がなされている。才の神の事例ではあるが、この報告では「才の神は本来、境界の神であったが境界を守るという性格が次第に強い神意を期待され、さまざまな機能が付加されたといわれ、その中のひとつが疫病防除で出雲地方では耳の神である場合が大半を占める」とされている。

参考文献

- 出雲考古学研究会 1987『石棺式石室の研究』
- 江戸遺跡研究会 2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 島根県教育委員会 2008『恵谷古墳群・岩鼻古墳群・上講武殿山城跡・砥石遺跡・沢下遺跡・元宮遺跡』
- 島根県教育委員会 2008『九重川遺跡』
- 島根県教育委員会 2013『史跡出雲国府跡－9 総括編－』
- 島根県教育委員会 2013『西川津遺跡・古屋敷II遺跡』
- 島根大学考古学研究室・出雲弥生の森博物館 2015『西谷3号墓発掘調査報告書』
- 頃原町教育委員会 2001『森V遺跡』
- 奈良文化財研究所 2010『発掘調査のてびき 集落遺跡発掘編・整理報告書編』同成社
- 奈良文化財研究所 2013『発掘調査のてびき 各種遺構調査編』同成社
- 松江市教育委員会・松江市スポーツ振興財团 2016『白畠遺跡・廻り遺跡』
- 松江市史編纂委員会 2012『松江市史 史料編2 考古資料』
- 安来市教育委員会 1998『清水大日堂裏古墳発掘調査報告書』

第4章 総括

福祉施設移設事業に先立ち、試掘調査および本発掘調査を実施した。調査の結果、弥生時代から近世に至る遺構と遺物を確認した。本章ではこれらの調査成果に基づき、第1節で現段階において判明した堤ノ上遺跡の変遷と様相を整理し、第2節で近世墓群について若干の考察を加えることでまとめたい。

第1節 堤ノ上遺跡の変遷

検出遺構と出土遺物の概要

今回の調査において検出した主な遺構と遺物を時期別・種類別に表2に示した。表2の検出遺構の網フセは、濃い網フセ部分は遺構が密で遺物が比較的まとまって出土した場合を、薄い網フセ部分は遺構が疎で遺物は認められるものの極めて少量な場合を示している。出土遺物の網フセは、濃い網フセ部分は遺物が多く出土した場合を、薄い網フセ部分は遺物が少量である場合を示している。

一見して、古墳時代中期・古代・近世の3時期にその中心があることが分かる。この3時期には遺構の疎密があるが、ある程度まとまった遺構と遺物が確認できる。しかし、中世の遺構と遺物は明らかに欠落しており、この時期の集落は調査範囲外で営まれていたものと推察する。

表2 堤ノ上遺跡の主な検出遺構・出土遺物一覧

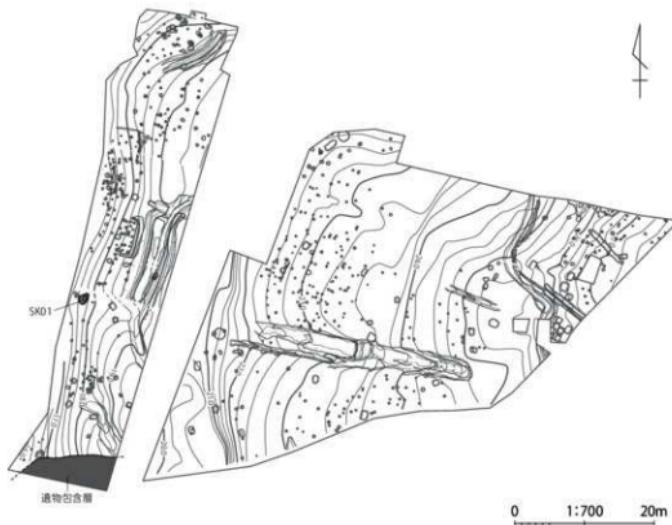
時期	検出遺構 (網フセは遺構の密・疎を示す)					出土遺物 (網フセは遺物の多・少を示す)
	建物	加工段	道路	土坑	墓塚	
弥生時代前期				SK01		弥生土器（小片）
弥生時代中期				非掲載		弥生土器（小片）
弥生時代後期				非掲載		弥生土器（小片） 吉備系特殊造
古墳時代前期	柱穴			非掲載		土師器（小片） 布留系鏡
古墳時代中期	SB01 SB01～07	加工段3		SK02～04		土師器 小形丸窓壺
古墳時代後期	柱穴			非掲載		土師器（小片） 須恵器（小片） 円筒埴輪
古代 (奈良～平安時代)	SB08～11	加工段1・2		非掲載		土師器 須恵器
中世 (鎌倉～安土桃山時代)						
近世 (江戸時代)	SB12		SF01～04	SK05～09	ST01～11	近世陶磁器 近世土師器

(1) 弥生時代の様相（第86図）

堤ノ上遺跡における弥生時代の遺構と遺物は概して希薄である。検出した弥生時代前期の土坑SK01は、今回調査した中では最も古い時期の遺構であり、本遺跡の上限を示している。弥生時代前期の遺物はSK01以外では認められず、土坑内から遺物を検出したのみではあるが、当遺跡形成の始点的位置を占める。

弥生時代中期～後期もほぼ同様な状況で、当該期の遺構は希薄である。遺物は弥生時代中期前葉（出雲II様式）に属する明確な遺物は確認できず、断絶が認められる。一方で、遺物包含層から出土した遺物の中には、弥生時代中期中葉～後期後葉（出雲III～V様式）に属する遺物が認められる。遺物包含層以外で弥生土器が多く出土した地点はC3グリッドの遺構外に集中しており、ここでも弥生時代中期中葉～後期後葉に属する遺物が認められる。遺物包含層とC3グリッドは調査区西端～南西角付近の低位部にあたることから、東側の斜面上方からの流れ込みによることも想定されるが、当該期の一般的な集落立地の在り方から推定すれば、調査区外の丘陵縁辺部あるいは低位部に集落が営まれていた可能性が考えられる。

当遺跡で出土した弥生土器には甕・壺・高杯があり、鉢・器台は出土していない。器種別の出土比率は、甕50%、壺25%、高杯25%である。出土比率の高い甕に注目すると、口径15～20cm前後の中型品が最も多く、文様は口縁端部の四線文を基本としている。また、遺物包含層中から吉備系の搬入品と考えられる特殊壺（13-3）が出土し、この遺物が斜面上方からの流れ込みによるものと推定すれば、当遺跡の付近に墳丘墓の存在を想定させるものである。



第86図 堤ノ上遺跡 弥生時代の様相

(2) 古墳時代の様相（第87図）

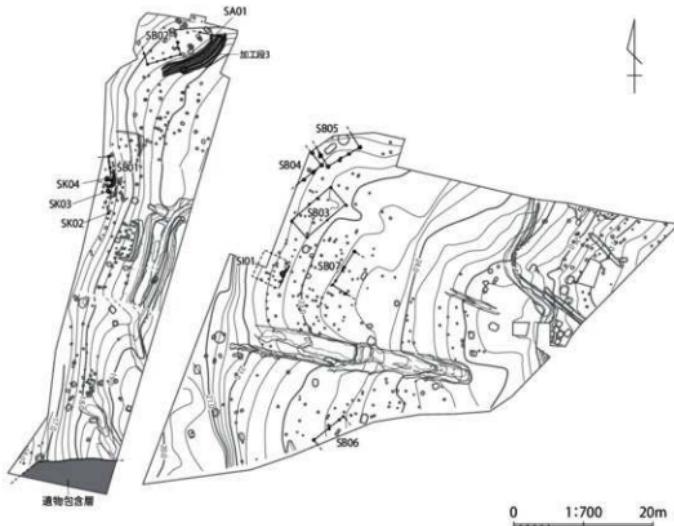
遺構と遺物がほとんど認められない古墳時代前期を挟み、古墳時代中期になると当遺跡においても本格的に集落が営まれるようになる。当該期の集落は検出した建物遺構の配置から、調査区中央部の平坦面および北西側の緩斜面を中心に展開している。

古墳時代中期に属する遺構として、竪穴建物跡SI01、掘立柱建物跡SB01～07、加工段3、樋SA01、土坑SK02～04を検出した。SI01は後世の削平による影響を受けており、その全容は明らかではないが、部分的に残っていた壁際溝と柱穴から一辺4.00m前後を測る四本柱構造の竪穴建物を想定している。また、SI01内で検出したSP01は壁際土坑と考えられる遺構で、土坑内から古墳時代中期に属する高环や甕が出土した。

掘立柱建物跡は調査区西半を中心には検出し、 2×2 間または 2×3 間の規模をもつ建物を想定している。建物の主軸は、調査区北西側に位置するSB01・02のように緩斜面に対して平行となるよう地形に沿った配置を有する建物群と、調査区中央部に位置するSB03～07のように北東～南西方向を指向した配置を有する建物群の2つのグループが存在していたものと捉えている。

また、SB04・05は東西に隣接する位置関係にあり、主軸が揃うSB03・04に対してSB05は若干異なる主軸をとり、廂の張り出しを考えると同時併存はできないことから、建て替えの可能性が推察される。

SI01およびSB01～07の継続期間については、出土遺物からは大きな年代幅を想定し難く、比較的短期間に形成されて廃絶したものと想定している。その中で同時併存建物を復元することは現状で



第87図 堤ノ上遺跡 古墳時代の様相

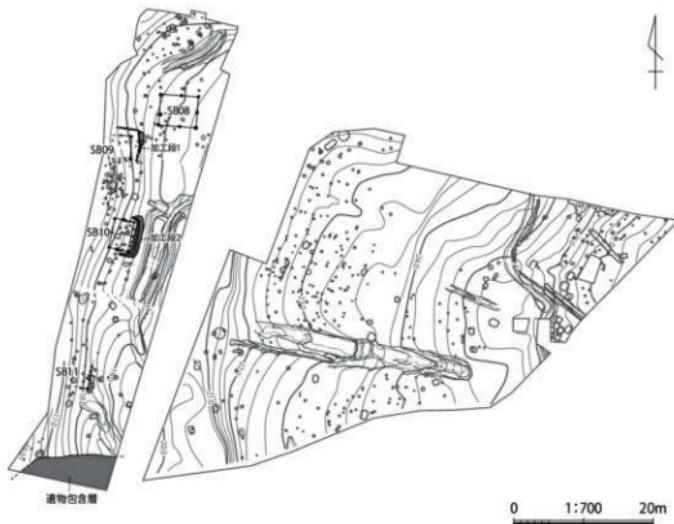
は困難であるが、同じ主軸を指向する点や空間的配置関係から見て、SB03・04・06は同一時期に併存していた可能性が考えられる。

今回の調査では、古墳時代後期の明確な遺構は認められなかったが、当遺跡に隣接する北西側の低丘陵には石棺式石室をもつ太田古墳群が所在している。当該期に属する遺物は当遺跡において少数ではあるものの認められることから、付近に集落が存在していた可能性は高いものと考えられる。

(3) 古代（奈良～平安時代）の様相（第88図）

当遺跡における古代に属する遺構は、掘立柱建物跡と加工段以外に明確な遺構は検出しておらず、当該期の遺物は少数である。当該期の集落は先述した古墳時代の様相とは若干異なり、検出した建物遺構の配置から、西側の緩斜面を中心に展開している。

古代に属する遺構として、掘立柱建物跡 SB08～11、加工段1・2、その他に多数の柱穴を検出した。建物は SB08 のように単独で存在する掘立柱建物跡と、SB09～11 のように加工段を伴う掘立柱建物跡を検出している。当該期の掘立柱建物は、緩斜面を平坦に加工した後に建物が構築されており、2×2間の規模をもつ建物が想定される。建物の主軸は、緩斜面に対して直交する SB08 と、SB09～11 の緩斜面に対して平行となるよう地形に沿った配置を有する建物群が存在する。さらに復元できた建物以外にも多数の柱穴が存在する点から、当遺跡における古代集落は継続して建物が営まれていた可能性が考えられる。また、検出した建物には総柱建物は存在しない点から特殊な用途を目的とした建物ではなく、一貫して居住用建物が営まれていた蓋然性が高いものと思われる。



第88図 堤ノ上遺跡 古代（奈良～平安時代）の様相

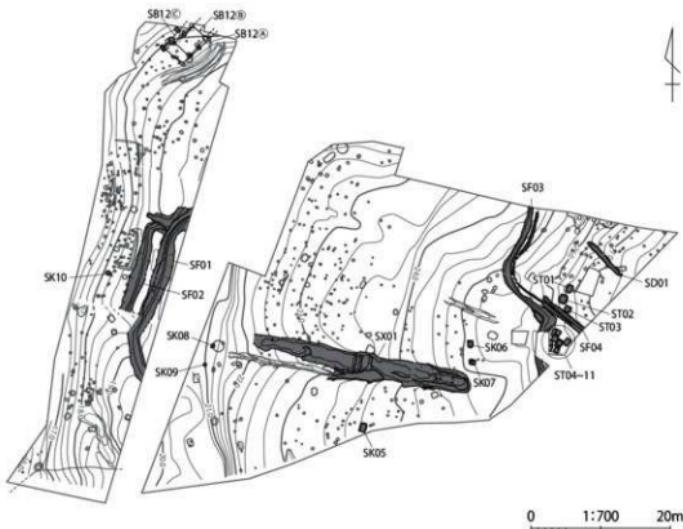
(4) 近世（江戸時代）の様相（第89図）

遺構と遺物が認められない中世の空白期を挟み、近世になると再び遺構と遺物が確認できるようになる。近世に属する遺構として、掘立柱建物跡SB12（18世紀後半）、溝SD01（19世紀前半）、道路SF01～04（18世紀後半～19世紀前半）、土坑SK05～10（17～18世紀か）、墓壙ST01～11（18世紀後半～19世紀前半）、その他の遺構SX01（17世紀後半）を検出した。

調査区北西角のA'4～A4 グリッドで検出した掘立柱建物跡 SB12 は、柱穴の配置からⒶ～Ⓒの3棟の建物が復元でき、 2×1 間以上または 3×1 間以上の規模をもつ一般的な居住用建物を想定している。柱穴の切り合い関係から、SB12 Ⓐが構築された後の段階にⒷおよびⒸの2回にわたる建て替えが行われていた可能性が考えられる。

調査区東側のD9・E9 グリッドで検出した墓壙 ST01～11 は、隅丸方形・長方形・正方形を呈する近世墓群である。墓壙内から人骨のほか、陶磁器・在地系土器皿・錢貨・煙管・毛抜・漆器椀が出土し、ST04・08 ではいわゆる「トラベルセット」⁽⁷⁾が副葬されている状況を確認した。ST05・06・08・09・11 では墓壙下半～底面で棺痕跡を検出し、棺痕跡の検出規模から一辺 50～60cm を測る正方形木棺が埋納されていたものと考えられる。今回の調査成果では、近世（18世紀後半～19世紀前半）には D9・E9 グリッド周辺が墓域となっていたことが明らかとなった。その後、墓域の縮小あるいは移動があったものと考えられ、現在は調査区の東側に隣接する場所に墓地が存在する。

調査区西側のC3～E3 グリッドで検出した道路 SF01・02 と調査区東側のC9～D10 グリッドで検出した道路 SF03・04 は、当遺跡周辺に広がる低丘陵を往来するための里道の一部と想定している。



第89図 堤ノ上遺跡 近世（江戸時代）の様相

第2節 近世墓群について

ここでは、今回の調査で検出した近世墓群（ST01～11）について検討を加えたい。以下では、（1）埋葬形態と埋葬体位、（2）棺材の木取りと厚さ、（3）副葬品、（4）墓壙の時期、（5）出雲地域の近世墓検出遺跡の5つの項目に分け、近世後半の集落における墓制の様相についてまとめておきたい。

（1）埋葬形態と埋葬体位

検出した墓壙の平面プランは隅丸方形・長方形・正方形の3つに分けられる。規模は、隅丸方形墓壙が長軸120～136cm・短軸80～112cm・深さ56～72cm、長方形墓壙が長軸115～124cm・短軸75～90cm・深さ42～92cm、正方形墓壙が一辺74～100cm・深さ53～105cmを測る（墓壙ST01～11の規模と副葬品の一覧は表3に記載）。

埋葬形態は基本的に土葬で、隅丸方形墓壙は棺痕跡を確認していないため不明だが、棺痕跡が確認できた長方形墓壙と正方形墓壙は木棺を用いた土葬と考えられる。このうち棺痕跡が確認できたST05・06・08・09・11については、天板は未検出だが側板と底板の痕跡から、一辺50～60cmを測る正方形木棺が墓壙底面に置かれていたものと想定している。木棺は正方形のものしかなく、これ以外の形状をもつ木棺は確認していない。埋葬体位は、人骨や歯が出土したが、いずれも小部位のため詳細は不明となるが、木棺の形態からすればいわゆる「座葬」が推定される。

（2）棺材の木取りと厚さ

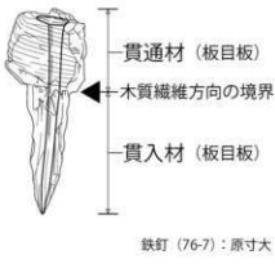
出土した鉄釘は頭巻の角釘で、頭部や先端を欠損しているものがあるが、長さ5cm前後を測る。棺材の木取りは、鉄釘に付着する木質から柾目・板目の木材組織の観察を行った。

棺材の接合部分は貫通材（鉄釘頭部側の材）と貫通材に直交して接合する貫入材（鉄釘先端側の材）に分けられる。鉄釘に付着した木質纖維方向は、貫通材では纖維方向が鉄釘の長軸に直交する横方向の木質、貫入材では纖維方向が鉄釘の長軸に平行する縦方向の木質を観察した（第90図）。

今回出土した鉄釘はいずれもこの組み合わせで、貫通材と貫入材で木質の纖維方向が異なっているのは棺材の組み合わせ方と鉄釘を打ち込む箇所に起因するものと考えられた。鉄釘に付着したわずかな材の観察から板材全体の木取りを復元することは難しいが、貫通材と貫入材の木質纖維方向の組み合わせから、棺材（側板×側板・側板×底板）には板目板が使用されていたものと推定する。

次に、棺材の厚さについてだが、貫通材は鉄釘が材に対して直交するように打ち込まれるので厚さの計測は可能となるが、貫入材は鉄釘が材に対して平行に打ち込まれるために厚さの計測はできない。そのため、ここでは貫通材の厚さについて検討する。貫通材の厚さは、鉄釘頭頂部から木質纖維方向の境界までの長さを計測することで推定している。

計測の結果、鉄釘頭頂部から木質纖維方向の境界までに木質が良好に残存する鉄釘（74-4・5、76-7・8・9、78-3）の計測値から、貫通材は厚さ1.4～1.6cmの範囲におさまるものと考えられる。



第90図 鉄釘付着棺材組織

(3) 副葬品

墓壙内から人骨・陶磁器・土師器皿・銭貨・煙管・毛抜・漆器椀・鉄釘が出土した。土師器皿はすべて底部糸切りの在地系土師器皿で、出土位置は墓壙底部の北寄り・南寄りで出土している。

ST05では底部穿孔が施された土師器皿(72-1～5)が出土した。このような穿孔された遺物は、山陰地域においては「耳の病の神」という信仰が広く見られ、耳の通りが良くなるように碗・カワラケ・サザエ・銭貨などに穴を開けたものを供えることが一般的で、地域によって多様な信仰内容が加わることで違いが見られるとされている。出雲地域において底部穿孔が施された土師器皿が出土している遺跡は、安来市荒島町に所在する小久白墳墓群⁽⁹⁾(賽の神)、松江市大庭町に所在する勝負谷遺跡⁽¹⁰⁾(賽の神)、松江市平成町に所在する袋尻D遺跡⁽¹¹⁾(土塁墓)、松江市八雲町に所在する谷ノ奥遺跡⁽¹²⁾(火葬墓)、松江市玉湯町に所在する布志名才の神遺跡⁽¹³⁾(賽の神)が知られている。

銭貨はST02・04・05・06・09の5基の墓壙から出土し、このうち墓壙1基に対して2～9枚(総額を除く)が納められている。銭種はすべて寛永通寶(古寛永・新寛永)で、出土位置は墓壙底部の中央で出土している。ST05から出土した銭貨(72-6～11)とST09から出土した縦銭(79-1)の出土位置はいずれも墓壙内の高い位置にあたる木棺の外側で出土していることから、木棺を設置した後に納められたものと捉えている。また、縦銭の外面には布(麻布か)の小片が付着した状態で残っており、布製の巾着袋の中に縦銭を納めて埋納されていたものと考えられる。

表3 墓壙 ST01～11 の規模と副葬品

墓壙	墓壙と木棺の規模				墓壙内出土遺物(点)								
	平面形	墓壙の規模 (長軸×短軸×深さ)	木棺	木棺の規模 (一辺)	人骨	陶磁器	土師器皿	鉄貨	煙管	毛抜	漆器椀	鉄釘	
ST01 圓丸方形	120cm×80cm×72cm	無	—	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
ST02 圓丸方形	136cm×112cm×56cm	無	—	1	0	2	4	0	0	0	1	0	
ST03 正方形	100cm×90cm×53cm	無	—	1	0	2	0	0	0	0	0	0	
ST04 長方形	114cm×75cm×42cm	無	—	0	1	9	2	1	0	0	0	0	
ST05 長方形	124cm×90cm×92cm	有	55cm	1	0	5	9	0	0	0	0	0	
ST06 正方形	78cm×74cm×85cm	有	50cm	0	0	0	3	0	0	1	3	0	
ST07 長方形	115cm×80cm×56cm	無	—	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ST08 正方形	82cm×80cm×88cm	有	60cm	0	2	1	0	0	1	0	5	0	
ST09 正方形	90cm×90cm×82cm	有	60cm	0	0	1	73	0	0	0	0	3	
ST10 長方形	(100)cm×(80)cm×78cm	無	—	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
ST11 正方形	80cm×(80)cm×105cm	有	50cm	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

(4) 墓壙の時期

今回の調査で検出した近世墓壙について、明確な時期が判断される遺物は陶磁器と銭貨である。墓壙内出土の陶磁器には肥前系磁器の丸碗や小杯があり、九陶V期(1780～1820年代)を示している。銭貨は寛永通寶の中で、1767～81年に鑄造された新寛永が最も新しい時期を示している。墓壙の時期についてはこれらの年代を当てはめて、18世紀後半～19世紀前半と想定しておきたい。

また、D9・E9 グリッド内に密集した状態で検出した墓壙 ST04～11は、遺構の切り合いによっ

て新旧関係を確認することができたため、表4に提示しておく。表4に示した新旧関係から、当遺跡の18世紀後半～19世紀前半における造墓活動は旧段階・中段階・新段階の3つに分けられる。今回の調査では各墓壙の被葬者の詳細は明らかとし得なかったが、同じ墓域内で数回の埋葬儀礼が行われていることは、近世後半の集落では親子・兄弟・親族などの血縁関係にある集団が埋葬小群のうなまとまりをもった埋葬がなされていたものと推定する。また、墓壙の平面形は、旧～中段階には長方形を呈するに対し、新段階になると正方形を呈する墓壙に形態が変化することから、当該期の中で墓壙形態の規格化がなされていたものと考えられる。

表4 墓壙 ST04～11 の新旧関係

堤ノ上遺跡における18世紀後半～19世紀前半の墓壙の新旧関係		
【旧段階】	【中段階】	【新段階】
ST04（長方形） ST07（長方形）	→ ST05（長方形） ST10（長方形）	→ ST06（正方形） ST08（正方形） ST09（正方形） ST11（正方形）

(5) 出雲地域の近世墓検出遺跡

表5には出雲地域の近世墓検出遺跡一覧を記載した。松江市域における17世紀以前の中世墓は火葬墓が主流であったが、17世紀以降の近世墓は土葬墓を採用するようになり、その後は土葬墓が主流となる傾向にある。⁽¹⁴⁾一方で、出雲市域では中世後半から土葬墓が採用されている。松江と出雲の隣接した地域間でも埋葬形式が異なることから、今後はそれぞれの地域内における小単位での墓制の在り方や傾向を把握していくことで、その実状を解明することが可能となろう。

表5 出雲地域の近世墓検出遺跡一覧

遺跡名	所在地	基數	墓壙内出土遺物
清水大日堂古墓群	安来市宇賀荘町	100基	人骨、銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品、櫛
本郷池頭遺跡	松江市鹿島町	5基	銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品
白煙遺跡	松江市鹿島町	23基	人骨、銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品、漆器
檜山古墓群	松江市上乃木	17基	銭貨、土師器皿、金属製品、数珠玉
堤ノ上遺跡	松江市東持田町	11基	人骨、銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品、漆器、鉄釘
三大寺遺跡	松江市朝駒町	13基	人骨、銭貨、鉄釘
袋尻D遺跡	松江市平成町	2基	銭貨、土師器皿、鉄、鉄釘
鳥田池遺跡	松江市東出雲町	3基	銭貨、土師器皿
谷ノ奥遺跡	松江市八雲町	21基	銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品
半坂古墓群	松江市玉湯町	59基	銭貨、土師器皿、陶磁器、金属製品、櫛、碁石、土鈴
布志名大谷Ⅲ遺跡	松江市玉湯町	1基	鎌、延石
野田遺跡	松江市穴道町	1基	銭貨、土師器皿
角田遺跡	出雲市上塩治町	2基	人骨、銭貨、土師器皿、櫛、数珠玉、折敷
余小路遺跡	出雲市松寄下町	16基	人骨、銭貨、土師器皿、金属製品、櫛、火鑊臼、折敷
矢野遺跡	出雲市矢野町	1基	人骨、土師器皿、陶磁器
上沢Ⅲ遺跡	出雲市上塩治町	4基	人骨、銭貨、土師器皿、陶磁器、鋼製品、ガラス玉
白枝本郷遺跡	出雲市白枝町	3基	人骨、土師器皿、櫛
高浜Ⅱ遺跡	出雲市里方町	2基	銭貨、土師器皿、櫛、数珠玉、位牌
寺田Ⅰ遺跡	雲南市木次町	9基	人骨、金属製品、陶磁器、銭貨、櫛
瀧坂遺跡	雲南市三刀屋町	1基	陶磁器、簪
板屋Ⅱ遺跡	飯石郡飯南町	45基	銭貨、陶磁器、金属製品、硯

第3節 結語

以上のように、堤ノ上遺跡の変遷と近世墓群について簡潔に論じてみた。今回の調査成果から、当遺跡が立地する丘陵上には弥生時代前期を遺跡形成の始点とし、古墳時代中期に集落のピークが見られ、古代においても集落が営まれていたことが明らかとなった。

古墳時代中期に属する遺構に位置付けた竪穴建物・掘立柱建物・加工段は、それぞれ数棟ずつ併存してセットをなしていた可能性が想定される。このような集落構成は、「有機的な結合関係をもつ數棟からなる単位集団（世帯共同体）から構成されている」（廣瀬 1978）との見解があり、当遺跡でも概ね対応するものと考えられる。

中世の空白期を挟んで、近世になると再び当地での生活痕跡が確認できるようになる。特に近世墓群の検出は、近世後半の集落における墓制の一端を示す貴重な資料が得られたものと考えている。近世墓群 ST01～05・08～10 の副葬品である土師器皿は、いずれも底部糸切りの在地系土師器皿が出土しているが、一方で、土師器皿だけを埋納した SK05・07～09 については規模と埋土の違いから墓壙に含めなかつたが、いずれも手づくね成形の京都系土師器皿のみが出土しており、この違いが何に起因するのかは今後の課題である。また、鉄鍋のみが埋納された土坑 SK10 についても、近世集落における祭祀的な意味合いをもった遺構としての評価が可能かどうか、今後の調査事例の増加を持ちたい。そして、今回の調査成果を含め、今後は持田地域における発掘調査事例の積み重ねや各時代を通した資料を得ることによって、当地域の歴史がより具体的に解明されていくことを期待したい。

註

- (7) 中森祥 2007 「トラベルセットの成立 一山陰における近世墓の副葬品から一」『出土銭貨研究 第2号』から引用。
中森氏は論考の中で、山陰地方における近世墓の副葬品として数多く確認される銭貨・刃物・煙管・毛抜を死出の旅に伴う「トラベルセット」と定義している。
- (8) 山陰民俗学会 1997 『山陰の祭祀伝承』から引用。
- (9) 島根県教育委員会 1999 『小久白墳墓群』で報告されている石積遺構（賽の神）出土の底部に穿孔のある土師器皿。
- (10) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 2006 『淡ヶ谷遺跡群』で報告されている勝負谷遺跡の積石塚（賽の神）出土の底部に穿孔のある土師器皿。
- (11) 松江市教育委員会・松江市教育文化振興事業団 1998 『袋戻遺跡群』で報告されている袋戻D遺跡の土塙墓 SK01 出土の底部に穿孔のある土師器皿。
- (12) 八雲村教育委員会 2002 『谷ノ奥遺跡』で報告されている火葬墓 SK18 出土の底部に穿孔のある土師器皿。
- (13) 島根県教育委員会 1997 『布志名大谷I遺跡・布志名大谷II遺跡・布志名才の神遺跡』で報告されている石積基壇（賽の神）出土の底部に穿孔のある土師器皿。
- (14) 岩橋康子 2019 「松江市内の中世後半～近世初頭の墓制の様相 一松江市内の土葬墓を中心に、出雲市内の事例との比較を通して一」『論集 葬送・墓・石塔』狭川真一さん還暦記念会から引用。
- (15) 広瀬和雄 1978 「古墳時代の集落類型 一西日本を中心として一」『考古学研究 第25巻 第4号』から引用。

弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・土師器皿(1)

遺物 番号	グリッド	遺構名	種類	器種・部位	測量(cm)			調査・文様の特徴	色調	参考	
					口径	底径	高さ				
13-1	F2 ~ G3	包含層	高台付杯	—	(1.7)	(2.2)	内・ナメ	直腹、口縁部に3条の凹線文と 別目	黒・良好	山形県南陽市第2~4丁目 (山形瓦窯第2~4丁目平塗)	
13-2	F2 ~ G3	包含層	弥生土器	甕(口縁部)	—	—	(1.4)	口縁端部に3条の凹線文と 別目	黒・良好	外・黄褐色 内・黄褐色 山形瓦窯・2様式 (山形時代中期)	
13-3	F2 ~ G3	包含層	特殊器	特殊器(赤彩)	—	—	(4.7)	外・ナメ・ハケヌ 内・子テ・ハケヌ	黒・良好	外・赤褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・第3・4丁目 (吉備時代中期)	
13-4	F2 ~ G3	包含層	弥生土器	甕(底部)	—	(6.3)	(3.4)	外・ナメテテ 内・ミガテテ	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・心臓彫 (吉備時代中期)	
13-5	F2 ~ G3	包含層	弥生土器	高环(脚部)	—	—	(6.1)	内・心棒跡	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・心臓彫 (吉備時代中期)	
13-7	F2 ~ G3	包含層	弥生土器	製塙土器	—	3.7	(2.6)	外・指輪圧痕	石英・良好	外・水褐色 内・淡黄色 山形瓦窯・10様式の範囲か (山形時代中期)	
13-8	F2 ~ G3	包含層	弥生土器	甕(底部)	—	(4.9)	(2.2)	内・ミキ・内・ケズリ 外・底部凹	黒・良好 黒・普通	外・黄褐色 内・淡黄色 山形瓦窯・10様式の範囲か (山形時代中期)	
13-9	F2 ~ G3	包含層	弥生土器	甕(制部)	—	—	(6.5)	外・ハヌメ 内・カツリ	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・第3・4丁目 (吉備時代中期)	
16-1	D5	SB01	土師器	甕	11.1	—	(10.5)	外・ハヌメ 内・カツリ	黒・普通	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・古墳時代中期	
16-2	D5	SB01	土師器	甕	13.9	—	(12.2)	外・ハヌメ 内・カツリ	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・古墳時代中期	
16-3	D5	SB01	土師器	甕(口縁部)	(14.3)	—	(3.9)	内・ヨコテテ 外・ヨコテテ	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・古墳時代中期	
16-4	D5	SB01	土師器	甕(口縁部)	(17.9)	—	(3.0)	外・ヨコテテ 内・ヨコナナ	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・古墳時代中期	
16-5	D5	SB01	土師器	高环	—	—	(9.6)	鈍基部付近に3方向の 円形スジ	黒・良好	外・褐色 吉備時代中期	
16-6	D5	SB01	弥生土器	高环(口縁部)	—	—	(2.3)	口縁端部に2条の凹線文と 別目	黒・良好	外・褐色 吉備時代中期	
18-1	B3	SB01	土師器	甕	(17.8)	—	(13.2)	外・ハヌメ 内・ケズリ・指輪え	黒・良好	外・黄褐色 内・淡黄色 吉備瓦窯・古墳時代中期	
21-1	C5 ~ C6	SB03	土師器	小形丸壺	6.4	—	7.3	外・ハヌメ・ナメ	黒・良好	外・浅黄色 吉備時代中期	
29-1	C3	SB10	須恵器	甕(脚部)	—	—	(4.9)	外・横・柱状のタキシ 内・横・柱状のタキシ	黒・良好	外・灰褐色 吉代	
38-1	C3 ~ E3	SF01	磁器	甕	—	—	(1.7)	突然下方に高台の外縁に 輪郭の付いた	黒・良好	外・白	肥前系 1780 ~ 1810 年代
38-2	C3 ~ E3	SF01	磁器	甕	(12.3)	—	(1.8)	内面に淡水文の染付	黒・良好	外・白色	肥前系 1730 ~ 1780 年代
38-3	C3 ~ E3	SF01	陶器	壺鉢	—	—	(5.2)	外・内・底部	黒・良好	外・茶色	在地系 19 世紀前半
38-5	C3 ~ E3	SF02	土師器	甕	(6.0)	—	(1.7)	内・内・ナメ	黒・良好	外・深褐色 吉備系土師器 (直臣)	
40-1	C9 ~ D10	SF04	陶器	甕	—	—	(3.8)	内外面に縦縫を施釉	黒・良好	外・褐色 吉志名窯 19 世纪前半	
44-1	D2	SK01	弥生土器	甕(脚部)	—	—	(10.0)	外・壁のため明 内・ミキ	石英・良好	外・淡茶色 (吉備) 4 様式 (吉備時代前期)	
46-1	C3	SK02	土師器	高环(脚部)	—	(6.4)	(4.4)	外・ハヌメ 内・ケズリ	黒・良好	外・黄褐色 吉備時代中期	
46-2	C3	SK02	弥生土器	甕(口縁部)	(17.0)	—	(2.4)	口縁端部に 2 条の凹線文	黒・良好	外・黄褐色 吉備時代中期	
50-1	F6	SK05	土師器	甕	(12.9)	(6.9)	2.0	手づく成形 外面・指輪え	黒・良好	外・淡褐色 京都系土師器 (直臣)	
50-2	F6	SK05	土師器	甕	(13.7)	(6.3)	2.4	手づく成形 外面・指輪え	黒・良好	外・淡褐色 京都系土師器 (直臣)	
52-1	E8	SK06	土師器	甕	10.6	6.5	2.9	内・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
54-1	E8	SK07	土師器	甕	(7.2)	—	(1.7)	手づく成形	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
54-2	E8	SK07	土師器	甕	(8.5)	5.3	1.8	手づく成形	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
54-3	E8	SK07	土師器	甕	11.6	6.2	2.2	手づく成形 内・ナメナデナナ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
56-1	E4	SK08	土師器	甕	11.8	4.8	2.6	手づく成形 内・ナメナデナナ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
58-1	E4	SK09	土師器	甕	11.6	4.6	2.2	手づく成形 内・ナメナデナナ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
63-1	D9	ST01	土師器	甕	(9.2)	6.3	1.7	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
65-1	D9	ST02	土師器	甕	9.2	5.2	2.0	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
65-2	D9	ST02	土師器	甕	(9.4)	5.0	2.4	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
67-1	D9	ST03	土師器	甕	(9.5)	(4.3)	2.3	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
67-2	D9	ST03	土師器	甕	9.6	6.0	2.0	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-1	E9	ST04	磁器	甕	(8.3)	—	(4.6)	腹部外面に山水文の染付	黒・良好	外・淡白色 肥前系 1780 ~ 1810 年代	
69-2	E9	ST04	土師器	甕	—	4.4	0.8	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-3	E9	ST04	土師器	甕	—	4.2	0.8	内・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-4	E9	ST04	土師器	甕	—	4.5	0.9	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-5	E9	ST04	土師器	甕	—	4.5	0.9	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-6	E9	ST04	土師器	甕	—	4.1	1.0	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-7	E9	ST04	土師器	甕	—	4.0	0.8	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
69-8	E9	ST04	土師器	甕	9.2	4.0	2.2	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
70-1	E9	ST04	土師器	甕	9.2	4.3	1.9	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
70-2	E9	ST04	土師器	甕	9.4	4.3	1.9	外・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 (直臣)	
72-1	E9	ST05	土師器	甕	8.1	3.3	1.6	内・内・ナメ	黒・良好	外・黄褐色 京都系土師器 底部穿孔	

弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・土師器皿 (2)

遺物 番号	グリッド	遺構名	種類	器種・部位	法量 (cm)			調整・文様の特徴		色調	備考
					口径	底径	高さ	調整・手法	胎土・焼成		
72-2	E9	ST05	土師器	皿	8.2	3.4	1.6	外・内 回転ナデ、底部系切削 内・回転ナデ	胎土 密 良好	外 黄褐色 良好	在地系土師器皿 底部穿孔 (直付)
72-3	E9	ST05	土師器	皿	7.8	3.8	1.6	外・内 回転ナデ、底部系切削 内・回転ナデ	胎土 密 良好	外 黄褐色 良好	在地系土師器皿 底部穿孔 (直付)
72-4	E9	ST05	土師器	皿	8.0	3.4	1.6	外・内 回転ナデ、底部系切削 内・回転ナデ	胎土 密 良好	外 黄褐色 良好	在地系土師器皿 底部穿孔 (直付)
72-5	E9	ST05	土師器	皿	7.7	3.9	1.7	外・内 回転ナデ、底部系切削 内・回転ナデ	胎土 密 良好	外 黄褐色 良好	在地系土師器皿 底部穿孔 (直付)
76-1	D9	ST08	磁器	小杯	5.3	3.2	3.8	側面内に昌蒲・ハツ模文 のほか	胎土 密 良好	外 白色	更前系 1780 ~ 1820 年代
76-2	D9	ST08	磁器	碗 (4.1)	—	(2.6)	—	内 回転ナデ	胎土 密 良好	外 白色	更前系 1780 ~ 1810 年代
76-3	D9	ST08	土師器	皿 (7.7)	(4.6)	1.5	—	外・内 回転ナデ、底部系切削 内・回転ナデ	胎土 密 良好	外 黄褐色 良好	在地系土師器皿 (直付)
78-1	E9	ST09	土師器	皿	—	6.2	(1.7)	外・内 回転ナデ	胎土 密 良好	外 褐色	在地系土師器皿 (直付)
81-1	E9	ST10	土師器	皿 (10.0)	6.6	2.1	—	外・内 回転ナデ、底部系切削 内・回転ナデ	胎土 密 良好	外 褐色	在地系土師器皿 (直付)
83-1	E5 ~ E8	SK01	陶器	皿 (14.3)	—	(2.6)	—	内外面に輪脚を施築	胎土 密 良好	外 黒褐色 良好	更前系 1650 ~ 1690 年代
83-2	E5 ~ E8	SK01	陶器	平鉢	—	(15.2)	(3.0)	砂口彫り、内出白(手割)の複数箇所に施築文を施す	胎土 密 良好	外 黒褐色 良好	更前系 1650 ~ 1690 年代
84-1	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(1.8)	口縁端部に 2 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅲ-2 様式 (弥生時代中期)
84-2	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	(2.1)	—	(3.5)	口縁端部に 2 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅲ-2 様式 (弥生時代中期)
84-3	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(3.4)	口縁端部に 3 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅲ-2 様式 (弥生時代中期)
84-4	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	(14.5)	—	(1.5)	口縁端部に 3 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅲ-2 様式 (弥生時代中期)
84-5	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	—	(2.1)	口縁端部に 5 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅳ-2 様式 (弥生時代中期)	
84-6	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	(20.8)	—	(4.3)	口縁端部に 4 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅳ-2 様式 (弥生時代中期)
85-1	B3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(3.0)	口縁端部に 5 条の凹線文 甕底内にミヨガ井	胎土 密 良好	外 褐色	雲量Ⅳ-2 様式 (弥生時代後期)
85-2	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	(16.0)	—	(4.2)	口縁端部に 6 条の凹線文 甕底内にミヨガ井	胎土 密 良好	外 褐色	雲量Ⅳ-2 様式 (弥生時代後期)
85-3	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(5.5)	外・内 タマヘケメ	胎土 密 良好	外 黒褐色	雲量Ⅴ-1 様式 (弥生時代後期)
85-4	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	—	—	(2.7)	口縁端部に 4 条の凹線文 甕底内にミヨガ井	胎土 密 良好	外 黒褐色	雲量Ⅴ-1 様式 (弥生時代後期)
85-5	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	(15.2)	—	(4.6)	口縁端部に 4 条の凹線文 甕内にミヨガ井	胎土 密 良好	外 黒褐色	雲量Ⅴ-1 様式 (弥生時代後期)
85-6	B3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	(17.8)	—	(3.3)	口縁端部に複合口縁状 口縁端部に 2 条の凹線文	胎土 密 良好	外 黄褐色	雲量Ⅴ-1 様式 (弥生時代後期)
85-7	C3	遺構外	弥生土器	甕 (口縁部)	15.2	—	(7.3)	複合口縁状	胎土 密 良好	外 黒褐色	雲量Ⅴ-1 様式 (弥生時代後期)
85-8	C3	遺構外	土師器	甕 (口縁部)	(18.0)	—	(4.0)	外・内 ハコメ	胎土 密 良好	外 黒褐色	古墳式腰掛
85-9	B3	遺構外	土師器	甕 (口縁部)	(19.8)	—	(5.2)	口縁部は複合口縁状	胎土 密 良好	外 褐色	古墳時代中期
85-10	C3	遺構外	土師器	甕 (口縁部)	—	—	(5.8)	外・内 ミヨガ井	胎土 密 良好	外 黒褐色	古墳時代中期か
85-11	C3	遺構外	土師器	甕 (口縁部)	—	—	(5.8)	外・内 ミヨガ井	胎土 密 良好	外 黒褐色	古墳時代中期か
85-12	C3	遺構外	土師器	甕 (赤彩)	(12.4)	—	(3.5)	表面を赤へと刷りて笠瓦 上に刷り内側には赤彩	胎土 密 良好	外 赤褐色	古墳時代後期か
85-13	E7	遺構外	土師器	円筒埴輪 (22.0)	—	(2.4)	—	空腹はやや下向で 内側は輪郭の形	胎土 密 良好	外 褐色	古墳時代後期か
85-14	F6	遺構外	追跡	坪蓋 (天井部)	—	—	(1.9)	天井部は輪郭の形	胎土 密 良好	外 褐色	大正昭和初期(前半) 4 前 (古墳時代後期)

金属製品

遺物 番号	グリッド	遺構名	種類	形状	材質	法量 (cm)		重量 (g)	備考
						大きさ (cm)	重量 (g)		
38-4	C3 ~ E3	SF01	煙管(瓶)	—	直筒	長さ4.1/高さ2.0/火薬室1.3	7.40		火薬から首部に向かってよく矧ぐ瓶。
60-1	D3	SK10	武器	口縁部	鉄	長さ(8.1)/幅(6.1)/厚さ1.0	79.28		口縁部周囲のみ残存。墨受けの副部をもつ。
70-3	E9	ST04	煙管(瓶)	—	直筒	長さ(3.6)/直径0.9	1.94		小口縁と口日縁が欠損。墨罐の副品。
74-3	E9	ST05	釘	角釘	鉄	長さ(4.6)/幅0.1~0.6/厚さ0.2	2.56		梢の釘。頭部側は欠損。外側に木質が残存。
74-4	E9	ST06	釘	角釘	鉄	長さ4.6/幅0.1~0.5/厚さ0.3	2.91		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。
74-5	E9	ST06	釘	角釘	鉄	長さ4.9/幅0.1~1.3/厚さ0.3	3.60		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。
76-4	D9	ST08	毛板	—	鉄	長さ(7.3)/幅0.8/厚さ0.15	2.76		片側は欠損。外側に赤色の漆塗り。墓罐の副品。
76-5	D9	ST08	釘	角釘	鉄	長さ(3.0)/幅0.4~0.9/厚さ0.2	1.28		梢の釘。先端は欠損。外側に鍛が付着。
76-6	D9	ST08	釘	角釘	鉄	長さ(3.5)/幅0.7~1.3/厚さ0.3	2.15		梢の釘。先端は欠損。外側に木質が残存。
76-7	D9	ST08	釘	角釘	鉄	長さ4.1/幅0.6~1.0/厚さ0.2	2.70		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。
76-8	D9	ST08	釘	角釘	鉄	長さ4.9/幅0.8~1.8/厚さ0.3	3.42		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。
76-9	D9	ST08	釘	角釘	鉄	長さ5.6/幅0.8~1.2/厚さ0.3	4.52		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。
78-2	E9	ST09	釘	角釘	鉄	長さ(3.5)/幅0.7~1.4/厚さ0.2	1.16		梢の釘。頭部側は欠損。外側に木質が残存。
78-3	E9	ST09	釘	角釘	鉄	長さ4.7/幅0.4~1.7/厚さ0.2	2.93		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。
78-4	E9	ST09	釘	角釘	鉄	長さ5.2/幅1.0~1.2/厚さ0.3	3.70		梢の釘。頭部側は平坦。外側に木質が残存。

銭貨

遺物 番号	グリッド	造構名	種類	面幅 (mm)	孔径 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	残存率 (%)	質量 / 面幅	備考
65-3	D9	ST02	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	2.86	100	0.11	古寛永。
65-4	D9	ST02	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	2.29	100	0.10	古寛永。
65-5	D9	ST02	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	2.00	100	0.08	古寛永。
65-6	D9	ST02	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	2.71	100	0.11	新寛永。
70-4	E9	ST04	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	3.16	100	0.13	古寛永。
70-5	E9	ST04	寛永通寶	23.0	6.5	1.0	2.30	100	0.10	新寛永。
72-6	E9	ST05	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	3.05	100	0.12	古寛永。
72-7	E9	ST05	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	3.08	100	0.13	古寛永。
72-8	E9	ST05	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	2.75	100	0.11	新寛永。
72-9	E9	ST05	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	2.80	100	0.11	新寛永。
72-10	E9	ST05	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	2.46	100	0.10	新寛永。
72-11	E9	ST05	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	2.15	100	0.09	新寛永。
72-12	E9	ST05	寛永通寶	23.0	6.0	1.0	2.12	100	0.09	古寛永。
72-13	E9	ST05	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	1.65	100	0.07	新寛永。
72-14	E9	ST05	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	1.22	100	0.05	鏡により文字の判読不可。
74-1	E9	ST06	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	4.52	100	—	新寛永。2枚の錢貨が付着。
74-2	E9	ST06	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	2.46	100	0.10	新寛永。
79-1	E9	ST09	網既	178.0	—	—	225.02	100	—	73枚の錢貨からなる網既。網既の上部に古有り。左端の植物織維残存。
No.1	E9	ST09	寛永通寶	23.0	6.0	1.0	3.11	100	0.14	網既。新寛永。
No.1	E9	ST09	寛永通寶	24.0	7.0	1.0	2.87	100	0.12	網既。古寛永。
No.3	E9	ST09	寛永通寶	22.0	7.0	1.0	2.27	95	0.10	網既。新寛永。
No.10	E9	ST09	寛永通寶	25.0	6.5	1.0	3.53	100	0.14	網既。新寛永。背面「文」。
No.14	E9	ST09	寛永通寶	23.0	7.0	1.0	2.31	100	0.10	網既。新寛永。
No.22	E9	ST09	寛永通寶	24.0	7.0	0.9	3.17	100	0.13	網既。新寛永(鉄既)。
No.25	E9	ST09	寛永通寶	23.0	7.0	0.9	2.39	100	0.10	網既。新寛永。
No.26	E9	ST09	寛永通寶	22.0	7.0	1.0	2.88	100	0.13	網既。古寛永。
No.27	E9	ST09	寛永通寶	24.5	6.0	1.0	3.72	100	0.15	網既。古寛永。
No.41	E9	ST09	寛永通寶	23.0	6.0	1.0	2.47	100	0.11	網既。新寛永。背面「元」。
No.46	E9	ST09	寛永通寶	25.0	6.5	1.0	3.14	100	0.13	網既。新寛永。
No.55	E9	ST09	寛永通寶	26.0	7.0	1.0	3.72	100	0.14	網既。新寛永。背面「文」。
No.58	E9	ST09	寛永通寶	25.0	7.0	1.0	2.89	80	0.12	網既。新寛永(鉄既)。
No.61	E9	ST09	寛永通寶	24.0	7.0	1.0	3.48	100	0.15	網既。新寛永。
No.62	E9	ST09	寛永通寶	25.0	6.0	1.0	3.56	100	0.14	網既。古寛永。
No.64	E9	ST09	寛永通寶	24.0	6.0	1.0	3.90	100	0.16	網既。古寛永。
No.70	E9	ST09	寛永通寶	23.0	6.5	1.0	2.52	100	0.11	網既。新寛永。
No.71	E9	ST09	寛永通寶	25.0	6.5	1.0	3.19	100	0.13	網既。新寛永。背面「元」。
No.72	E9	ST09	寛永通寶	23.0	6.0	1.0	2.65	100	0.12	網既。新寛永(鉄既)。背面「元」。
No.73	E9	ST09	至道元寶	23.0	6.5	1.0	2.11	100	0.09	網既。北宋錢 995 年初鑄。模詩既か。

石製品

遺物 番号	グリッド	造構名	出土層位	種類	法量			重量 (g)	備考
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)		
13-6	G8	包含層	第 5 層	黒曜石	3.9	3.8	1.1	20.00	黒曜石の剝片、両側斜面部と下端部に剥離痕。

写 真 図 版

※遺物実測図との対応は図中に示した。(例:図版 18-13-1 は第 13 図 1 を表す)



1 調査前遠景 加佐奈子神社前から堤ノ上遺跡を望む（北西から）



2 調査後全景（北東から）

図版2 調査地近景



1 調査後近景 A3～G3 グリッド付近 (北から)



2 調査後近景 B6～F8 グリッド付近 (南西から)

土層堆積状況 図版3



1 調査区東西横断付北壁土層断面（西から）



2 調査区南西角付近南壁土層断面（北西から）

図版4 堤ノ上遺跡の遺構①



1 積穴建物跡SI01 完掘後 (北から)



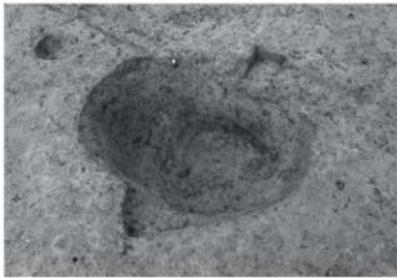
2 壁際溝・SP01 検出状況 (南西から)



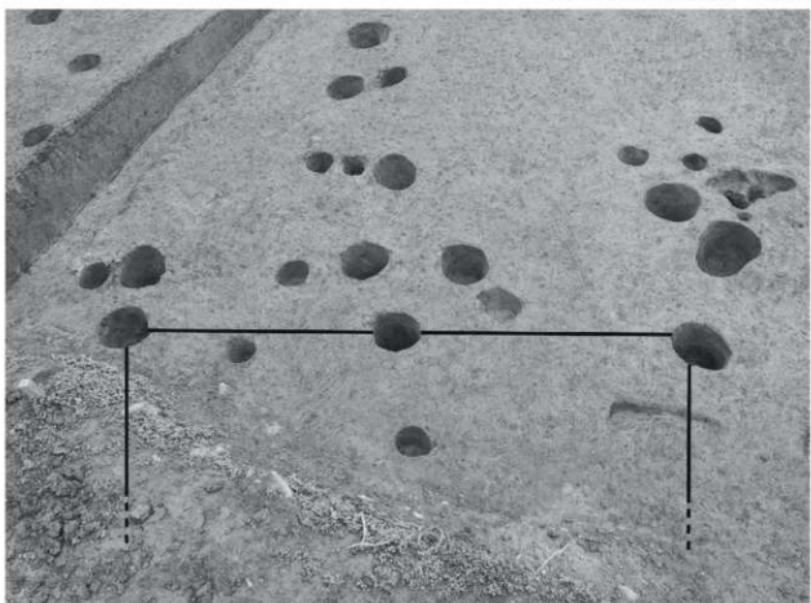
3 SP01 断面 (南西から)



4 SP01 遺物出土状況 (西から)



5 SP01 完掘後 (西から)



1 挖立柱建物跡SB01 完掘後 (西から)

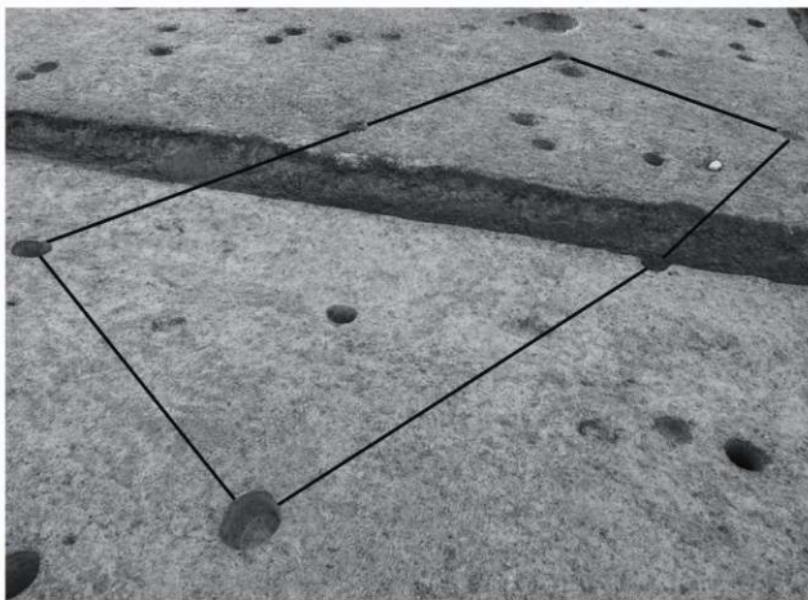


2 挖立柱建物跡SB02 完掘後 (西から)

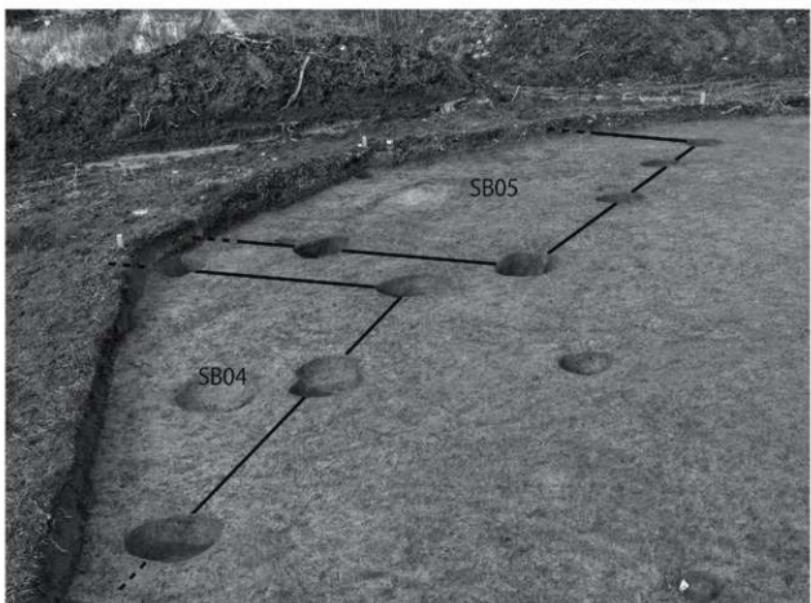
図版6 堤ノ上遺跡の遺構③



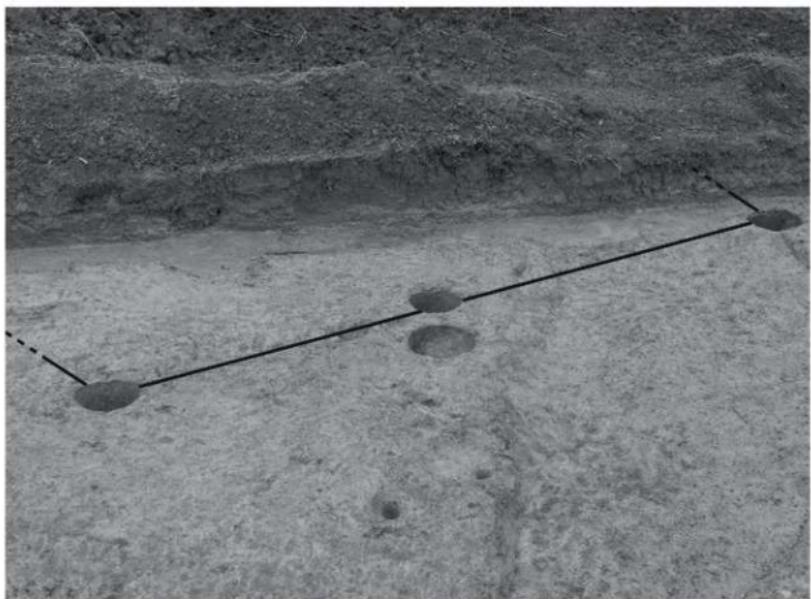
1 加工段3 完掘後 (南西から)



2 据立柱建物跡 SB03 完掘後 (北から)

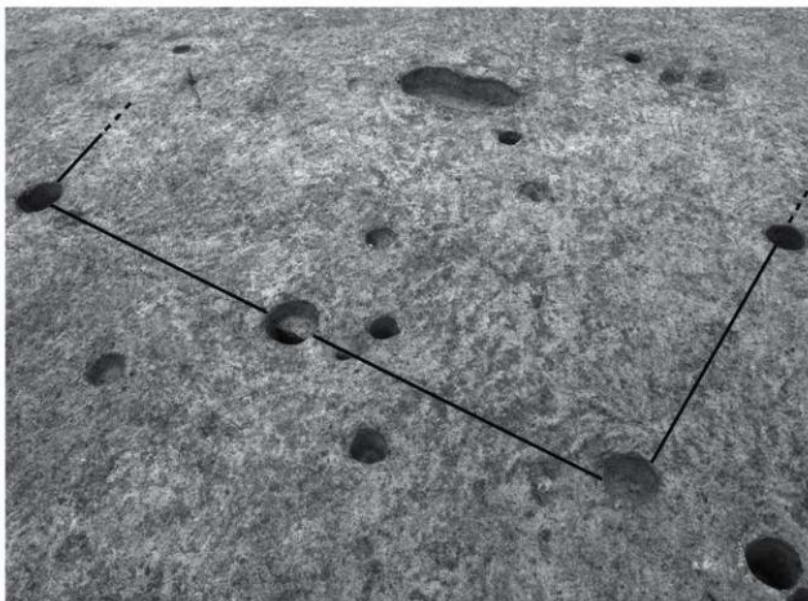


1 挖立柱建物跡 SB04・05 完掘後 (南から)

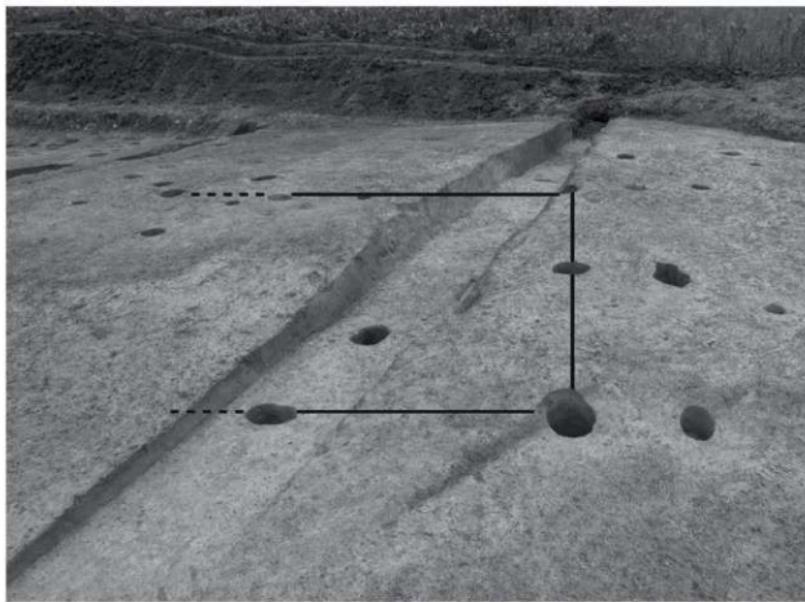


2 挖立柱建物跡 SB06 完掘後 (北から)

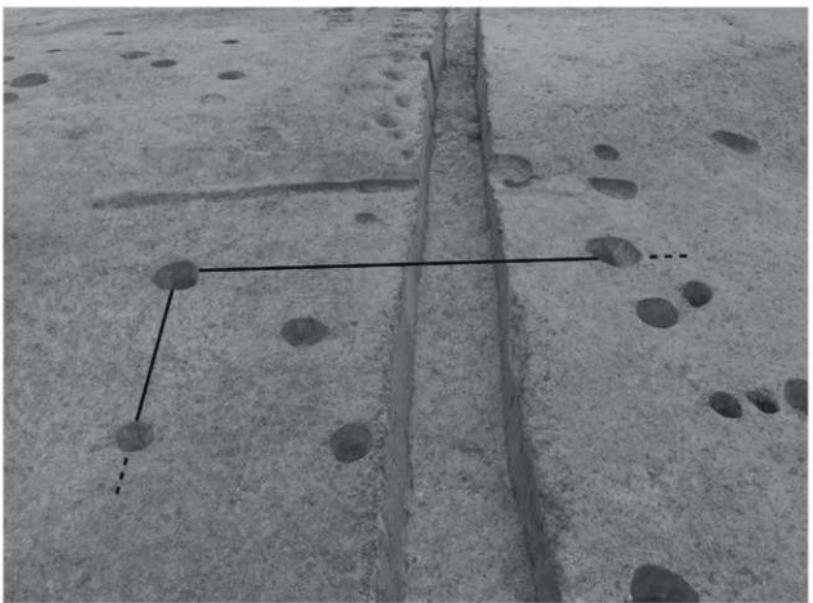
図版8 堤ノ上遺跡の遺構⑤



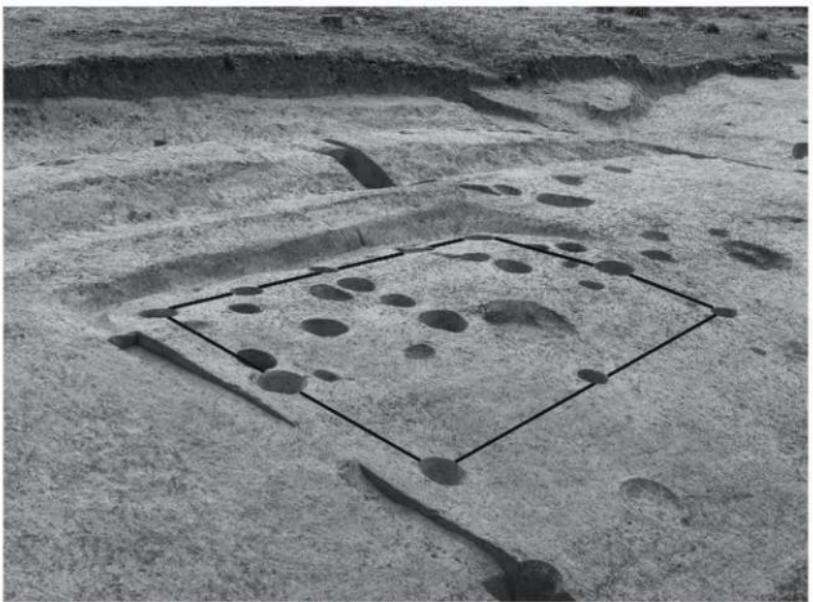
1 挖立柱建物跡SB07 完掘後 (西から)



2 挖立柱建物跡SB08 完掘後 (北西から)

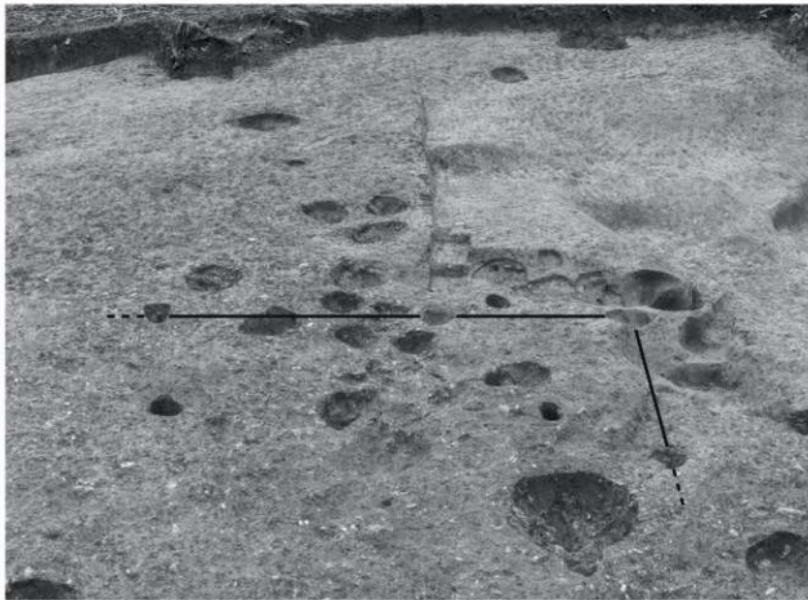


1 挖立柱建物跡SB09 完掘後 (西から)

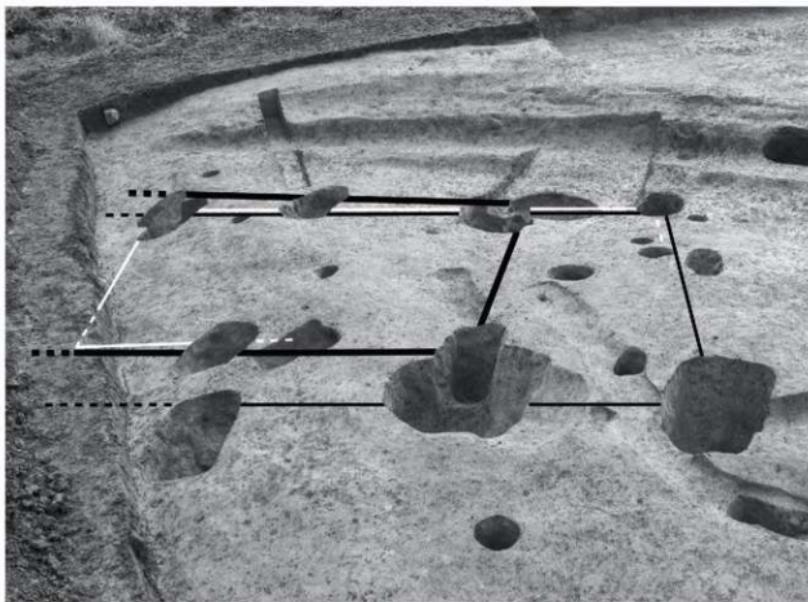


2 挖立柱建物跡SB10 完掘後 (北西から)

図版10 堤ノ上遺跡の遺構⑦



1 掘立柱建物跡SB11 完掘後 (北西から)



2 掘立柱建物跡SB12 完掘後 (西から)



1 SB01(柱穴SP16) 遺物出土状況 (第18図-1)



3 自然路NR01 完掘後 (北西から)



4 溝SD01 完掘後 (西から)



5 溝SD02 完掘後 (西から)

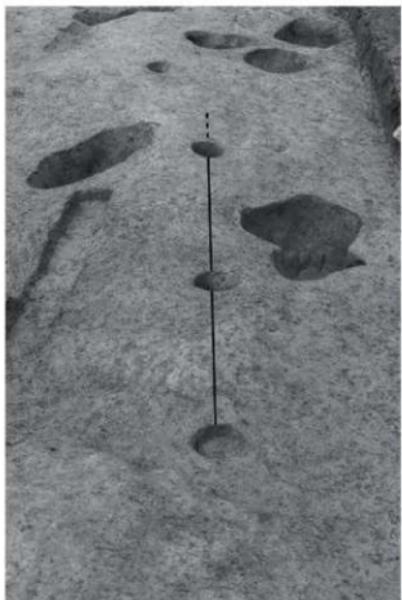
図版12 堤ノ上遺跡の遺構⑨



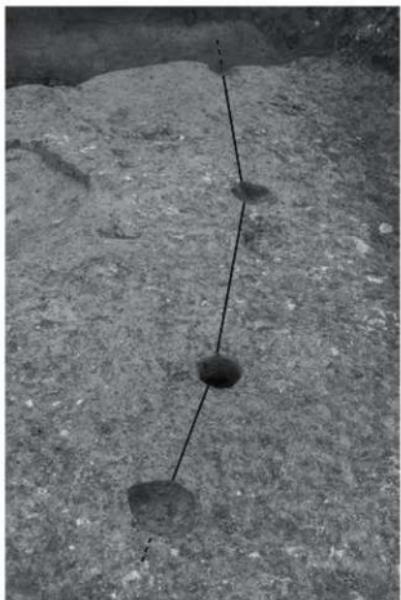
1 道路SF01・02 完掘後 (北から)



2 道路SF03・04 完掘後 (西から)



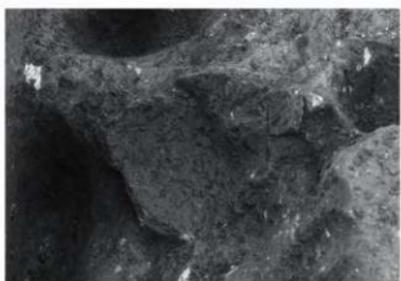
1 横SA01 完掘後 (東から)



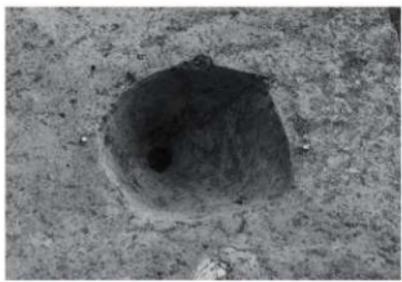
2 横SA02 完掘後 (北東から)



3 土坑SK01 完掘後 (西から)



4 SK01 遺物出土状況 (第44図-1)

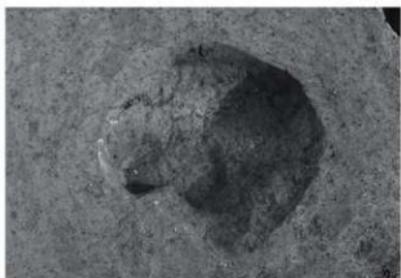


5 土坑SK02 完掘後 (西から)



6 土坑SK03 完掘後 (西から)

図版14 堤ノ上遺跡の遺構⑪



1 土坑SK04 完掘後 (西から)



2 土坑SK05 完掘後 (西から)



3 SK05 遺物出土状況 (第50図-2)



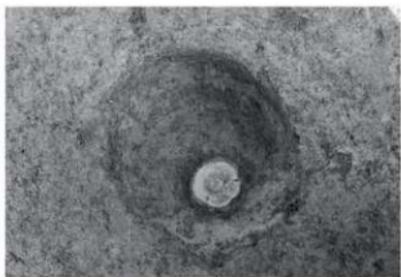
4 土坑SK06 完掘後 (西から)



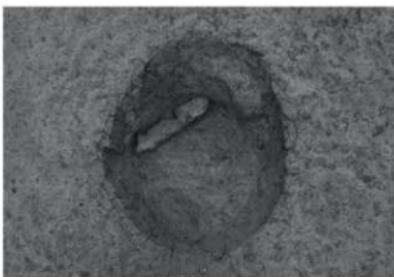
5 土坑SK07 完掘後 (北西から)



6 土坑SK08 完掘後 (西から)



7 土坑SK09 完掘後 (西から)



8 土坑SK10 完掘後 (西から)

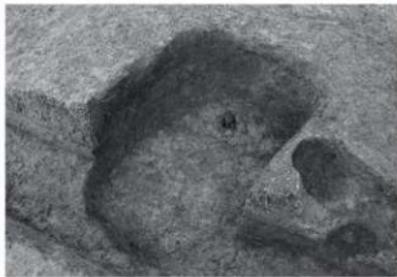


1 近世墓群 ST04～11 検出状況（南東から）



2 近世墓群 ST04～11 完掘後（南東から）

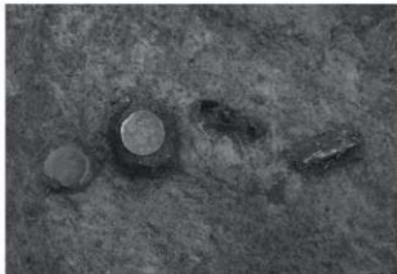
図版16 堤ノ上遺跡の遺構^⑯



1 墓壙ST01 完掘後 (南から)



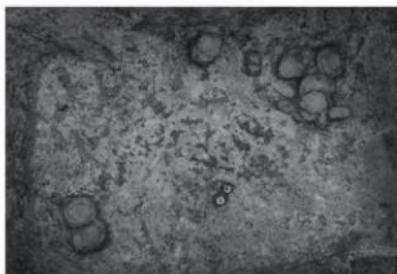
2 墓壙ST02・03 完掘後 (南から)



3 墓壙ST02 副葬品出土状況 (西から)



4 墓壙ST04 完掘後 (西から)



5 墓壙ST04 副葬品出土状況 (西から)



6 墓壙ST05 完掘後 (西から)



7 墓壙ST05 副葬品出土状況 (西から)



8 墓壙ST06 完掘後 (西から)



1 墓壙ST07・08 完掘後（北から）



2 墓壙ST09 完掘後（西から）



3 墓壙ST09 縮銭出土状況（北西から）

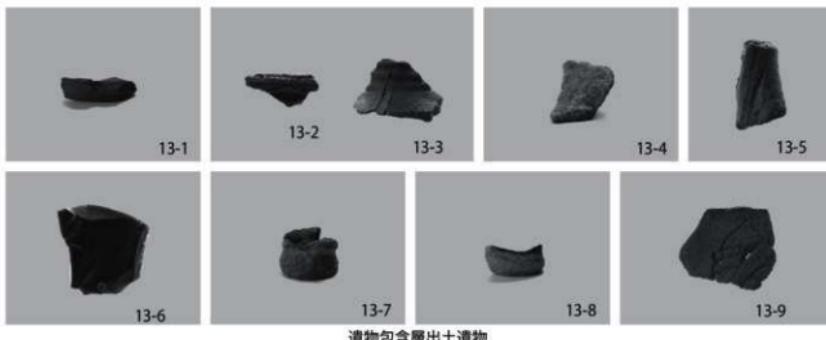


4 墓壙ST10・11 完掘後（東から）



5 SX01 完掘後（北東から）

図版18 出土遺物①



遺物包含層出土遺物



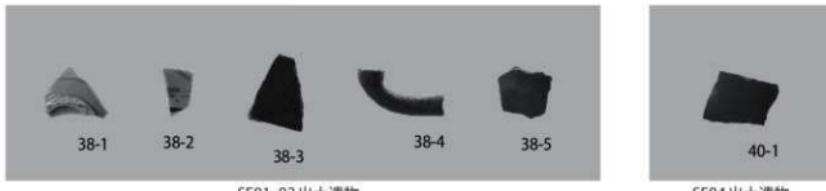
Si01(壁際土坑SP01)出土遺物



SB01出土遺物

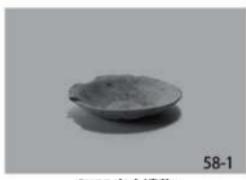
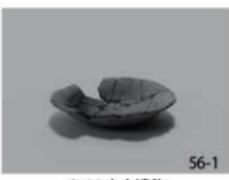
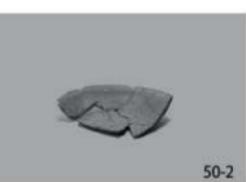
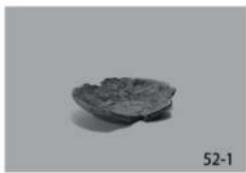
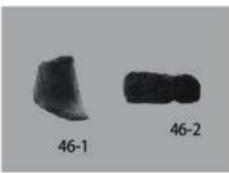
SB03出土遺物

SB10出土遺物

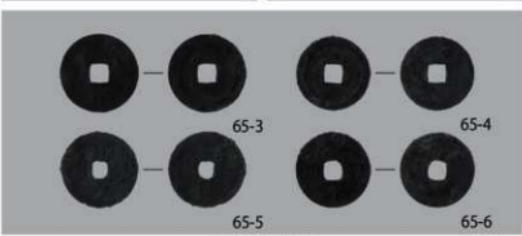


SF01-02出土遺物

SF04出土遺物

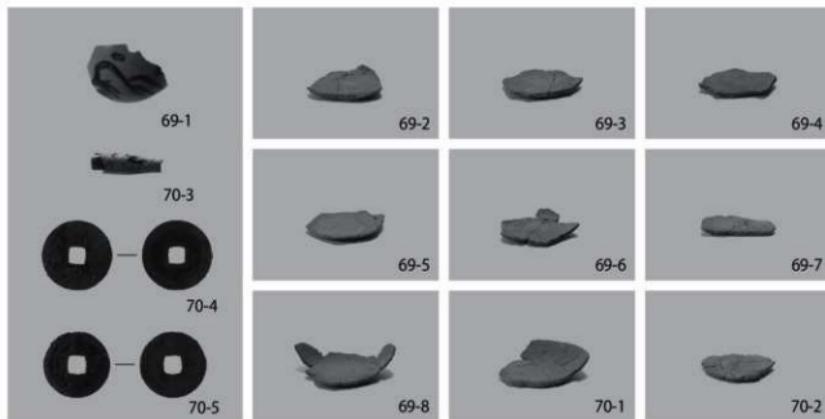


ST01出土遺物



ST02出土遺物

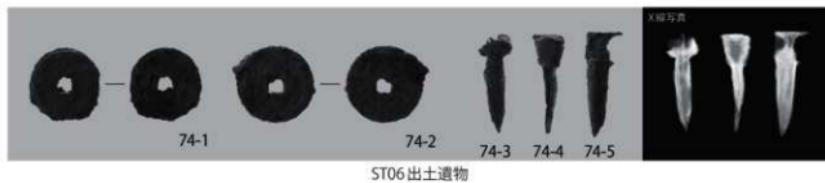
図版20 出土遺物③



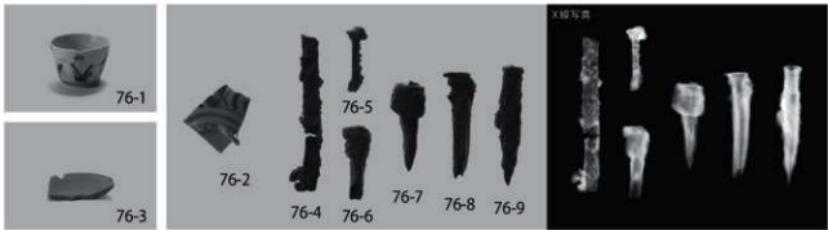
ST04出土遺物



ST05出土遺物



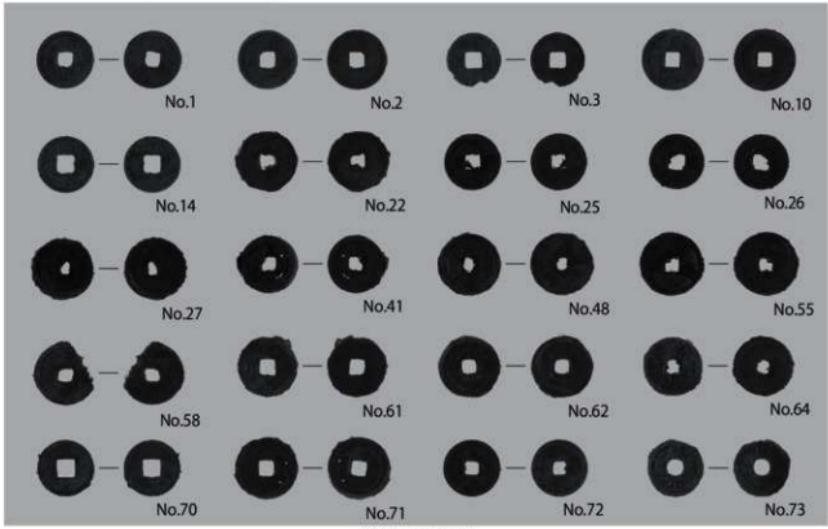
ST06出土遺物



ST08出土遺物

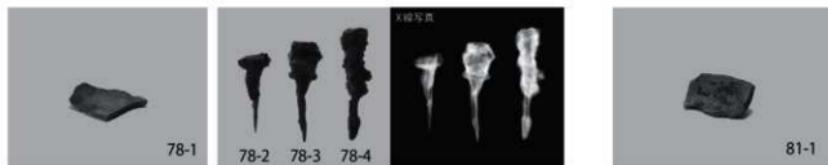


79-1



ST09出土遺物(1)

図版22 出土遺物⑤

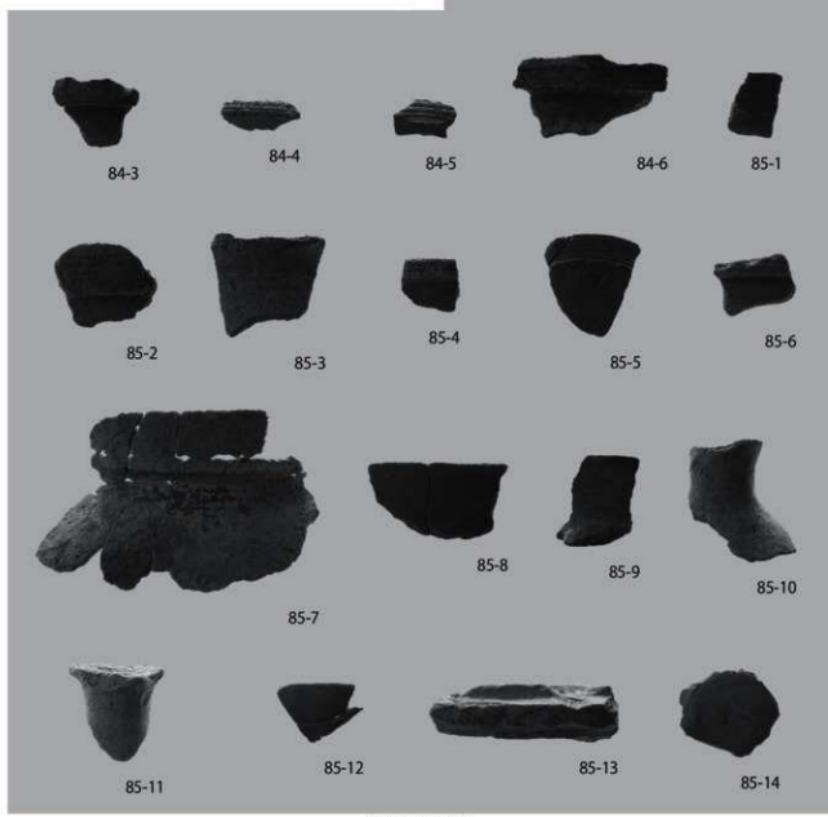


ST09出土遺物(2)

ST10出土遺物



SX01出土遺物



遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つつみのうえいせき						
書名	堤ノ上遺跡						
副書名	L. C. C. ういんぐ移設事業に伴う発掘調査報告書						
卷次							
シリーズ名	松江市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第192集						
編著者名	小山泰生						
編集機関	松江市 (松江市歴史まちづくり部 まちづくり文化財課 埋蔵文化財調査室) 〒690-8540 島根県松江市末次町86番地 TEL: 0852-55-5284						
所在地	公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団 (埋蔵文化財課) 〒690-0401 島根県松江市島根町加賀1263-1 TEL: 0852-85-9210						
発行年月日	2019(令和元)年9月						
所取遺跡名	所在地	コード		北緯	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	東経			
堤ノ上遺跡	しまねけんまつえいせき 島根県松江市 東持田町 236番地外	32201	D-1183	35° 29' 59" 133° 04' 56"	20180924 ～ 20190320	3,800m ²	福祉施設 建設工事
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
堤ノ上遺跡	集落跡 近世墓	弥生時代 古墳時代 古代 江戸時代	竪穴建物 掘立柱建物 加工段 溝 道路 柵 土坑 墓壙	弥生土器 土師器 須恵器 近世陶磁器 近世土師器 金属製品 錢貨	堤ノ上遺跡は朝駒川中流域に広がる川津・持田平野に突出した丘陵上に位置する弥生時代から近世に至る複合遺跡である。当遺跡の調査では、古墳時代中期および古代の掘立柱建物を主体とした集落跡を検出し、当該期の集落景観を知る上で貴重な資料を得た。 また、江戸時代の遺構として近世墓群を検出し、当該期の墓制に関する基礎的データを得ることができた点も注目される。		

松江市文化財調査報告書 第192集

L.C.C. ういんぐ移設事業に伴う発掘調査報告書

堤ノ上遺跡

令和元(2019)年9月

編集・発行 島根県松江市
公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団

印 刷 有限会社 高浜印刷
島根県松江市東長江町 902-57